

一文 芸一

草の丘

第 28 号



2025 年 6 月 印旛文学の会

URL <https://bungeikusano-oka.raindrop.jp/>

文芸

草の丘 第二八号 (二〇二五年 六月)

目次 草の丘 第二八号

《詩》

雨が上がったようだね	中川とら……………	一
哲学者になれなかった		
猫のように	ねこまくら……………	四

《短編小説》

鎌倉最後の日	安達真魚……………	九
--------	-----------	---

《エッセイ》

凡愚の戯言 二〇二五年夏	畑中康郎……………	三二
トワイライト世代 その6	安達真魚……………	七四

《連載小説》

この前・この間―第6回―	いんば華子……………	八九
熱血の蘭医 ポンペ(改題)	―第2回―	
香取 淳……………		一〇二



雨が上がったようだね

中川とら



一、風がいつから吹きはじめたのか

小さかったわたしは、わからない

しかし、その時

母は一編の詩をそらんじてくれた

わたしは、つづきを想像して聞いた

二、雨がいつからふりはじめたのか

小さかったわたしは、思いだせない

しかし、その時

父が好きな音楽を聴いていた

わたしは壮大な旋律に合う

風景を捜して頭に描く

三、雪がいつからふりはじめたのか

小さかったわたしは、覚えていない

しかし、その時

母は希望の歌を口ずさんでいた

わたしは詞の意味を

頭の中でぼんやり考えたりした

四、日がいつから差しはじめたのか

小さかったわたしは、記憶にない

しかし

父も母も

雨が上がったようだね

きまつてそう言った

わたしは、何かが終わったような不思議な感覚で

まぶしい外の光を見たものだ

五、父や母と過ごした刹那は

多くの詩人のことばを早くして味わった日々だ

そして今、自分自身も

つたない詩を綴るようになった

六、わたしの人生がいつ完成するか

その日はすでに音もなく近づいている

父と母の

雨が上がったようだね

と言う声が聞こえてくるのだろうか

◇

哲学者になれなかった猫のように

ねこまくら

哲学者になれなかった猫のように

考えているふうを装いながらお茶を飲む

猫はなぜ哲学者になれないか

猫はなぜ哲学者になろうと試みないか

そんなこんなを

考えながら

猫の風を装いながらお茶を飲む

そんなこんなその奥に

思索を進める言葉も技もないから

そんなこんなそんなこんなと

意味なく無駄に言葉を重ねる

猫が怒る

意味ない言葉は呟かぬ

必要があるから鳴くのだと

あとは沈黙がいちばんと

ふん沈黙か

沈黙か

だから哲学者になれなかったのだぞと

猫に向って虚しい攻撃

哲学者になれなかった猫に倣い

凜と猫背を伸ばして座り

思慮深いふうを装いながら

お茶を飲む

思索する猫

私はひととき

思索する猫のように

往来を眺める

四角い窓の片隅に

頬杖をついて

赤い口紅を引き

耳飾りなど付けて

20年も前に買った

花柄のワンピースなど着て

あとは

いかにも感慨深いふりをして

ときどき小さく頷いて

素足をまるでしっぽのように

大きく振って組み替える

雑音は耳が遠くて聞こえない

白内障の瞳で世間はぼんやり

さて何を考えようかと考える

どお？

思索する猫に見えるでしょ

誰にもわからない

誰にも理解されず

誰に見られることもなく

誰も気に留めることもなく

赤い口紅は人を食ってきた証か

輪っかの耳飾りは嫌いな首輪

色褪せた花柄は無残な毛並み

このまま消えることができたなら

猫のように思索しながら

猫のようにいなくなれたら

私は猫

ワタシハネコと4度唱え

シサクしたよと

ほくそ笑む

からっぽのアタマ

すなわち無であり

無駄であり

舌なめずりで

紅も消え

猫も消えて

私が残る

猫になる

ちいさなあなぐらのなかに

すわっている

夜になると

あなぐらも

よぞらも

みわけがつかないから

まるで

うちゅうのなかに

ただよっているようだ

からだをくねらせ

つまさきを舐めてみる

こつばんをずらしちゃ

いけないよ

そこがぬけて

ならくだよ

こえにならないこえが

わたしを支配したがる

こえにならないこえで

わたしは みやあ と

ないてみる

よあけがくるのが

おそろしく

あけの明星を

みつけたとたんに

めをつむる

ひがしのそらが

まばゆいと

めをとじているのに

ひかりが滲む

あなぐらの

ならくのくちに

くちづけし

いきもできぬほどに

くちづけし

ならくのとけあい

やみにたゆたう

背に逃れることのできぬ日差しのぬくもり



鎌倉最後の日

安達真魚



鎌倉歴史文化交流館

頼頭の出仕

頼頭よりあきは、正和五年（1316）六月諏訪大社の大祝おおほつり諏訪盛重の末子として、信濃国諏訪で生まれた。諏訪頼重は、頼頭の長兄にあたる。物心ついたときから、大祝家の子供として、神事、学問、武芸、歴史、文化など多方面にわたって、人一倍励んできた。頼頭の持つ天性の賢さは卓越していたので、子供ながらに周囲から一目置かれていた。

頼頭が十一歳になった頃、一族の中で、頼頭を鎌倉に出仕させる話が持ち上がった。鎌倉の諏訪氏は、分家の諏訪直性じきしょうが当主で、北条得宗家の御内人みうちびと（得宗被官）である。（得宗というのは、もともと北条義時の法名であり、義時の直系子孫の家を「得宗家」と呼び、得宗の被官（得宗家の家臣）を御内人と呼ぶ）同じ御内人の長崎氏に次ぐ地位を務めている。頼頭の出仕は、諏訪大祝家として、優秀な人材を育て、鎌倉への奉公をより充実させようとするものであった。

嘉暦元年（1326）初秋、頼頭は、供の者とともに生まれ育った諏訪を後にして、鎌倉佐助ヶ谷の諏訪家の宿館へ向かった。屋敷は、源氏山から南側に延びた尾根と東側平地の際にあった。古代に郡衙ぐんが（郡司の役所）があった場所の近くで、もともとは、この地方の中心部にあたる場所であった。屋敷のすぐ隣には諏訪神社が祀られており、鎌倉の諏訪氏が主管している。直性と一族の盛高らは、首を長くして到着を待っていた。

「待ちかねていたぞ、頼頭。大きくなったの。いくつになった。」

直性は、目を細めて歓迎した。

「十一歳になりました。叔父上様も、皆様もお元気そうで、何よりでございます。」

歳の割には成人のような受け答えだった。

その後は、諏訪の様子や一族の安否、思い出など、しばらくの間、話が弾んだ。肝心の頼頭の今後のことについて、盛高が説明した。

「出仕先は太守様の弟、泰家様だ。出仕日は、そなたが鎌倉に到着してから決めようと思っていたので、まだ決まっておらぬ。直に決めようと思っている。」

太守様とは得宗北条高時である。頼頭は、出仕先が北条泰家ということは聞かされていたが、詳細は把握していなかった。盛高自身は、諏訪の屋敷に居住している御内人ではあるが、泰家の直の配下になっていた。頼頭もその一人として出仕することになる。ただ、まだ若く、成人するまで武士として修業するため、泰家預かりとし、泰家の屋敷に寄宿することになっていた。

「出仕までには、まだ余裕がある。それまでゆっくり休んだ方がいい。それと、鎌倉のまちをよく見ておいた方がいい。」
盛高が、自らその案内をすることになった。

次の日の朝、盛高と頼頭は諏訪神社をお参りした後、鶴岡八幡宮を訪れた。そこから見える鎌倉のまちは、三方を山に囲まれ、南方は相模湾に面した土地で、狭い土地に武家屋敷

をはじめとした建物が密集していることが手に取るようにわかった。鎌倉は百年以上続く武家の都であり、政治の中心である。地方生まれの頼朝からみれば、すべてが異次元の世界であつた。南へ向かつて一直線に続く若宮大路の鳥居の先に海が見えるだけでも感動できた。これまで、何度も伝え聞いてきたことであるが、なぜ、どんな方法でここに武家の都を築かれたのか改めて興味がわいてきた。

鎌倉のまちは周囲が小高い山と駿河湾に囲まれた比較的平坦な土地で、山からは滑川などの河川が流れ込んでいる。武家屋敷などは、もともとあつた田畑の上に建設されたものだ。武家の都としては、それほど広くない土地なので、どうしても建物が密集する。また、土地不足もあつて、山の上や谷も利用されることが多い。「扇ヶ谷」^{おうきがやつ}、「比企ヶ谷」^{ひきがやつ}など「谷戸」^{やと・やつ}と呼ばれる地名も多くある。

二人は、若宮大路を南に向かって歩くことにした。若宮大路は、鶴岡八幡宮とともに鎌倉の象徴であり、まちづくりの

骨格をなしている。幅30間ほどの大きな通りで、両側は土手に囲まれている。土手は防御のためのものと推察できるが、東側の土手の方が少し高くなっているのは、幕府や有力者の建物が東側にあるためだ。東側の建物も西側の建物も若宮大路側に門は見当たらない。土手があるため、建物はよく見えなかったが、頼朝にはそれぞれの建物が立派に見えた。ただ、華美なものは見当たらず、質素な造りの屋敷が多いことを感じた。その時点での頼朝は、質実剛健なこの時代の流れなのか、幕府の方針なのか、その理由までは考えることはできなかった。少し歩くと、東側に若宮大路幕府と呼ばれるひときわ立派な屋敷が見え、盛高から将軍が居住している屋敷であると説明を受けた。

そのまま、若宮大路を相模湾方向に進むと、建物が武家屋敷から民家や商店などに変わってきた。若宮大路と交差する大町大路までいくと、そこは「下の下馬」^{しもげば}であり、若宮大路の土手が途切れている。その辺りは色町の入口であり歓楽街

であつた。その先には多くの商工業者や庶民が住んでおり、武家屋敷が山の手であれば、それに対する下町といえる地域であつた。商店を営む地域に関しては、幕府の統制があり、定められた七か所のみであり、ここもその一つであつた。さらに、大町大路を東側に入り、海岸に向かって行くと、材木座と呼ばれる、材木を商う店が並ぶ地域があつた。このあたりは、武家屋敷や神社仏閣の建築に使われる木材の集積地であつた。材木座は相模湾の由比が浦と呼ばれる海岸に面してゐた。

この海岸からは、東に三浦半島が見える、近くに人工港湾である若賀江島わかえのしまがある。若賀江島は、北条泰時の時代に築かれた人工港で、海から鎌倉への物流の入口であつた。西には、由比ヶ浜、稲村ヶ崎が見える。由比ヶ浜には、繋留されているものを含め、数多くの船が確認できた。由比ヶ浜は漁師が多く住んでいる海産業中心の村であつた。

ここまできて、頼頭は鎌倉の有り様を少しは理解できたようだ。

「鎌倉は興味深いまちです。まだまだ見ておくことが沢山ありそうです」

「そのとおりだ。鎌倉は奥が深い。名所、旧跡も多い。鎌倉五山、大御堂、二階堂永福寺、長谷寺、大仏、まだまだある。浄土宗、臨済宗、日蓮宗、鎌倉は仏教布教の中心になっている」

盛高は得意げに言った。若賀江島の大船を指して、

「あれを見よ。あの港にはいつも異国からの珍しく高貴なものが沢山入ってくる。その窓口になっている。これから鎌倉で暮らすことになれば、いつでも見て歩く機会がある」

頼頭は、大きく頷うなずいた。そして、鎌倉という土地に対する期待で胸が一杯になった。

頼頭の出仕する日はすぐにやってきた。盛高に伴われながら、山内やまのうちにの泰家の屋敷に向かった。諏訪氏の居館こがくろから、巨福呂坂切通を登り、建長寺を過ぎてしばらくすると、明月谷の入口がある。泰家の屋敷は明月谷の山あいにあつた。ここは、

北条時頼の頃より北条得宗家の山荘として使用されてきた敷地であり、閑静な場所であった。屋敷ではすでに泰家が待ちかねていた。盛高はいつもどおりの挨拶後、頼頭にも挨拶させた。

「諏訪頼頭にございます。若輩者ですが、なにとぞよろしくお願い申し上げます」

泰家は、頼頭の生い立ちをすでに聞いていたので、とくに聞き質すことはなかったが、

「弓馬は達者か。得意なものはあるか。」

「はい、弓使いには自信があります。」

「ほう、さようか。弓の名人になるには、体力もさることながら、忍耐心、探求心、向上心も必要じゃ。楽しみじやの。よろしく頼むぞ」

泰家にとっては、十歳くらい年下の頼頭は、かわいい弟分のようなものである。配下として迎えることができ、将来が楽しみになったようであった。

頼頭は、まだ年齢的に半人前なので、成人するまで泰家預

かりとなり、この屋敷に寝泊まりして、武芸、学問に日夜研鑽することになる。ひとしきり話しが終わった後、家人から屋敷内で生活する上での決まり事を説明され、寝泊まりする部屋なども案内された。その後、泰家から、一緒に母上のところへ行くと声がかかった。母上とは、大方殿かくかいえんじょう（寛海円成、以下、円成尼）で、安達一族の安達泰景（泰宗）の娘である。故北条貞時の側室であり、得宗北条高時と泰家の生母であった。円成尼は、この山荘の主として、泰家とは、別の棟に居住していた。

泰家らが山荘の客間で待っていると、円成尼は、年端のいかない娘と侍女を従えて現れた。泰家が頼頭を紹介した。

「母上、こちらが諏訪頼頭殿でございます。こたび私のもとへ諏訪より出仕して参りました。十一歳になります」

円成尼は、頼頭を凝視しながら、

「こなたが、諏訪のご子息であるか。かように遠い鎌倉までよくおいでくだされた。お疲れ様でしたな」

「お氣遣いありがとうございます。一生懸命ご奉公させていただきます」と存じます」

「なるほど、十一歳にしては殊勝なもの言いだ。楽しみだな、泰家」

泰家の方を向いて、同意を促した。

「さようでございます。諏訪家でもいい人材を遣してくれました。ありがたいことです」

円成尼は、側にいる娘の方を向いて、

「この姫は、瑠衣（い）と申す。姫、良い遊び相手ができそうだな」

その娘は、笑顔で頷いた。頼頭も頭を（は）べこりと下げ、それに答えた。頼頭としてもその場で素性を質すことは憚（はば）れた

が、姫と呼んでいるからには、名のある武家の娘であることだけは推察できた。ただ、泰家や円成尼、瑠衣がどのような人物で、どのような立場の人たちなのかについては、その時点で、頼頭が詳しく理解しているわけではなかった。

円成尼との面談も終わって、頼頭はほっとした。出仕する

ことが決まっているとはいえ、北条一族の身分の高い人たちとの面談は、緊張の連続であった。頼頭は大きな解放感を感じた。これからは、与えられた勤めに励み、将来に向かって、自分自身の身を立てることが使命であった。それが、鎌倉に送り出してくれた家族や一族の人たちへの恩返しになると、子供心に考えていた。

これで、頼頭の山内での勤めが始まることになり、諏訪から鎌倉まで供をしてくれた家臣も安心して帰郷することができる。頼頭は知らない場所で暮らすことになるが、近くの実家ともいえる諏訪の屋敷もあるので、郷愁に駆られることも少ないだろうと、子供ながら自分を納得させていた。

安達氏

円成尼が出自した安達氏は、もともと北条得宗家とは親密な関係にある有力御家人であった。北条時頼の母は安達一族

の娘であり、その嫡子の時宗は、安達氏の甘縄の屋敷で生まれている。時宗以降、得宗の貞時、高時には、すべて安達一族の娘が嫁いでいる。安達氏をめぐっては、頼頭が出仕するまえに、いくつかの事件が起きていた。

時代は少しさかのぼる。

貞時が執権に就任して間もなく、若年の貞時を支えていたのは、時宗時代から幕府を支えていた得宗外戚の安達泰盛であった。泰盛は、時頼の従兄弟であり、安達氏の家督を継いでいた。貞時時代には「弘安徳政」など、幕府の改革を行っている。弘安八年（1285年）十一月、貞時の乳母^{めのとぶ}夫である内管領平頼綱が、泰盛の進めた「弘安徳政」に反対し、讒言により自害に追い込んだ。泰盛一族は尽く討たれ、各地の泰盛派も追討された。これによって、頼綱が政権の運営を担うようになった。これを霜月騒動と呼ぶ。

しかし、正応四年（1291）、今度は、貞時が頼綱の政策を否定し、頼綱を滅ぼした。平禅門の乱と呼ばれる。乱の後

に、安達一族は復権することになった。円成尼は貞時に側室として嫁ぎ、安達一族の生き残りで、泰盛の弟の子孫である安達時頭も復権した。さらに、時頭の娘は、後に高時に正室として嫁いだ。溜衣は時頭の末の娘である。頼綱の弟の子孫である長崎氏も再び取り立てられることになり、その後、両家ともに得宗家を支えることになった。

貞時は、嘉元三年（1305）四月の嘉元の乱（北条家内部の権力闘争）をきっかけに、政治の舞台から降り、応長元年（1311）に死去した。得宗は高時が後継し、長崎高綱（円喜）と安達時頭が後見して政務を主導した。

その後、高時は、正和五年（1316）に十四歳にして執権に就任した。

高時が得宗を引き継いで、執権に就任したとはいえ、幕府の政務は長崎氏、安達氏、北条庶流などによる運営により、子細なく行われていた。高時は健康面でも問題があったが、もはや得宗高時が政務に関わることは求められていなかった。幕政から遠ざけられた高時が興味の対象にしたのは、仏

画、学僧たちとの交流など仏教知識に関することと、闘犬、田楽など遊興についてであった。

高時が執権に就任した年の2年後、文保二年（1318）二月、京では、後醍醐天皇が即位した。その六年後の元亨四年（1324）九月、後醍醐天皇は、日野資朝・俊基らの側近を集め、討幕を計画するという、正中の変と呼ばれる事件が起こった。これは、密告により事前に発覚し、計画は破綻した。資朝・俊基は鎌倉へ送られ、資朝は流罪、俊基は罪を問われず京に戻された。首謀者の後醍醐天皇は無関係であると主張し、罪を免れた。一度目の討幕計画であった。

嘉暦元年（1326）三月、高時は出家し、執権を辞した。

頼頭が鎌倉に出仕する数か月前のことであった。

得宗家とその周囲では、執権の後任と得宗の後継者について内部抗争が起きた。内管領長崎高資は、御内人の五代院宗繁の妹と高時の間に長子邦時が前年十二月に生まれている

ので、これを得宗家の後継者として推し、中継ぎの執権として金沢貞頭を執権に推挙した。一方で、円生尼や安達時頭ら安達一族側は、御内人を母とする邦時の家督相続を阻止するため、高時の弟で円生尼の子泰家を高時の後継として推していた。

そのような状況で、貞頭が長崎氏の勧めで執権に就任した。しかし、円生尼ら安達一族はこれに不服であり、同日泰家も恥辱として出家し、貞頭の執権就任に不満を抱く多く人も、泰家に続いて出家した。さらに憤った泰家と円生尼ら安達一族が貞頭を殺そうとしていると風説が流れ、貞頭は在職十日ほどで執権を辞職し、出家してしまった。その後、泰家と円生尼ら安達一族の憤りを恐れ、しばらく執権のなり手がなかったが、最終的に赤橋守時が執権に就任することになった。

嘉暦の騒動と呼ばれる。

円生尼は、安達氏の出自であり、政務には直接関与しないものの、安達一族の利害を常に考えていた。得宗の嫁には安達氏から立てることが本筋であり、安達時頭の娘を高時の正

予兆

室になったのは思惑どおりであった。しかし、この娘がまだ男子を生んでいないのが誤算であった。邦時にしても、その後生まれた時行にしても、側室の子であった。安達氏以外の娘の子である邦時の誕生には、円生尼も安達一族も不快の態度を示していた。

円生尼には、得宗家の継承について、以前より一つの宿望があった。執権の後継を泰家とし、ゆくゆく得宗の家督も泰家が継ぐことだ。実現すれば、病弱な高時に代わって、泰家が幕政の実権を得宗家に戻すことができる。その後、改めて安達氏の娘を嫁がせたいと考えた。円生尼は、安達時頼の娘である瑠衣を幼いころから預かっていた。預かる名目は行儀見習いであったが、泰家の得宗就任の目途が立てば、泰家に嫁がせたいという思惑であった。しかし、泰家の出家により、執権就任の実現の見込みがなくなったため、瑠衣を嫁がせることも沙汰止みの状態となっていた。

泰家邸での頼頭の勤めは、堅苦しいものではなかったが、規則正しいものであった。起床、就寝の時間も決まっていた。部屋は他の家人との相部屋であり、目上の者に対する礼節も欠かせなかった。日課の中心は、武芸と学問であり、それも時間が決められていた。体を動かすことも、書物を読むことも嫌いでない頼頭にとっては、充実した毎日であった。

自由に使える時間もあった。祭りや年中行事があるときには、暇をもらえることがあった。諏訪の屋敷に行ったときは、諏訪神社への礼拝は欠かさなかった。そのついでに、鎌倉のまちを見物するのが楽しみで、小さな路地にまで入り込んでまちの様子を観察した。少しずつ鎌倉のまちに精通していくことが喜びになっていた。年に何度かは、八幡宮の東方の広場で闘犬が行われるので、もの珍しさに何度か見に行った。

瑠衣とは、同じ敷地内にいたので、日常的に顔を合わせて

いた。頼頭の武道の稽古を、瑠衣が近くで眺めていることも多かった。稽古の終る頃を見計らって、遊びの相手をさせられることもたびたびあった。瑠衣は、双六や貝合わせなどの屋内の遊びが得意で、大人とも互角の勝負をした。屋外の遊びでは、こま回し、竹馬、毬杖、羽子板、小弓、蹴鞠など、いろいろな種類があったが、瑠衣には年齢的に無理な種目が多かった。瑠衣は、頼頭からすれば、かわいい妹分であり、かけがいのない存在になっていた。頼頭と瑠衣は、傍から見ると兄妹ように見える。何かお祝い事でもあれば、円生尼から食事に招かれることも多く、そのとき瑠衣は頼頭の隣に着座すると決まっていた。

あるとき、頼頭は瑠衣の正確な年齢を知りたくて、干支を訊いてみた。

「そなたは、いつ生まれたのじゃ」

「未ひつじの生まれよ。己未つちのとひ。五月さつきに金沢で生まれた」

頼頭は辰年生まれなので、自分より三歳年下なのだと分かった。ついでに、瑠衣は、そのまま子供なりに自分の素性を

明かした。父親は安達時頭、母親は金沢政頭の娘で、金沢貞頭の姪にあたる。母親の実家で生まれたらしい。

元徳三年（1331）四月、後醍醐天皇は、再び討幕を計画した。これも、密告のため事前に発覚した。日野俊基としもとや僧の文観・円観らが捕縛され、鎌倉に送られた。このときも後醍醐天皇にまで処罰の手が及ばなかった。元弘の変と呼ばれる。

同年八月、鎌倉の幕府内部では、高時を絡む事件が起きていた。内管領長崎高資の専横を嫌う高時が、高資の叔父高頼らに高資を討伐させようとした。計画は発覚し、高頼らは捕縛され、流罪となった。高時は関与を否定したが、高時に主導権のないことが内外に知れ渡り、幕府の威信を失墜させた。

この混乱をよそに、後醍醐天皇は内裏を脱出し、笠置山に籠城した。笠置山では兵を募り、挙兵した。これに対して、幕府は大軍を送り、九月に笠置山を陥落させた。後醍醐天皇は捕らえられて退位し、次の年の三月に、隠岐に配流された。

後醍醐天皇の二度にわたる討幕計画は失敗に終わったが、その後も楠木正成などによる討幕の動きは続いた。元弘三年（1333）閏二月、後醍醐天皇は隠岐を脱出し、船上山に入って挙兵した。諸国に綸旨を発給して討幕を呼びかけ、反幕勢力は各地に広がった。幕府は、六波羅探題を支援するため、鎌倉から名越高家と足利高氏を大将とする大軍を派遣した。幕府軍の六波羅合流後、名越高家は、山崎の赤松勢討滅の進軍中、久家縄手にて討死した。一方、高氏は、後醍醐天皇の討幕の綸旨を得て、丹波国篠村八幡宮で幕府への離反を宣言し、六波羅探題を攻め、陥落させた。承久の乱以後、幕府の朝廷監視の重要拠点であった六波羅探題は、北方・南方ともに滅亡した。元弘三年（1333）五月七日であった。逃げた北方の北条仲時も近江で反幕勢に包囲され自害した。

元弘三年（1333）五月二日、六波羅探題滅亡の五日前、鎌倉では不可解なことが起きた。頼頭は、いつになく目覚めが遅かった。泰家邸内に騒々しさを感じた。

「もぬけの空だ。誰もいないらしい」
ふすまを開けて、泰家が寢床に飛び込んできた。
「頼頭起きろ。足利がいなくなった。様子をみてこい」
頼頭は、すぐに事情を呑み込めなかったが、直ぐに身支度して、大蔵の足利邸に向かった。金沢街道沿いの足利邸の周りには、すでに状況を確認しようとする者が、大勢集まっていた。人の話を聞くと、

「昨晩遅く逃げ出したらしいよ」

というだけで、いつ、どこへ逃げたのか、逃亡の理由など皆目わからない様子であった。ただ、足利邸は、すぐ東方に朝比奈の切通があり、鎌倉から脱出しやすい場所であったことは確かであった。集まった者たちの頭の中には、「足利謀叛」の文字が脳裏に浮かんでいたに違いない。頼頭は、状況を知らせにすぐに山内の邸に戻ったが、泰家はすでに邸内にはいなかった。

小町の得宗邸には得宗高時をはじめとして、執権赤橋守時、長崎高綱・高資、安達時頭ら主要な者が集まって、評定が始

まっていた。泰家も得宗家の一人として、特別に呼ばれていた。

注目を浴びたのは守時であった。守時は同母の妹である登子を高氏に嫁がせている。逃亡したのは、守時の同母の妹である登子と、高氏と登子の間に生まれた甥の千寿王である。高資が問いただした。

「執権殿は、この始末をご存じであったのか」

守時自身も、全く承知していなかった。

「わかるはずがありません。足利の家臣の輩が、独断で千寿王を連れ出したに違いありません」

守時とすれば、高氏の謀叛ではなく、足利の反動分子が起こした暴挙だと強調したかった。

「しかし、どんな理由であれ、人質であるべき足利の母子を逃亡させてしまったことは、重大な落ち度であろう。評定が終わり次第、謹慎なされたほうがいい」

高資が執権に命を下したようなものだが、高時はじめ異論をはさむ者はいなかった。

泰家が声を上げた。

「とりあえず、追っ手を差し向けてはいかがであろうか」

高時が首を横に振りながら、一蹴した。

「それは無理だ。朝比奈を過ぎれば、すぐに六浦ではないか。もう手遅れだ。すでにどこかの湊に向かっているかもしれない。しかも、追っ手を差し向けるとなれば、大騒ぎになるではないか」

高時は冷静だった。高氏の謀叛の疑いを鎌倉中にこれ以上広めたくなかった。高時は続けた。

「どうであろう、高資殿。早急に都に使者を使わして、都の様子を探ってみてはいかがであろうか」

「それは良いお考えでござる。皆さんの異存がなければ、早速、手配いたしましょう」

高資は、そこで評定を終わらせ、その日のうちに長崎氏と諏訪氏の中から一人ずつ、計二人の使者を選び、都に向かわせた。しかし、その使者たちは都までたどり着くことはなかった。たどり着く前に六波羅探題は陥落していた。鎌倉から

の使者たちは、名越高家討死と高氏謀叛を知らせる急使に、途中駿河で行き会ったため、そこからすぐに鎌倉へ引き返した。

義貞挙兵

六波羅探題が陥落した次の日、五月八日、新田義貞は、上野国新田郡の生品神社で一族百五十騎を集め挙兵した。義貞は、この三月に病氣を理由に、千早城の戦いから無断で新田荘に帰っていた。他の東国武士と同様、すでに後醍醐天皇から討幕の綸旨を受け取っていた。さらに、討幕については、足利との密約もあった。挙兵を決意するきっかけとなったのは、楠木正成討伐のための徴税にやって来た二人の幕府の使者を拘束し、そのうちの一人を殺害したことだった。義貞は、徴税の理不尽さに憤慨していた。討幕に確実な成算があったわけではないが、後戻りはできなかった。集まった一族の前

で、義貞は高らかに宣言した。

「後醍醐天皇から綸旨はここにある。これまでの幕府の専横は許しがたい。今ここに立ち上がって北条一族を打ち果たそう」

決起した一行は、長楽寺の門前町であり、地域屈指の商業地であった世良田宿を経由し上野国府方面へ兵を集めながら北上した。一旦北上したのは、国府軍への示威行動であり、越後方面からの一族の合流を待ったためでもあった。国府を預かっていたのは、御内人長崎氏の一族であったが、すでに新田軍の規模が大きく、手の打ちようがない状態であったため、鎌倉へ知らせの使者を送ることくらいしかできなかった。新田軍は利根川を渡河し、鎌倉へ進軍した。周囲の武士の多くも合流したため、大きな軍団へと膨れ上がっていった。

五月九日、幼い千寿王が家臣に連れられ、二百騎ほどで新田軍に合流した。千寿王は鎌倉を脱出した後、世良田宿の長楽寺に匿われていた。新田軍が世良田を通過後、すぐに体制を整え、後を追ったことになる。これによって、上野、下野、

上総などの足利ゆかりの氏族も馳せ参じた。足利氏の出陣命令に応じたものだった。新田・足利連合軍が成立したことにより、その軍勢はさらに雪だるま式に膨れ上がった。

一方、幕府には五月九日の時点で、義貞挙兵の報がもたされていた。その日の評定で、金沢貞将に下総国下河辺に出陣させ、上総、下総の軍勢を伴って新田軍を背後から攻撃するように命じた。正面からは、桜田貞国を大将、長崎高重を副将とし、鎌倉街道上道を入間川へと出陣させた。五月十日には、入間川を隔てて両軍は退陣した。幕府軍から見ても、新田軍は思いの外、大軍であった。

五月十一日辰の刻(午前8時頃)、新田軍は入間川を渡り、戦闘が開始された。矢合戦から始まり、騎馬戦が繰り返され、日没までに、新田軍三百騎、幕府軍五百騎を失う激戦となった。両軍とも疲労し、新田軍は入間川、幕府軍は久米川にそれぞれ退却して、陣をとった。翌日朝、新田軍は久米川に攻め入り、この日も激戦が続いたが、幕府軍は破れ、分倍河原まで退却した。新田軍も疲労のため追撃できなかった。

五月十二日、鎌倉には初戦での敗北の知らせが届いていた。ちょうど、六波羅探題陥落を知らせるため、駿河から引き返してきた使者が戻ったところであった。だれもが、危機的な状況であり、総がかりで迎撃しなければならないことはわかっていて。本来、支援軍勢の総大将として得宗高時が出陣するべきであったが、病弱な高時には無理であった。順当な成り行きで泰家が総大将として選ばれた。泰家の下には、戦いに秀でた数多くの武将が配置されることになり、万全の体制が整えられた。

泰家は、山内の自邸に戻ると、皆に告げた。

「義貞討伐の総大将となった。鎌倉の底力を見せてくれる。皆もそのつもりで頼むぞ」

出陣することは、義貞挙兵の知らせを聞いて以来覚悟していた。戦支度は整っていたが、指揮系統を整理し、それらを連絡して確認するなど、やたらと忙しかった。手元の配下に役割、分担を指示するだけでも大変であった。

頼頭にも声をかけた。

「そなたは初陣であつたな。とはいっても、わしも初陣だ。よろしく頼む」

「ありがたきお言葉。精一杯、働きます」

「お前はわしと一緒に。戦の様子をよく見ておくのだ」

頼頭は、実践の経験はないが、剣、弓、それと体力には、人一倍自身があつた。戦場での自分の使命は、泰家様を警護することだと、しかと心に刻んだ。

頼頭は、円成尼の屋敷に向かった。泰家から出陣の段取りの詳細などを円成尼に伝えておくように頼まれていた。円成尼に伝え終わって帰ろうとしたとき、背後から瑠衣の声がかかった。頼頭は少なからず期待していた。

「ちよつと待って。睡蓮の花を見ていつて。今年も咲き始めたわ」

「そうだ。今年もきれいに咲いたかな」

「咲き始めといつても、もう見ごろよ」

瑠衣は、自慢げに池のある場所に誘つた。

「今年も見事だね。この屋敷に来て、この花を見るようになってから、何年経つのだろう」

頼頭は自問したが、瑠衣が答えた。

「もう7年目よ。また、秋まで、しばらくは楽しみだわ」

頼頭に時間の余裕があるわけでないが、二人はしばらく歓談した。近頃は、たまにしか会えていなかった。言葉にできないものの、幼いころからの思いを確認できる貴重な時間であつた。

「睡蓮の花言葉、何か知っている。円成尼様から聞いたけど、純潔、清浄という意味があるらしいわ」

「いい花言葉だね。瑠衣にぴったりだ」

睡蓮には、死や滅亡の暗示があることを、頼頭は知っていた。しかし、言葉には出せなかった。

五月十三日、泰家は、円成尼とその家人が見守る中、直の配下数十人を伴って、山内から出陣した。家人たちは、手を

振りながら笑顔で見送る者、頭を垂れて祈るように見送る者、様々であった。円成尼は口を堅く結んだまま、泰家を凝視しているようであった。側にいる瑠衣は、困惑した顔で、馬上の泰家と頼頭交互に視線を送っていた。頼頭は、笑顔で瑠衣を見つめるばかりであった。

五月十四日、泰家の軍勢は、夕方までに分倍河原に到着した。この大軍の到着で、これまで戦い続けてきた武将たちの戦意は、再び高揚した。泰家は、軍議を開き、明日の作戦を綿密に練った。

五月十五日、新田軍は、幕府軍が補強されているとも知らず、未明からときの声をあげて分倍河原の幕府軍に攻め込んできた。幕府軍は、一旦それに応戦すると見せかけて、その後少しづつ後退した。新田軍は、それを追いかけて幕府軍の近くまで攻め込んできたとき、構えていた幕府軍の弓手は一斉に矢を放し続けた。新田軍が体制を崩すと、幕府軍は前面と両側面から新田軍を包囲するように切り込んでいった。新田軍は、多くの討死者を出し、総崩れとなった。義貞は、決死

の思いで退路を開き、狭山堀金まで敗走した。

泰家は、作戦どりの成果に満足だった。これで、当面の関東の討幕勢力は駆逐できたと思っていた。

「皆の者、ご苦労であった。今夜はゆっくり休め」

頼頭は、何か不安が残っていた。

「泰家様、明日は早朝から、また攻めてこないでしようか」

「あれだけ足早に退却していったのだ。まさか、再び攻め込んでくるようなことはあるまい」

しかし、この判断は誤っていた。義貞を追撃し、討ち取つていれば、その後の展開は違うものだったかもしれない。まさかが、別の形で現実となった。足利氏の出陣要請を受けた三浦義勝が相模勢を束ねて、義貞の援軍として到着していた。五月十六日、幕府軍の側面に近接していた三浦軍は、夜明け直後、幕府軍に対して奇襲攻撃をかけた。寝込みを襲われた幕府軍は武具をつける暇もなく防戦した。そこに退却していたはずの新田軍も攻撃したので、幕府軍の兵は、誰も指揮をとることができず、散り散りに敗走していくしかなかった。

鎌倉合戦

泰家も配下の頼頭らとともに馬で退却を始めた。しかし、多摩川の南岸、関戸のあたりで敵側の二十騎余に包囲されてしまった。たまたま通りかかった幕府軍の弓の名手が、敵を次々と射落とした。頼頭も、泰家の盾となりながら、馬上から弓で敵を攻撃した。さらに、北条家臣三百人余らも引き返してきて、その場に踏みとどまり応戦したので、泰家は無事にその場を脱出することができた。

幕府軍の将兵たちが鎌倉に戻れたのは、その日の夜以降で、いつ敵に追いつかれるかという恐怖のなかでの退却であった。無事帰り着いた者はいいが、すでに戦死した者も多く、負傷兵も数多くいた。隊列も乱れたままで、帰着の時間もなく人それぞれであった。辻々に迎えに出る者も多かったが、将兵たちの悲惨な状況を見て、何と声をかけていいか、困惑するばかりであった。泰家らは、山内に戻ると、失望と疲れで、次の日の朝が明けるまで、死んだように眠り続けた。

五月十七日、新田軍は、ひとまず関戸に陣をおいたまま、体制を整え、鎌倉攻略の作戦を練った。新田軍の勝利を知って、軍勢はますます膨れ上がっていった。

新田軍は、関戸から鎌倉街道を南下し、鎌倉の西側へ向かった。鎌倉は、山と海に囲まれた天然の要害であり、進入路は限られている。新田軍は、進入路を巨福呂坂切通、化粧坂切通、極楽寺切通に決め、軍勢を三手に分けて進軍した。

一方、鎌倉の幕府内では、泰家が負けて戻ってきたことで、誰もが危機感を覚えていた。下河辺に派遣されていた金沢貞将も敗戦して戻っていた。しかし、降伏という選択肢はありえず、鎌倉を死守する方針は決まりごとであった。新田軍が軍兵を三手に分けて押し寄せてくると知り、幕府軍も、巨福呂坂は赤橋守時、化粧坂は金沢貞将、極楽坂は大仏貞直をそれぞれ大将として配置し、劣勢になったときの補強の将兵も鎌倉内に残す体制を整えた。

五月十八日巳の刻（午前十時頃）、合戦が始まり、終日終夜の攻防戦となった。

巨福呂坂を任された守時は、防衛というより、巨福呂坂より先の須崎の敵陣に攻め入った。守時らは奮戦して、敵陣の深くまで攻め込んだものの、それまでに大半の将兵を失ってしまった。守時はここを死に場所と決め、自害した。妹の婿である高氏の背信を恥じたものだった。配下の多くも後につづいて自害して果てた。守時の軍勢が壊滅したため、新田軍は、山内まで攻め込み、円生尼の山荘まで敵兵が近づいてきた。状況を察した金沢貞将は、軍勢の一部を巨福呂坂に派遣し、新田軍の進入を防いだ。

化粧坂は、鎌倉の中心に近いだけに、両軍ともに多くの兵力を割いていた。義貞もこの方面の攻撃の中心に陣取った。新田軍は、他の切通と同様、次々と新手の兵と入れ替わって攻めた。一方、幕府軍も、防衛に有利な狭い難所に陣取って交代しながら敵の侵入を防いだため、戦いは膠着状態となり、消耗戦となった。

極楽坂方面では、極楽坂切通の他に、稲村路という、海岸沿いのもう一つ進入路が考えられた。その路は、稲村ヶ崎から由比ヶ浜に至る波打ち際の小道で、干潮になると、干潟になった。稲村路の由比ヶ浜に向かって左側は、りようせんさん霊仙山の山域であり、急峻な崖になっている。幕府軍は、この稲村路からの侵入に備えて、路上へ隙間なく逆茂木さかもぎを設置するとともに、崖上にある仏法寺に兵を配置して、矢や石で崖下を攻撃できるようにした。さらに、沖の軍船から横合いの矢で攻撃できるようにしたため、この路を突破するのは困難であった。

この日の午後、極楽坂方面の大將であった大館宗氏の率いる新田軍の一部が、干潮で干潟になった稲村路を突破し、前浜あたりまで進出し、一部の在家を焼き打ちにした。しかし、これは幕府軍に撃退され、大館宗氏は討ち取られた。

五月十九日、二十日、二十一日、すさまじい攻防戦が続いた。矢が尽きれば、戦死者を乗り越えて斬り合う繰り返しであった。幕府軍はよく守っているが、軍勢の数で勝り、交代で休みなく攻め続ける新田軍が有利であった。義貞は、大館

宗氏が討たれたため、化粧坂から精銳の将兵を率いて、極楽坂方面の支援に回っていた。二十一日、義貞は、幕府軍が立て籠もる靈仙山の仏法寺を戦いの要衝とみて、この攻略を目指した。ここを攻略すれば、軍船からの攻撃を除いて、稲村路から突破も容易になり、一つの進入路を確保できる。さらに、靈仙山全体を手中にできれば、極楽坂切通での戦いでも、山の上から攻撃している幕府軍の背後に回れると考えた。しかし、仏法寺の攻略は困難を極めた。靈仙山の峰から山を登っての攻撃であったので、仏法寺からの厳しい反撃を受けた。山門を打ち破って、仏法寺を攻略し、靈仙山を制圧できたのは、その日の夜半であった。

鎌倉炎上

五月二十二日、極楽寺方面の新田軍は、靈仙山から山を下って攻撃できるようになったため、二手から挟撃できるよう

になった。これによって、極楽寺切通を守る幕府軍は、混乱に陥り、由比ヶ浜まで後退し、大仏貞直の軍勢は全滅した。さらに、巨福呂坂、化粧坂でも極楽寺方面の壊滅に呼応するかのように、幕府軍は劣勢に立たされ、突破されつつあった。

山内には、泰家も円成尼もまだ残っていた。

泰家から状況確認の命を受けた頼頭は、巨福呂坂を下った。巨福呂坂より西側一帯は戦闘中で、まだ持ちこたえていた。しかし、雪ノ下に近づくにつれ、武装している者、していない者が入り乱れて騒然としているのがわかった。遠く、由比ヶ浜の辺りから煙が上がっているのが見えた。

「極楽寺が破られた。攻めてくるぞ。早く逃げろ」

けたたましい声が、どこからとなく聞こえた。

かさいがやつ

「太守様は、葛西谷の東勝寺に避難された。防備を固めよ」
頼頭は、途方もない状況に動揺し、山荘にとつて返し、泰家に報告した。

泰家は、これから自分がなすべきことを考えていた。そこ

へ、盛高が悲壮な顔をして飛び込んできた。

「泰家様、もうこれまでにございます。直性もすでに葛西谷の太守様のもとへ向かいました。泰家様がご自害なされば、私どもは直ぐに後を追います。」

泰家は、首を横に振って答えた。

「さてさて、盛高。私には考えがある。ここで北条が敗れたとしても、必ず再興させる。そのために私は生き延びる所存だ。兄上の子供達も助けたい。万寿丸（北条邦時）は五大院宗繁に頼んだ。亀寿丸（北条時行）は、そなたが助けてほしい。扇谷おうぎがやの新殿（高時側室）から亀寿丸を引き離し、諏訪に逃亡させてくれぬか」

「承知いたしました。仰せに従います」

盛高は、涙を押さえながら答えた。

泰家は、続けて頼頭に命を下した。

「そちは、何人かの手勢とともに、母上と家人たちを、金沢の屋敷に届け、匿ってもらえ。その後は諏訪へ落ち延びよ。無事に帰り着いたならば、亀寿丸のことも頼む」

さらに付け加えた。

「身の安全を確保できればだが、鎌倉の最後を見届けてほしい」

頼頭には、どのように見届ければいいのか、その場ではわからなかった。盛高と頼頭は、諏訪の手勢を二つに分け、行動に移した。

泰家は、二人を見送った後、手元に残った配下を集めて、言い伝えた。

「今はこれまでも。皆、これまでよくやってくれた、礼を言う。しかし、私はあきらめてはいない。ひとまず奥州へ落ち延び、必ず北条を再興するつもりだ。奥州をよく知っている二人を連れていく。他の者はここに残って自害し、わしも自害したと見せかけてほしい。逃げたいものは逃げよ、恨みには思わぬ」

「かしこまりました。命に従います」

配下の一人から声がかかると、同時に全員が賛同した。屋敷に火をかけ、次々に自刃していった。

頼頭は、円成尼ら山荘の住人を警護しながら、金沢街道の朝比奈切通方面に向けて、一目散に逃げ始めた。一行は、女、年寄りが多いので、急ぎ足とはいかなかった。焦る気持ちを抑えて、冷静を保とうとした。

八幡宮の入口まで来たとき、その先には柵が張られ、通行ができなくなっていた。柵の傍らには多くの幕府軍の将兵が臨戦態勢をとっていた。高時ら北条一門が東勝寺に逃げ込んだため、進入口を封鎖するためだった。

「ここは通すことはできぬ。引き返せ」

頼頭は困り果てた。しかし、嘘をついてでも通らなければならなかった。

「諏訪頼頭と申す。これは円成尼様である。東勝寺の太守様に挨拶に行くので、通されたい」

将兵たちは何やら相談した後、かしこまりながら黙々と道を開けた。円成尼が興から降りて検閲されることもなかった。通過できた一行は、金沢街道をそのまま進み、途中右に折れ

て東勝寺方面へ行くことはなかった。言葉通り東勝寺へ行けば、全員自害することになったと、頼頭は確信していた。

頼頭らは、日が暮れる前までには、円成尼らを金沢の屋敷に届けることができた。長く困難な道のりであった。

頼頭は円成尼らに感謝の挨拶をした。

「長い間お世話になりました。これから諏訪に向かいます。皆さま、どうぞご無事で」

円成尼は一振りの刀を手荷物から取り出した。

「これは、北条家に伝わる『鬼丸』じゃ。無事に諏訪に戻れたら、これを亀寿丸に渡してほしい。われの最後の願いじゃ」

頼頭は、涙にぐれながら刀を受け取ると、瑠衣に目を向けながら、

「元気にくらせよ」

「頼頭様・・・」

言葉は続かなかったが、心の中は「一緒に連れて行ってくれ」と叫んでいた。

この頃、新田軍に攻め立てられ、葛西谷の東勝寺に籠もっていた高時ら北条一門らは最後のときを迎えていた。なすすべもなく自ら火を放ち、次々と自刃していった。北条一族と家臣だけで二百八十三人、後に続いた兵を合わせると八百七十人余の人々が自害し、百五十年続いた鎌倉幕府は滅亡した。

頼頭には、泰家からのもう一つの命があった。鎌倉の最後を見届けることであつた。そのためには、鎌倉の市中に戻るのが一番良いが、それはあまりにも無謀であつた。そこで、鎌倉北部の尾根伝いの道を行けばいいと考えた。日頃の軍事訓練で、十王岩という場所から鎌倉の市中を見渡せることを知っていた。そこは、住んでいた山内の屋敷の裏山の近くであつたし、諏訪に向かうのには鎌倉街道上道を利用できるので、近道にもなり好都合であつた。

日が長い時期とはいえ、見渡せる場所にたどり着いたのは、宵闇が近づいてきた頃であつた。若宮大路の両側を中心に、鎌倉の市中全体がまだ火炎に包まれていることが、はっきり

と見てとれた。頼頭にとっては、胸が締め付けられるような悲しい光景であつた。それが、鎌倉最後の日であつた。故郷を離れて鎌倉ですごした七年、泰家様、瑠衣のこと、多くの亡くなった人々、もう何もなくなつてしまった。あまりにも大きな喪失感で、涙が止まらなかった。

鎌倉幕府滅亡後しばらくして、円成尼らは助命されて、遺された北条一族の女性たちといっしょに伊豆の北条邸に移住していた。瑠衣もその一人であつた。伊豆は北条氏の本拠地であり、故郷であつた。源頼朝が挙兵したのもこの地であつた。足利氏からは、この邸宅と上総国の所領一か所が安堵されていた。この邸宅には、北条一族ら鎌倉の合戦で命を落とした者たちを供養するために、円成寺が建立された。円成尼は、一族の菩提を弔いながら余生を送り、幕府滅亡の十二年後、康永四年（1345）八月、この地で亡くなった。その僧職は、瑠衣が継承した。

伊豆に移住後しばらくの間は、瑠衣と頼頭との文の交換は

何度かあった。しかし、いつしか消息が途絶えたままになった。円成尼も亡くなり、瑠衣には山内での思い出話を語る相手もいなくなってしまった。それでも、僧職を引き継いだことは、大きな励みになった。瑠衣はまだ若かった。改めて、仏門に帰依していく自分を模索し始めようとしていた。

円成寺は、同じ鎌倉山内を在所としていた伊豆国の守護、山内上杉氏の庇護を受け、上杉氏の尼寺として栄えた。

(了)



睡蓮の花

主な参考著書

北条氏150年 栄華の果て―鎌倉幕府滅亡―
(鎌倉歴史文化交流館企画展資料)
2024/9/21

東関紀行全釈
武田 孝 1993/1/20

中世の村を歩く
石井 進 2003/3/25

人物叢書 新田義貞
峰岸 純夫 2005/5/10

完訳太平記 卷第十(現代語で読む歴史文学)
上原 作和、小番 達(監修)
2007/3

凡愚の戯言 二〇二五年夏

畑中康郎

●時事問題等

A P Aホテルの対応に思う

A P Aホテルの拡大成長のスピードは著しい。私の印象では日本の主要都市の駅近くにはこのホテルがいくつも建っている。いつの間にかこれほど成長したのかと驚くばかりだ。元銀行員だった今の社長が奥さんと共同でホテル事業を始めたのは四〇年前だ。事業の成否は宿泊リピーターの数だろう。それに信用とそのブランド力。A P Aホテルは着実にそのブランド力を高めている。一例が二〇一七年に起きた中国人宿泊者との問題だ。

A P Aホテルのどここの場所だったかはつきりとはわからないが、そこに中国人が宿泊した。ホテルの部屋に

は問題となった、例の図書が置かれていた。一九三七年一月二月に起きたとされる、いわゆる南京大虐殺に関する本だ。日本人作家によって書かれたその主旨は大虐殺の事実などなかったというものだ。ホテルの部屋にはたまたこうした本が置かれている。種類は歴史本に限らない。肩の凝らない娯楽本のケースもある。この時はどういう意図か、歴史本だった。その中国人は本を読み、非常に憤慨した。彼の頭の中には南京大虐殺は確実に起きており、わが人民は日本軍によって大量に虐殺された。本はその事実を真つ向否定している。そんな本を旅行者に読ませるなんてこのホテルはどうかしている、と思った。帰国したその中国人は早速中国のウェイボー（旧ツイッター・現Xのようなもの）に投稿した。それがネットで大炎上した。中国では幼少時から反日教育が徹底されており、大虐殺は彼の頭の中に、いやそれこそ精神に刷り込まれている。やがてネットの大炎上から大規模なデモに発展した。そしてA P Aホテルの排斥運動にまでつながった。中国にA P Aホテルがどの程度あるのかこれも分からないが、ともかく日本に旅行した際には絶対にこ

のホテルは使わないように大々的に喧伝した。A P A ホテル側にとつても中国人旅行者の数を考えればその影響は少なからずある。困惑したであろう。

しばらくしてホテルの社長による記者会見が行われるとのニュースが日中両国に流れた。中国では拍手喝采となった。社長が謝罪すると思つたのだ。記者会見の当日、ネットを炎上させた中国人たちを始め、歴史問題に関心のある多くの中国人がテレビ報道に釘付けになった。いよいよ会見に臨んだ社長は何と言つたか。

「私は南京大虐殺というものはなかったと考えています。したがつてそれに関する歴史本をホテルに置いたことについては何ら間違つていないと考えます」

彼ら謝罪を期待していた人々は一様に憤慨しまた大変な失望を味わうことになった。さらにネットが大荒れになった。社長は日本人の歴史とその国民性を信じていたから、わずかな利益より歴史上の事実を優先させたのだ。私は社長に敬意を持った。

もちろん、以後、中国人旅行者はA P A ホテルを利用しなくなった。しかしこれによってホテル側はそれに代

わる大きなメリットを享受することになった。中国人旅行者は以前からマナーが極めて悪い。大声で話し他旅行者の迷惑などまったく考慮しない。ゴミは散らかし放題。今現在も民宿や旅館では彼らが去った後、ゴミの跡片付けに大変苦慮しているとのこと。風呂の排水管や洗面台の管にはゴミが詰まり、原状回復には専門業者に依頼しなければならぬケースもあるという。たばこの火の始末も恐い。火事にでもなったら元も子もない。出された料理にも大抵は文句を付ける。素直に静かに食事をすることは稀だ。

A P A ホテルではその心配はなくなった。静寂なそして清潔な環境が維持できるようになってそのブランド力は格段に上昇したのだ。社長の記者会見で日本陸軍の潔白を主張したことは大正解だった。その後、コロナ禍で旅行が大幅に制限された際には、客室をコロナ患者のために全面開放した。これがコロナ撲滅の大きな貢献につながった。A P A ホテルが大発展する理由がそこにもあったのだ。

ところで、南京大虐殺とはどんな事件だったのか、少し説明を加えてみたい。戦時中の日本陸軍（司令官は松井石根元大将 戦後巣鴨プリズンで刑死）が一九三七年に南京を占領した時、無抵抗な三〇万人とも四〇万人ともいわれる中国人民を虐殺したとされる事件だ。不思議なことに巷間言われるほどの大事件にも拘わらずその時は各国特派員すべてが何ら本国に報告していない。この事件が公になったのは東京裁判時のひとりのキリスト教神父の証言からだ。如何にもおかしい。何故事件のあったその時に騒がなかったのか、理由は明白。事件はなかったからだ。東京裁判は日本をどうやれば貶めることが出来るか、アメリカをはじめ連合国各国が躍起になっていた。何でもいいのだ。たったひとりの神父の証言を針小棒大に捉え、日本を徹底的な悪に仕立て上げたのだ。この証言をもとにルポを書いた中国系アメリカ人の女性ジャーナリストが後になって、あれは間違いだったと言いはじめた。反省し悔悟したのだろう。しばらくすると、彼女はアメリカのとある駐車場で死体となって発見された。中国共産党の関与があったかどうか

は分からない。しかし大いに疑わしい。

それに三〇万人とも四〇万人ともいわれる数そのものがおかしくないか。当時南京には数少ない中国人しかいなかった。とても四〇万人はいない。多くは危険を感じてすでに南京を脱出していたのである。そして仮に百歩二百歩譲って四〇万人がいたとしよう。四〇万人の人々を殺すだけの人数が日本陸軍にいたのか、いない。その数に見合う弾丸についても到底足りない。さらにおかしなことに事件があったとされる時からしばらくすると多くの人々が南京に帰ってきているのである。それほどの大事件があったにも拘わらず、危険な場所に帰還するだろうか。

そしてもう一つ。その四〇万の死体はどうする。路上に転がったままに放置したのか。死体はすぐに腐敗しその死臭は耐えきれないものになる。その辺の困難を少しも証言は触れていない。触れられるはずもない。南京大虐殺という事件はなかったのだ。

ともかくもA P Aホテル社長の対応はよかった。ホテ

ルのブランド化は進み、大きく発展している。真実を真実のままに語る。それが人間としての真つ当な生き方だろう。

「豊田真由子」論

埼玉四区選出の元衆議院議員、豊田真由子氏が何年か前に一躍全国的に有名になった。その存在さえ知らなかった私が明確に彼女を認識したのは、彼女の恥ずべき言動からだった。政策秘書に対する暴言と暴力が、ICレコーダーに記録された音声から明らかになったのである。

秘書は日常的に言葉の暴力に精神を切り刻まれていたと思われる。恐らく、機会があればそれを証拠として記録し、将来降りかかるかもしれぬ災厄から身を守ろうとしたのだろう。彼は豊田氏を支援者宅に送り届ける車の中で、その暴言と暴力を準備していたICレコーダーに記録した。それとは露知らぬ豊田氏は、いつものと同様に暴言を繰り返した。

「このハゲー。違うだろ、違うだろー」と何度も繰り返して、その次には、即興のメロディーをつけて非難の言葉を鼻歌風に歌い出した。どうやら秘書は、豊田氏がある支援者の誕生日を祝うバスデイカードの届け先を間違えて他の支援者に送ってしまった、その不手際を謝罪するため、豊田氏に同行して当該支援者宅を訪れるところであった。

即興の歌の主旨はこうだ。

（謝れば済むというものではない。お前がすみませんと言えど済むと思ったら大間違いだ。お前は自分の娘が車にひかれて頭がグチャグチャになったら、すみませんと言われて納得するのかよ。そうじゃないだろ）

この内容にメロディーをつけ、嫌味たっぷりに鼻歌交じりに歌ったのである。上から目線の、人間の尊厳を踏みにじった行為と言える。秘書が謝罪の言葉を口にする今度は運転席の秘書の頭を後ろから殴った。秘書は豊田氏に謝罪の言葉を繰り返して、また暴力をやめてくれるよう懇願している。その様子がはつきりとボイスレコーダーに残っており、完全な証拠となった。

世間の人からは尊敬されてしかるべき立場の人が、聞くに堪えない品のない言葉で弱い立場の秘書を辱める。世間の弱い立場にいる数多くの方々を幸せにしたい、とふだんから標榜してきた人の言動が、これなのである。この言動を目の当たりにして、誰が一体、豊田氏のような人間を信じられるというのか。私は人間の尊厳と人格を真つ向から否定した豊田氏を許せなく思った。

通常なら、私もそれほど怒らない。だが日常の表向きの言動とこれだけ落差がある、豊田氏の人格をどうしても許せなかった。これほどの二重人格者もそうはいない。加えて豊田氏には、弱者をいたわる姿勢がない。人間は誤りを犯す存在なのである。一度や二度の誤りで済むのならまだましな方だろう。ましては過密スケジュールの中で極めて多くのことを処理しなければならぬ議員秘書という仕事は大変だ。人間とは誤りの動物なのだから、それを許す度量がなければ、およそ世間で社会活動はできない。また人の上にも立てない。

何故、こういう性格になったのか。この人の経歴をまづ見てみよう。それは華麗なるものだ。東大法学部を出

て、前の厚生省のキャリア官僚になった。その後、ハーバード大学大学院に学んでいる。厚生省においては、どこまで実績を上げたか、そこは定かではない。恐らく、下働きの段階だから功績として記録できるほどのものはなかっただろう。

だが、まだ人生前半の経歴に目をつけたのが自民党だ。民主党政権当時の野田前首相が抜き打ち的に解散を宣言して生じた総選挙をチャンスと捉えた自民党は、急遽大量の立候補者を必要とした。こうなったら、目立つ経歴ならどんな人間でもいい。自民党はそう思ったに違いない。

豊田氏は自民党から立候補し、何も知らない埼玉四区の選挙民は経歴に惑わされて投票。結局、いつもの選挙と同様、苦も無く当選した。とにかく選挙民は、普段、政治に無関心である。だから、どんな人物が立候補しているか注意などしていない。看板に騙されてしまうのである。自民党の方も彼女の人間性を理解して立候補させたわけではあるまい。単なる数合わせであつたに違いない。

そのころ、豊田氏の議員時代、自民党では二期目の議員に不祥事が多いといわれた。そこには、明確ないくつかの原因が考えられる。二期目となって気が緩んだこと、当時自民党の圧勝が続いて党自体に驕りが出て、これが議員各人に伝播したこと、豊田氏にはとくに言えるのだが、権力側の立場に回ったことで自分が権力者になったような錯覚に陥ったこと。とくにそれを自分の力によるものと錯覚したことなどが原因だ。

ここからは、筆者の推測だ。豊田氏の育った家庭にもおそらく原因がある。彼女はきつと親の言うことをよく聞く素直な、いい子だったに違いない。そして確かに頭は良かった。普通の子よりずっと勉強ができた。親は、当然の如く期待する。親、学校、周囲の人たちから稀に見る才媛と期待され、ますますいい気持ちになって学業に邁進したことだろう。それを可能にする経済力も親にはあった。ここが一番大きい。豊田氏はそういう家に生まれた。だが、これはあくまでも運であって彼女の實力とは無縁である。その運命にあぐらをかいた。

このような状況で弱者を労わる気持ちが生じるだろうか？ いつも競争、競争。そしていつもそれに勝利することが続くと、勉強のできない子や競争にいつも負ける子が馬鹿に見えてくる。そして結局、そうした子らを見下し、傲慢な心で接する。生きる目的が競争に勝つことだけに変貌し、結果が出ればすべてが許されるという考え方が定着する。陰で何をやろうと表面上、世間から賞賛されれば、それでいい。栄光の中に自分がいることさえできたら、裏で何をやっても許される、という性格が彼女の中で固まった。

したがって、すべてが表面上だけのことでいい、世間には完璧に映らなければならない。そして、確信したことは、自分が失敗と無縁の選ばれた人間ということなのだ。自分によって支配される人間が、自分を支えるためだけに存在する。その存在は自分から罵倒されようが、暴力を振るわれようが、それに耐えて当たり前なのだ、と恐らく彼女は慢心した。そうでなければ、あんな酷いことを秘書たちに言えるものではないし、行動にも移せない。

暴言などの精神的圧力を受けた秘書は、従前の、ハゲ
ーと言われた人だけではない。暴言は日常茶飯事だった。
暴言を録音して告発に踏み切った、勇氣ある秘書に刺激
され、他の秘書たちもマスコミの取材に応じた。それに
よれば、ある別の秘書は事務室で激しく罵倒されたとき、
傍らのパーティションを豊田氏は何度も蹴ったそう
だ。それによつて、秘書が心に傷を受けたのは当然だ
つたが、パーティションの陰にいて一部始終、そのやり
取りを聞いていた若い女性事務員にもショックを与え
た。彼女は、それが原因で体調を崩し、入院したそう
だ。

その非常識な言動は、自分の配下にある秘書以外に
対しても現れた。マスコミ取材に応じた、あるタクシ
ー運転手は豊田氏から理不尽な要求を受けたらしい。
追い越し禁止の車線表示がある比較的狭い道路で、自
分の都合で道を急ぐあまり、前の車を追い越せ、と何
度も強い口調で命令されたらしいのだ。

勿論、追い越しはできない。運転手がやりわり拒絶
すると、今度はイライラし出して、後部座席の窓を自
分の腕時計の金属バンドで叩き始めたという。その行
為は、

支援者の集まる演説会場に到着するまで続いた。到
着すると今度は、出迎えた秘書から料金をもらつて、
と運転手に言いざま、横柄な態度で車を降りたとい
う。秘書二人が低頭して豊田議員を出迎え、丁寧な
態度で料金を支払った。

運転手は予測した。この横柄な、人を人とも思
わぬ態度が、いずれ近いうちに事件となつて問題を
表面化させるだろう、と。いみじくもその通りにな
つた、とタクシ

ー運転手は取材の最後に言った。

これまで述べてきたように、豊田真由子議員は、
それまでの人生が順風満帆すぎて苦労を経験してい
ないから人の気持ちかわからない。我慢することが出
来ない。そのため怒りをその場で表現出来ないケー
スが続いたとき、その許容量を超えた負荷がさら
に怒りを溜め、我慢する状況が終わつた後でその反
動が秘書という弱い立場の人たちに襲いかかる。
我慢から極大化したストレスが一気に秘書たちの上
に爆発するというわけだ。

ここまで考えてみると、豊田真由子という人
には、人

の上に立つ資質はないと断言できる。とくに政治家という忍耐を要求される仕事には決定的に不適格と言わざるを得ない。彼女は政治家になるべきではなかった。政治家という職業よりも、その頭脳を生かして研究者、それも集団で行う研究ではない、地道な自分だけでコツコツ実績を積み上げるような研究者が似合っている。もつとも世間を渡るには少数であつても協力者は必要。独りでは何もできないのが人生ではあるが。これが筆者の導いた結論である。豊田氏はわれわれにとつての他山の石である。

「カマラ・ハリスの業績」

昨年一〇月、まだ大統領選挙中だった頃、アメリカで一冊の本が出版された。「カマラ・ハリスの業績」(原題は和訳そのままの THE ACHIEVEMENT OF KAMALA HARRIS)というペーパーバック版だ。著者はアメリカの JASON DUDASH 氏。私はその本の存在を知った時、ある種奇異な感じを持った。あれっ、ハ

リスに何か業績らしきものがあつたかな? というものだ。アメリカ大統領選挙を私なりにこれまでずっとウオッチしてきたが、ハリスが業績らしきものを挙げたという報道に接したことが一度もなかったからだ。

その著作は経済、国際外交、言論の自由、価値観と道徳等々全一二章に分かれ、総ページ数が一七九である。それで最初の一、二ページに著者の緒言が書かれている。緒言に何が書かれているか、アメリカ政治専門の評論家先生は明らかにしなかった。

それでは本文にはどんな業績が記されているか。興味津々で評論家先生が開いたところ何と緒言以外、各章の頭にタイトルがあるだけで、そこから下はすべて白紙だったのだ。要はハリスに業績らしきものは皆無だったということを語るただに費用をかけて出版したのだ。ここにアメリカ人のユーモアと余裕を感じた。買った人は本をメモ用紙か計算用紙にしか使えない。それでもまずず売れているというからアメリカという国は面白い。出版社も出版社だ。利益度外視の行為ではないのか。さらに大統領選挙でハリスに投票した人をさらに打

ちのめすようだが、確かに彼女は副大統領時代に何の業績も残さなかった。そんな人がよく厚かましく大統領選挙に名乗りを上げたものだと思えば、これまでに感心していた。もつともこの人は予備選を勝ち抜いたわけではなく、バイデン現大統領の選挙戦半ばでの撤退を受けた形だから、他に候補を準備する時間的余裕が民主党になかったただけだ。

ただ、もしカマラ・ハリスが間違って大統領になったならアメリカおよび世界はどうなっていたか。ハリスはバックにいるかつてのオバマをはじめとする民主党の黒幕、さらにはグローバリストのやりたい放題にコントロールされていたのではないか。無能な彼女には強力な黒幕たちに抵抗するだけの力がない。アメリカは国の態を失くし、経済はさらなる停滞に悩まされ、そして世界各国で戦争が拡大して行ったことだろう。とにかく民主党の目指すところは理想なのだ。こうであるべきだ、こうでなければならない、という考えの行き着くところは現実の無視だ。政治はリアリズムでなければならぬ。イーロン・マスク氏は言った。「今回もしトランプの共和

党が負けるならアメリカから民主主義はなくなり、大統領選挙は今回が最後になるであろう」

この言葉の意味するところは、力で選挙を牛耳り、かつてのように不正選挙で大統領を勝手に決められるならアメリカから民主主義は姿を消すということだ。そして大統領は黒幕のいうとおりに動く人間であれば誰でもかまわないことになってしまう。だから無能のカマラ・ハリスを民主党の候補にすることでオバマやクリントンらは妥協したのだ。このからくりがアメリカの多くの国民には理解できなかった。トランプとの票差は全米で五百万票にすぎない。ということはかなり多くの国民がまだ民主党を信じているということなのだ。危ない、危ない。これが私の率直な感想だった。

中国人の現世利益思想

中国の人口一四億の人々のなかには今生きている現在を面白おかしく過ごせればいい、快樂を貪り尽くせ

ばそれでいいと考える人々が多くいる。その考え方は、死ねばすべてが終わるというものだ。もし死後の世界があると考えれば現世で行っている善悪の行為が来世で輝く場合もあるし、一方とんでもない悲惨な世界に身を置くことになることもあり得る。それがふつうの人の考えることなのだが、徹底した唯物論に過去ずっと汚染されてきた中国人にはすべて目の前に見えること、起きることではか物事を測れなくなっている。頭の中は物しかなく精神世界に身を置くことが非常に困難になっている。精神世界がないから他人の苦しみ様子を見て楽しむことになる。また物欲を満たすことがすべてとなる。

無論、そこには例外も存在する。思い出している私も私が感動するのは自分たち自身が貧困の中にあって、戦後中国に残された日本人、いわゆる残留孤児をわが子同然に育ててくれた中国人がいたことだ。したがって中国人全体がそうしたレベルの低い人間たちばかりとは決して思わない。そこは強調しておきたい。どうやら私の感じでは貧しい方が人として優しくなれるような気がする。自分の置かれている立場で周囲をよく理解でき

るからだろう。

戦後急激に経済成長した現在の中国人は金銭に卑しなくなつたとしか私には思えない。

ところで、かつて中国には公開処刑が頻繁だった。それも一気に死に至らしめるのではなく、少しずつ肉体を切り刻んで殺す。その間の囚人の苦しみ様子を見物人が見て楽しむ。それは彼らにとつて大変な快感だったようだ。そのためか中国には非常に残酷な死刑が多かった。その中のひとつとして私は腰斬刑が残酷と思う。丸裸の囚人を板の上に仰向けに縛り付け、腰骨のあたりを鋸で少しずつ切るのである。鋸の刃は鋭利ではなく、鈍っている。切れ味は相当に悪い。だから時間をかけて徐々に肉を切り刻むようになる。その間囚人は非常な苦痛に苛まされ、なかなかこない死を自ら焦がれるようになる。見物人の周囲には屋台が並び、刑の執行を楽しむ大衆は飲食をしながらその光景を見つめる。これが古来多くの中国人に染み込んだ残酷さなのである。

さすがに現代ではこうした残酷な公開処刑は行われなくなつた。代わりに動物、とくに牛の肉を生きたまま

少しずつ切り刻み、その場で焼き肉にしながら食べることが多いようだ。切り刻んだ部位が広がればやがて牛は死ぬ。その間の牛の苦しむ様を見て中国人は楽しむのだそうだ。動物愛護の精神などどこにもない。そんな国が経済大国として世界の表舞台に君臨している。中国もそれを許す世界もどうかしている。

さらに変なところで言う、中国には誘拐事件が年間四〇〇万件起きているそうだ。目的は女性の場合、セックス奴隷にすることもあるし、また奴隷として労働を強制する場合もある。しかし多くは臓器移植が目的らしい。裕福で権力のある階層は自分の肉体の老化と劣化を他人の臓器を奪うことで蘇らせたいと思う。こうなると人間はモノなのである。これが中国上層部・権力階級の人間の態度だ。死後どんな罰を受けるのか、なんてことはまったく考えないから現在自分が長生きし丈夫な体で人生を楽しめれば他人の命はどうでもいいのである。生後間もない赤ちゃんの臓器は移植に最適なのだそうだ。移植後二ヵ月も経てば臓器は大きくなりそして移植された体に馴染むそうだ。だから乳幼児の誘拐が多い。そ

こに罪の意識などまったくない。新疆ウイグル自治区で行われている残酷な刑罰や拷問も臓器移植のためのひとつの手段とも考えられる。国際舞台に姿を見せる、例えば中国共産党の連中はきちんとスーツを着ている。紳士面をして一応マナーも心得ている。しかしその内面はおぞましい鬼なのだ。

劉曉波という人物がいた。彼は中国で初めてノーベル平和賞を受賞した。長年、中国当局と民主化問題、人権問題で闘ってきたのだ。投獄されること四度、それでもそうした弾圧に負けなかった。しかし残念なことに最後は肝臓がんに斃れた。その劉氏が語った言葉がある。「中国国民からこうした精神世界のない考え方がなくなるには中国が何処か外国の植民地になり、三〇〇年程度その支配下にあつて徐々に達成されるに違いない」

とても悲観的な見方だが、彼にはその残酷さと自己本位がとても短期間では消えないことを認識されておられたのだろう。

現在の中国国内事情はどん底である。経済は低迷し、物を作っても売れない。失業者は蔓延してホームレスが

激増している状況だ。名門大学や大学院を出ても就職先は見つからず、食料をバイクで届けるワーバーイーツのような職業を奪い合っている状況らしい。トランプ関税が輪をかける形で製造業も衰退している。

結果、経済が順調だった頃に運よく金をため込んだ人々は国外脱出を試みる。中国に居ては資産がしばみ、増えることはないからだ。日本にもかなりの中国人が不動産を買いあさるなどして進出してきている。地方によつては町ごと中国人に乗っ取られた自治体もあるようだ。実に恐い。ふつうの国の人間ならまだいい。死んだらおしまいと考え、死後の世界を信じない唯物論の中国人が周囲に蔓延したら日本人にも伝染して日本全体がおかしくなる。死後の世界があり、現世での善悪の行爲によつてあの世の処遇が影響されると考えるのが宗教を持つ国の人々の考え方だ。だからこそ付き合っても安心なのだが、無神論の中国はそうではない。世界の人口は現在約七〇億人、そのうち中国は一四億人、つまり五人にひとりとは中国人ということだ。中国人が世界のどこにでも進出するようになると世界は悪い影響を受け間

違いなくおかしくなる。トランプ関税によって不調の度を増す中国との関係を深めようとする現在の石破政権はやはりどこかおかしい。

世界のルールをまったく無視するようにこれまでの中国は動いてきた。貿易問題にしても領土・領海・領空問題もすべて自国の都合でやってきた。武漢コロナウイルスなどは論外中の論外だ。神をも恐れずとはこのことだ。死後の世界を信じていないからできることなのである。やはり世界は中国共産党と付き合っていくべきではない。

かつて台湾の総統だった李登輝氏は次のように中華人民共和国を批判している。「そもそも『中華人民共和国』という擬制そのものが、根本的に嘘だ。孫文の『三民主義』を実現するための国家体制であると広言しながら、かつて民主主義であったことはない。『人民』に対して自由や平等を許容したことはない。天安門事件にしてもチベット抑圧政策にしても、法輪功弾圧にしても、すべてが独裁国家的で冷酷、残忍なことばかりをやっている。いったい、何万人、何百万人の無辜の民を殺してきたこ

とか」

私は思う。いずれ共産党は壊滅する。その後で欲得に侵され、自分のことしか考えられなくなっている多くの中国人民をどのように心優しい人に変え、また豊かな精神世界に引き戻していくかが世界の課題になるのではないか。

●読後感想

司馬遼太郎氏「ビジネスエリートのための新論語」
から高沢光蔵氏について

世間は高沢光蔵氏という人物をまったく知らない。文字通り無名の人だ。私がこの人を知ったのは、司馬遼太郎氏の著作だった。司馬氏が珍しくサラリーマンについて記述したもので、「ビジネスエリートのための新論語」とのタイトルがついていた。しかし内容は決してビジネスエリートだけのものではない。サラリーマン一般が会社組織で大きな失敗を犯すことなく、まずまず無難に生

きるためのヒント集になっている。タイトルは出版社が売れ行きをよくするために考えたものである。

高沢氏はこの書の最後の部分に登場する。この人の生き方は出世競争をしている多くのサラリーマンの疲れを癒し、また出世を望まないサラリーマンの糧になると私は感じた。私はとくに出世を強く望んだわけではないが、少なくとも現役サラリーマンのころに私が仮にこの書を読んだならばきつと安堵したに違いない。出世は人生の第一義ではないのだ。ところが、この出世というものがある意味強迫観念になっていて、サラリーマン諸氏を苦しめる一因になっている。

高沢氏はつまらない出世などに汲々とした人生は送らなかった。出世のために足の引っ張り合いをしている人種から見れば、超然とした高みにいた人物だった。

氏は早稲田大学を出たらしい。学生だったころ、野球の早慶戦を仲間の誘いで応援に行ったことがあるという。氏はすぐにある違和感を持ってしまった。皆が肩を組み、応援歌を大声で合唱している。早稲田がいい打撃を見せ得点でもしようものなら大騒ぎになった。何だ、

これは？ と氏は思った。打った、打たれた、点が入ったなんてどうでもいいではないか。仲良くスポーツを楽しめばいいじゃないか、と思った。どうして皆はこんなに投手の一球一球に夢中になれるのか？ 選手に同化し一緒に戦っているようだ。高沢氏についてはいけなくなつた。そこは自分がいる場所ではないとすぐに悟つた。醒めた自分がそこにいる、というより気が弱いのかも知れない、相手チームを負かす気分にならないのだ。そして彼は仲間断つて、独り球場を後にした。

卒業後、新聞社に入り記者をやつた。ところが、すぐにここでも違和感が彼を襲つた。記者は日々スクープ記事を取るためにしのぎを削っている。一步でも早く、他人を出し抜いてスクープ記事を取る。夜討ち朝駆けもふつうにやる。そうでもしなければスクープは取れない。記者連中は皆が皆ライバルであることに気づいてしまつた。彼はここでもついていけなかつた。到底スクープを取るなんて気になれない。彼の生き方は競争よりも協調なのである。優しい、温和な人なのだ。

その考え方を貫いて三〇年。よくも我慢しつつ同じ仕

事を続けられたものだとは感心する。勿論、その間、スクープなど一度もなかつた。二番煎じの、すでに報じられた記事ばかりを追隨した。そんなことだから記者として褒章を受けたこともないし重要な地位につくことは当然なかつた。

記者の立場を退いた後、新聞発行人の名を頂戴した。新聞発行人は本来、社長などの社を代表する人が就くはずだから、彼の場合、勿論、名ばかりである。代表の立場に置かれたなら、社を代表して記事の内容に責任を持たされる。戦時中、つまり当時の軍部に対し、彼を矢面に立たせるのが社の目的だつた。終戦前まで、新聞社を締め付ける新聞紙法とか軍機保護法といった法律が強い力を持つており、新聞記事に少しでも気に入らないところがあると軍部に呼び付けられた。とくに多かつたのは不敬罪に該当する記事。ケチを付けようと思えばどんな記事も対象になる。軍部に少しでも関係する記事にも目につけられた。その度に軍に呼びつけられて、コッテリと絞られる。反論は許されないから、ただ忍耐するだけ。それが高沢氏の仕事だつた。呼びつけられれば「前

科」がつき、戸籍謄本に書き込まれる。五年もやれば、戸籍謄本は真っ赤になった。犠牲的精神がなければとても務まる仕事ではなかった。

そんな氏ではあったが、新聞社生活の晩年、請われて「校閲部長」という役職に就いた。何度も断ったが、三顧の礼の後、不承不承にそれを受けた。受けたが、一年も経たないうち泣いてその職を辞めさせてもらった。理由は、部下の人事や心理掌握それに他部門との折衝などが面倒で、彼には重荷だったのだ。そして、その後すぐに退職した。

司馬氏と出会ったのは、退職後に同じ新聞社に再就職したときだった。生活のために働かざるを得なかったのだ。司馬氏は高沢氏と初めて会ったとき、彼の顔の特徴を次のように述べている。

『長い人生の氷雪がついには野望も嫉妬も瞋恚（しんい）も厚い皮膚の底に押し込めて凍結し、容易に生な感情が顔面の皮膚を騒がせることのなくなった風貌なのである』

それが彼の人生を象徴していた。仕事は、退職直前と

同様、記事の枠組みや構成を考え、誤字脱字に朱筆を入れる、そうした裏方の仕事だった。その時の部長は、彼の後輩で、以前は部下だったこともある。その男が高沢氏に向かって、「あんたのような老兵を抱えていると部の能率にかかわる」と揶揄した。それを無感動な表情で平然と受け止めた。そしてときどき司馬氏に囁いた。「これがわしのペースやもんな」。司馬氏はこれを痛快淋漓の心境であると書いた。そこで司馬氏は切り返して非礼な質問をした。「それで、あなたは自分を惨めだとは思わないのですか？」

これに対して、例によって無感動な表情で「どうとも思わん。わしはわしの人生を成功やったと思うておる」と言った。

司馬氏は断じた。「自分のペースを悟り、そのペースの上に過不足なく自分なりに構築した高沢氏の人生に悔いなどあるはずがない」

ただ、高沢氏は一方でこんなことも言った。「こんな男、女房に好かれんかもしれんがな」。

しかしこの小文を書いている私は、家庭を大切にした高

沢氏が奥様に嫌われているはずがない、と思った。それも確たるひとつの生き方なのである。

司馬氏は、高沢氏が語った言葉をもうひとつ紹介している。

「ここに一匹の小虫がいる。これをひねりつぶしたところで、誰も気づかず、世界のどこにもいかなる小波紋も起らない。そういう小虫であることがわしの人生の理想やった」

私はこれを読んで言い知れない感銘を覚えた。世間には高沢氏のような人物もいるということに驚いたのだ。様々な価値観、人生観に基づいて人は生きている。人それぞれの人生に価値の軽重などあろうはずがない。氏のような人物は、また違った意味で大人物と言えるのではあるまいか。私は畏敬の念さえ覚えたのだった。

鎌田敏夫氏「四人家族」について

私はこれまで鎌田敏夫氏という存在さえ知らなかった。

た。が、書店でたまたま見かけた文庫本の背表紙の文言が気になって手に取ってみた。

「私、波風を立てたいの、この家に」こう言って妻は京都に単身赴任をした。空気のようだった家庭に生じた大きな波紋が四人の家族を急速に変化させていく。

これで私は俄然興味を持った。そしてこれを読了して、いろいろ考えさせられた。その時間は有益だった。感想を以下に書く。

夫は信之という。単身赴任をする妻は靖子。そして姉・友紀、弟・徹也。この四人が靖子の単身赴任でそれまでの生活を変化させていく。靖子は結婚前、デザイナーの仕事をやっており、それなりのやりがいをもって日々を生きていた。しかし結婚を機に家庭に入り、いまでは夫や子供たちの食事や洗濯など何の変化もない平凡の中に日常を過ごしている。夫も子供たちも時間が来れば食事の用意は出来ているし、掃除はされているし、洗濯物はいつもきれいに目の前に整えられている。それらがごく当然のこととして家族全員が何の疑問も持たないでい

た。

それに対し靖子は次第にそんなことでいいのかと疑問を持ち始めた。この際、平凡な日常を壊したい目的で以前の好きだったデザインの仕事で自分を見直したいと考えた。昔の伝手を使った。デザインの仕事は直ぐに見つかった。ところが場所が京都という東京から遠く離れた場所になってしまった。迷ったが、家族を説得して京都に行くことにした。主に反対したのは徹也だった。翌年に大学受験を控えており、母親がいなくなるとか、不便になるからだ。しかし最後はしぶしぶ納得した。

靖子の単身赴任以来、徐々に夫の信之にも変化が生じた。このまま決まりきった仕事を何の疑問も持たずに続けていいのか、と考えるようになったのである。今の仕事を選択した際も本当に自分の意思で決めたのか、まったく自信はなかった。小学校の成績で中学校を選び、中学校の成績で高校を選んだ。すべて先生の指導に従っただけだ。ついに大学も高校の偏差値で自動的に選択したにすぎない。せめて大学については文科系なのか理科系なのかは自分で決めたが、その中でどの分野に適性がある

のかについてはまったく考えなかった。就職先も彼の成績から大学側が推薦した。とにかく人生のスタートでも重要な選択でさえも自分の頭で考えたのではなかった。

ついにその反省が出た。今の仕事を退職前に辞めて、自分の意思で新しい会社に行くことにしたのだ。しかしながら新しい会社もそれまでの会社の推薦をもらっての行動だったから厳密に言うとなんだけの意思で決めた訳ではない。

そこで、新しい会社での仕事はどうなったのか。実は以前の会社の評価とはまったく変わってしまった。以前の会社では課長としてバリバリと仕事をこなしてきたつもりだった。新しい会社でも部長の肩書をもらったからそれに相應しく頑張るつもりだった。ところが新会社の社長は信之に新しい企画を前面に出し部下を引っ張ってもらうことを期待していた。信之がこれまで実践してきた、上司や部下そして同僚と単に円満な関係を持つことではなかったのだ。社長は信之の円満な性格に評価の力を置いていなかった。

これまで上司から仕事で責められることはなく、いわば優秀な社員だった。ところが今度の社長の評価は悪かった。ついにはその会社の子会社に出向させられることになってしまった。仕事は毎日事務処理ばかりになった。信之は考えた。今までの人生は何だったのか。ただ周囲とうまくやることで課長にまでなったが、実際の実力は自分が思うほどのものではなかったのかもしれない。

徹也も次第に受験勉強そのものに疑問を持つようになった。そんな父親を見て、自分がこれから挑戦する大学はどう考えたらいいのか。大学を出たところで就職のための勉強で、結局自分が何をしたいのかさえわからないまま人生を終えることになってしまうのではないか。徹也は決心した。大学に行くことは止めることにした。自分のやりたいことがわかるまで職にも就かずブラブラと旅に出ようと思ったのだ。そこで様々な人と出会い、自分が本当にやりたいことを見極める。その方が人生の実りが大きいのではないかと思ったのだ。

すでに大学生だった姉の友紀はコンビニでアルバイトしていたが、その店長と恋に落ちた。相手は妻子持

ちだったから不倫の関係だった。年齢も一〇年以上も離れていた。不倫の関係が行きつくところどうなるのかは十分に分かっていった。だから人並みに恋をしてみたかっただけなのだ。一度、飲み会で帰りが遅くなり、友紀は店長に家の近くまで送ってもらった。二人は公園に入り、抱き合い口づけをした。しかしあろうことに信之に目撃されてしまった。ショックを受けたのは信之だ。しかし口にすることは出来なかった。じつと心のうちにしまっておくしかなかった。ところがしばらくすると友紀はコンビニを辞めた。どうやら店長との関係は終わったようだ。最後は空しさだけが残ることを知っていたのだ。

一方、妻の靖子にも誘惑の手が伸びないことはなかった。新幹線の中で話した男、取引先の若い男、その二人からそれとなくデートを誘われた。仕事は順調だったし、自信にも溢れ、そういうときに心に隙が出来る。偶然もあって二人の誘いはうまく避けることが出来たが、やはり中年女性の独り暮らしは危ない部分がある。靖子は気づいた。彼女は信之から相談したいことがあるといわれ、京都の住まいに信之に来てもらった。そこで信之から新

しい会社からさらに出向を命じられたこと、それが彼の意にそぐわないこと、そして辞めたいとの思いまで聞かされた。さらには友紀の不倫、徹也の大学受験断念まで聞かされることになったのだ。失望したことはそれら家族の一大事をまったく知らずにいたことだった。靖子はついに決心する。仕事を任され、会社からもなくてはならない存在として期待されていても自分はやはり家族の方が大事だったのだ、と。

私がこの小説を読んでつくづく感じたことは、人間というのは、日常を何も考えずに生きる動物なのということだ。考えているようで何も考えていない。とくに信之の人生などその典型だ。他人に方向を決められ、自分で何一つ決めることなく自分の大切な人生を闇雲に歩きまた突っ走ってきただけだった。ついに人生の終わり近くになってやっと気づく。自分の人生は一体何だったのだろう。

徹也の選択は正しいと私は思う。大切な時間をただブラブラと浪費しているように見えるがそうではない。ど

んな仕事に自分の適性があるか、またどういう人生を送ることが自分にとって価値があるか、それを苦勞することによって体得するに違いない。

友紀にしても恋が終わって人間として一皮むけたように思う。彼女はいままでろくにしてこなかった家事を積極的にこなすようになった。何にでも積極的に取り組むようになった。間違いなく成長したと言ってよいのではないか。

人生は確かに行動しなければ分らないことがある。しかしその都度立ち止まりながら、よく考えて自分の頭で決断すればよりよい人生になることも確かなのである。

田坂広志氏著「死は存在しない」について

この著書には、長いサブタイトルがついている。「最先端量子科学が示す新たな仮説」というものだ。

まず著者の紹介から始めたい。彼は一九七四年に東大を卒業。一九八一年には同大学の大学院を出て、そこで

博士号を取得している。専攻は原子力工学。こういう人物であるから科学にのめり込み、当然科学万能と信じる唯物論者ということになる。

それが何故、「死は存在しない」などといった非科学的なことを言い出したのか、それは彼自身が経験したことであり、またどうしても科学では説明不能な現象が現実には起きているから、だった。それが死や死後の世界の探求に駆り立てた理由であった。

彼自身が体験した例をいくつか挙げると、①視線には力があつて他人に見られるとそれに人が感応するという事実、②以心伝心。言葉がなくても相手が今何を感じ考えているか分かるという現象、③予感や胸騒ぎという現象、④さらに予感よりも具体的に未来を感じる体験としての予知、⑤占いが的中する事実、⑥デジャブ現象といつて日常のある光景が過去どこかで見たことがあると感じる体験、⑦シンクロシティ。日本語で共時性というが誰かのことを話していると突然その人物から連絡がある、あるいは何かの問題が心に引っ掛かっているときたまたま喫茶店などで隣の人がその問題を話してい

る、といったことだ。

以上のような数々の不思議な事実、しかしこれらは田坂氏だけではなく誰でも体験していることである。

一方、説明不能な現象とは、ひとつには宇宙の存在だ。宇宙の基本的性質を表す「自然定数」といわれるものが「奇跡的な数字の組み合わせ」になっていることだ。つまり重力と電磁気力の強さや、陽子と中性子の質量の大ききの数値がわずか0・1%違っただけで、この宇宙が、生命誕生に相応しい形で「存在」できなかったというのだ。二つ目は「量子の絡み合いと非局在性」の問題。一度絡み合った量子同士は宇宙の彼方に引き離されても、一方がある状態を示すと、もう一方は、瞬時にその反対の状態を示すという不思議な性質がある。光速よりも速く情報が伝達されるのだ。これは「非局在性」と呼ばれる量子の性質であり科学では到底説明が出来ない。三つ目は「ダーウィニズムの限界」という問題。ダーウィンによれば生物の進化は突然変異と自然淘汰によって起こる。しかしこの理論によれば人類のように高度で複雑な生命が誕生するためには地球の歴史四六億年ではと

でも足りない。恐竜が絶滅した六六〇〇万年前から一千万年くらい経った後にネズミのような哺乳類がはじめて地上に現れ、それが進化して人類に発展したのだが、どうして一千万年単位という短い時間で人類まで発展したのか科学では到底説明できない。四つ目は「生物の帰巢能力の謎」という問題。河川で卵から孵化した鮭の稚魚が春、海に降り外洋で何年か過ごして、終には生まれ故郷の河川に戻って産卵する。また鳩の帰巢能力や渡り鳥の方向認識能力の高さは科学では説明不能なのだ。五番目は「神経の伝達速度と反射運動の謎」という問題。例えば野球を考えてみる。投手の時速一六〇キロの球を打者が視神経で捉え、脳神経に伝え、それから筋肉を動かすプロセスでは、神経の情報伝達速度を考えるととても打者は打ち返せないことになる。しかし打ち返せている。この反射運動を科学では説明できないのである。以上掲げた問題例は科学の範囲を超えて存在している。としか言いようがない。原子力畑で長年過ごした田坂氏も次第に科学だけでは説明不能な現象に直面することで、人知不能な「モノ」がどこか、それこそ宇宙空間に存在

するのではないかと考えた。

それが、田坂氏の言う最先端量子科学が示す新たな仮説であり、「ゼロポイントフィールド」の存在ということになる。これは仏教でいう「阿頼耶識」と呼ばれる意識の次元があるとされており、それがゼロポイントフィールドそのものではないのか。阿頼耶識は世界の過去の出来事のすべての結果であり、未来のすべての原因となる種子が眠っているとされる。古代インド哲学では「アーカーシャ」の思想が語られており、このアーカーシャこそ宇宙誕生以来のすべての存在についてあらゆる情報が「記録」されている場であるという。一般にはアカシックレコードとも言われる。

このアカシックレコードあるいはゼロポイントフィールドは「すべての波動」が「ホログラム原理」で記録されるため極めて高密度の情報記録が可能であり、またそれら波動情報は減衰することなく永久に存在し続ける。情報の記録は無限大であり、この世に出現し、消えて行った一千億人とも考えられるすべての人の言動とさらには何を考えたかについてもすべて記録して

いる。つまりこの地球上で起きたあらゆる事象・現象をすべてこと細かく記録していることになる。だからこのフィールドに何らかの理由でつながればこの世の不思議な現象、予知も可能になるというのだ。ゼロポイントフィールドでは過去も現在もそして未来も同時に分かるといふ。未来は過去や現在から総合して未来の方向がいくつかのパターンで予測・認識できるというのだ。

ところで、人生がどうしてここまで辛く哀しいものなのか、田坂氏は人生についても考えている。その原因が人間には恐怖と不安がまとわりついているからだと言張する。恐怖は勿論死であり、死後の世界がまったくの未知であるからだという。またどうして不安なのかといえば、未来がまったく見通せないからだという。いついまた安定した（不安定であっても）状態が突然崩れてしまうのか見通せないからなのだ。そのために少しでもよりよい未来のために努力する、悪く言えばもがく。他人より有利に先に行きたい。飢えることのまったくない状態、裕福な状態になりたい。出世したい。そうしてスト

レスの充滿した絶望的な競争社会がそこに出現する。それが現世である。

ところが、あの世、ゼロポイントフィールドに戻れば一切の恐怖や不安から解放され、競争もないから勿論ストレスなど微塵もない。平和であり、皆が皆他を思い遣ることの出来る世界なのだという。愛一元という言葉で田坂氏は表現している。他人を心から愛せるというのだ。死後は天国も地獄もない、平和な世界が待っている、だから人生を悲観して死を早めることのないように希望を持つてこの世を生き切ることが大切なのだと言張する。この世に生を受け、消えて行った人の数はトータル一千億人。その一千億人は現在ゼロポイントフィールドにいますと田坂氏は主張する。魂は無限ですべて死後はゼロポイントフィールドに存在するようになりますと田坂氏は言っているのだ。

それでは生まれ変わりの現象はどう説明するのか。この世には前世の記憶を持って生まれてきた実に数多くの人々がいる。田坂氏は、これもゼロポイントフィールドによって説明が可能と言う。これら幼児期に前世の記

憶を主張する子供たちは何らかの理由でゼロポイントワールドにその意識がつながり、ワールドに記録されている過去の別の人物の情報を語っているに過ぎない、と言うのだ。つまり生まれ変わりはないと田坂氏は主張しているのである。正にこれなどは科学を徹底追及してきた氏らしい考えだ。

しかし、私はこの主張に真っ向から反対の立場をとる。私は神が間違いなく存在するという立場だ。そもそも神が人にこの世の旅を与えるのだ。それは未熟な魂をこの世という過酷な世界に放り込み修行させる目的があるからだ。この旅に失敗する人も必ずいる。そういう人たちには何度でもチャレンジさせる機会を与える。逆にそうでなければ不平等だ。神に近い魂の人々がおられるが、そうした人々のレベルまでに達するように神は個々の魂に努力を要求する。だから何度でも生まれ変わる。生まれた環境や持って生まれた才能など個々人すべて異なる形で神は人に挑戦を強いる。与えられた状況で努力してみなさい、というのが神の意思だ。

したがって、当然、ゼロポイントワールドで愛一元

の落ち着いた静寂な幸せな環境でずっと暮らせるはずがない。人は否応なく、過酷なこの世に舞い戻ってくる。そして努力を強制させられる。それは否応なし、抵抗不能なことなのだ。

田坂氏の「死は存在しない」という主張は間違いなく当たっているが、生まれ変わりを否定したところが間違っている。私はそのように考える。

魂がゼロポイントワールドに戻り、そこに永久に存在し続けることは私たちに安心感を与えてくれる考え方だが、様々な様な経験をした、善良な魂と極悪非道な魂が一緒の空間に居て安楽な状態にいないというのはいかにも不自然だし、一切の修行にもならない。田坂氏のこの論調は読者に安心感を持たせることで好著だが、不足する部分もあると私は思った。

●ドラマ・映画の感想

ドラマ「津田梅子」について感じたこと

先日、津田梅子さんの生涯をドラマで見た。最初に思ったことは、この人は強い、並みの人ではないということとだった。新札の五千円に肖像として採用される人物に相応しいとも感じた。

何が凄いか、たった六歳で親元から引き離され、女子教育の未来を考えるとという国の政策の一環としてアメリカに留学させられるのである。そのとき少女五人だけでアメリカに向かうのであるが、梅子は最も幼かった。最年長は一一歳、まだまだ親に甘えていたい年齢である。実際、五人の中で一年が経過した段階でホームシックにかかり帰国した子がいた。眼病にかかった子もいて二人と一緒に帰国した。残ったのは梅子を含め三人。この三人が生涯の友になっていくのである。

一一年が経った頃、三人に帰国命令が出た。一一年もよく親兄弟姉妹に会うこともなく我慢が出来たものだと感心する。梅子は一七歳になっていた。アメリカへの出発前、五人は帰国後にはアメリカ滞在の経験を生かし、英語の熟達者としてエリート活躍が約束されていた。

梅子は勇躍した。しかし帰国してみると、その約束はまったくの反故にされた。まだ当時の日本では女子が活躍する場所などなかったのである。世間は男尊女卑が完全にまかり通り、女子は男子の陰に隠れてひっそりと生きる、これが当たり前だったのである。まして女子が独立して生計を立てることなど不可能だった。だから女子が生きていくには結婚して男子に養ってもらわなければならなかった。アメリカでは女子の自活はふつうだったし、男子に伍して堂々と意見を述べることも当然のことだった。この空気に慣れてしまっていた梅子にとっては、帰国した日本には大変な違和感があった。カルチャーショックと言ってもよかった。日本で活躍する場所のない梅子に対し、両親は結婚を勧めたが、彼女は断固としてそれを受け容れなかった。女子の意識改革と地位向上のために人生をかける決意だったのだ。

梅子はまず自活のために仕事を探した。幸いにして日本には文明開化の波が押し寄せており英語の需要が高まっていたから、まず英語学校の講師の職を得た。講師の職に就いて、女性たちに教えているうちに驚いたこと

は、英語そのものを学ぶというよりも英語を学んだという所の箔をつける意識の方が高かったことだ。結婚に有利なのである。勉強をしても女性たちから自己を主張する傾向はまったく見られなかった。ただ机に座って梅子の授業を聞いているだけなのである。何を問いかけても自分の意見を主張できない。これが梅子には無気力と映った。梅子は失望した。どうしたら女性たちの向上意欲を引き出せるのか、悩みに悩んだのである。ついに挫折し英語講師の職を辞した。給与をもらってただその職に留まることは彼女のプライドが許さなかったのである。

自宅に引きこもっていると次に政府から、新しく出来た鹿鳴館というところで、上流階級の華族たちが西洋人と社交する場が出来たから、そこで西洋のマナーを教えてくれとの要請があった。食事マナー、食器の使い方、歩き方まで、さらにはダンスまで指導した。しかしこれにも失望した。猿まねの域を出ていないと認識したのだ。梅子の偉いところは、ここは自分のいる場所ではないと決断できたことだ。地位と給与を約束されて、それに甘

んじる人間が多い中で彼女はそういう人間ではなかった。何かが違う。自分はこんなことを教えるために一年間もアメリカに行って貴重な時間を費やしたのではない、と思ったのだ。女子の生活力向上と意識改革のために一体自分は何が出来るか悩みに悩んだところが素晴らしい。

そこで彼女は再びアメリカ留学の決意をするのである。英語だけ出来たところで本当の教育が身についている訳ではない。第一自分は大学も出ていない。両親に相談すると案の定反対された。しかしそれで諦める彼女ではなかった。今度は自費で留学することにしたが、そんな金はどこにあるのか。英語講師や鹿鳴館の指導員で多少の蓄えはあったものの、とても海外での大学生活をまかなうレベルではない。ここで動いてくれたのは初代の文部大臣になった森有礼だ。森は政府各方面に働きかけて梅子の資金協力を願い出て、それが成功した。さらには留学当時に懇意になった上流階級の夫人のお蔭をもつて授業料も免除になった。こうしてブリンマー大学に留学できたのである。選んだ専攻学部は生物学だった。

英語だけでは真の教養は身につかないと考えたのだ。広く学問を身につける、そうした考え方の取れることが彼女の凄いとところだと私は思う。

留学から帰った梅子がやったことは津田英学塾の開学だった。これが後の津田塾大学、女子大学の名門校として現在もその英名を轟かせている。かくして誠心誠意、女子の教育に打ち込んだその功績に心服し感動する。彼女の信念はどこから来たのか。女子が男子の陰に隠れその才能も可能性もすべて自ら放棄している現状に我慢がならなかったのだ、と私は思う。今でこそ男女同権、男女の能力に違いなど一切ないと当たり前のように世間は考えているが、明治初期は決してそうではなかった。この頑迷固陋な世間の慣習を打破した彼女の強さは正に尊敬に値する。

生涯の親友となった他の二人は結局結婚してふつうの生活に入った。梅子ただ一人が女子の自活を実践して一生独身を通じたのだった。梅子のようなこういう素晴らしい先人がいて今の日本があるのだということだろう。五千円の肖像として採用されたのは樋口一葉に続く

て二人目だが、彼女たちはそれに相応しいと改めて私は思った。

ある時代劇ドラマから得たヒント

かなり以前になるが、NHKの時代劇を見ていてはつとした。そこから得られたヒントは人生のすべての教訓になると感じたのでここに記してみる。

それはこんな場面だった。ある女がどんな幸運に恵まれたのか（前の場面を見ていないため不明）大きな身代のご新造として嫁入りすることができた。彼女は貧しい家の出だった。いわゆる玉の輿だったのだ。美人だったが、それでもこの身代の主人は身分の違いからこの嫁が気に食わなかった。

いよいよ床入れの段になった。彼女は床を敷き、主人のやって来るのを待った。必ずしも主人を愛して嫁に入った訳ではなく、彼女の方も運の巡り合わせで男と一緒になったとしか思っていない。夜が更けて一一時頃にな

った。主人が廊下を渡って来る気配がした。そして障子の向こうに影が立った。いきなり障子が大きく開け放たれ、主人が姿を現した。いよいよ自分も男に初めて抱かれるのか。期待と不安、ある種の諦めの入り混じった感慨を持った。しかし突然男が大きな声を出した。「お前なんか、嫁として認めたわけじゃないんだ。玉の輿に乗ったからと言って大きな顔をするな。誰がお前なんかと床を一緒にするものか」と言って掛け布団も敷布団も大きく跳ね飛ばした。それから大きな音を立てて再び部屋から出て行った。

ここでふつうの女性は自分の魅力が男にまったく認められなかったと考えがちだが、彼女にはまったくそんな思いはなかった。笑ったのだ。そしてこう言った。「よかった。せいせいしたわ。今夜はゆっくり広々と寝させてもらおうと」。決して負け惜しみで言っているのではない。その証拠に気持ち顔に出ている。その顔は晴れ晴れと心底嬉しそうなのだ。

どんなに嫌な男でも自分が女として求められなかったと知ると、たいていの女性は失望し心に重いものを感じ

じる。男もそうだ。逆の立場になれば心が傷つく男もいる。男女間の問題については、その失望は半端ではない。しかし彼女の場合はそうではなかった。私はここに人生のヒントを見たような気がする。心に負担を感じ、傷つくのは勝手だ。しかしそれでは自分が損ではないか。平気でやり過ごす勇氣と心の大きさ、これが大切なのだ。ひよつとしたらこの男は故意に女を傷つけて、家から出なくなるように仕向けたのかもしれない。そんなことに負けてはいけない。この教訓は人生のあらゆることに通じる。男女間の問題だけではない。小さなことで自分を虐める必要はまったくないのである。

映画「ブラダを着た悪魔」

この映画は二〇〇六年の作品で、そのころはパワハラに対する規制がまだ一般的でなかった。とにかくこの作品の中では、ファッション誌「ランウェイ」の辣腕編集長・ミランダの横暴振りが際立っている。彼女は自信の

塊だ。そういうのも彼女の取り上げるファッションは大抵ヒットする。ヒットし売り上げが伸びる。流行を察知する能力に極めて優れており、それだけに彼女の言うことやすることに周囲が反論や反対行動を取ることはあり得ない。

多忙を極める彼女にはアシスタントが二名いた。第一アシスタントが事情により辞めたことで急遽アシスタントの求人があった。応募してきたのが、アンドレアである。元々は記者志望だったが、ミランダのアシスタントを一年務めただけでどんなきつい仕事にも対応できる能力がつくとの友人からのアドバイスによつて応募した。アンドレアは美人であり、磨けば玉になるとのミランダの判断から採用になった。第二アシスタントというわけだ。

最初は酷く苦労した。ミランダというのはもの凄く仕事の出来る女性で、しかも絶大な実績を出している。ファッション界ではすでにカリスマ的存在になっている。そういう人間だからわがままで自分の気に入らないことには平気で部下たちを罵倒する。周囲は恐れを持って

接しており、何も言えない。雑誌に関すること、ファッションに関することであつてもスタッフの意見は一切無用とされた。仕事はスピードがミランダのモットーであつて極端に言えば、一分一秒も遅延は許されない。アンドレアは何事も自分が大きくなるための試練と受け止め、じつと我慢を続ける。嗜好品はコーヒーで上質のコーヒーを彼女の必要な時間、タイミングで必要な量を用意しておかなければならない。出張も多かった。電車、飛行機どんな移動手段も彼女の求める時間の切符を指定席でスピーディーに用意しなければならない。

アンドレアを助けてくれたのは、「ランウェイ」のビューティー部のアソシエイトエディターのジェームスだ。彼はアンドレアの上司になり、このジェームスの優しいバックアップとアドバイスでファッションにもミランダのアシスタント役にも精通していく。元々センスも能力もあつたのだろう、アンドレアの成長スピードは半端なものではなかった。ミランダはついにアンドレアの能力を認め、第一アシスタントの地位に上げた。第一アシスタントだったエミリーを差し置いてパリの社交パー

ティーにも同行させた。交際範囲も大きく広がり、それまでの平凡にして二流の集まりから、超一流の仲間入りを果たしたのである。一流の作家も近寄ってきた。美人のアンドレアは早速狙われたのだ。しかしその男、何か胡散臭い。近づいたのは愛を求めるということではなくて遊び感覚ではなかったか。一度うまく誘われてベッドを共にしてしまうが、それは一度だけだった。

しかしそうなるまでこれまで付き合いのあった恋人とも次第に疎遠になっていく。話す言葉も着るファッションもふつうのレベルの恋人とは一線を画すようになってしまった。ここでアンドレアという人間の人生の分岐点が訪れる。一流できらびやかだが、何か虚偽の世界のように感じた世界にこのまま留まるか、それともこれまでの平凡だが、何らかの真実があり、温かみもある元の世界に戻るか。悩んだアンドレアだったが、彼女は「ランウェイ」のミランダの華やかなアシスタントの立場を捨てて、平凡な世界そして本来の記者を再び目指すことにしたのであった。心優しい恋人の下に戻ったということになる。

アンドレアは、実は、ミランダの不幸も自分の目で見ていた。華やかだったが、あまりに多忙だったため家庭を顧みることがおろそかになって、夫から離婚を迫られていたのだ。双子の幼い可愛い娘たちとも別れなければならない。そこで見せたいいつものミランダの超一流の洗練された美しさは失われ、疲れ果てた中年女の姿があった。

それを見たのが原因だったのかよく分からないが、何か違うのではないかと考えたことは確かだったように私は思う。このまま行けばその世界で一流になり資産も築けたに相違ない。しかし彼女はそんな世界を捨てた。私は勇気ある行動だったと思う。自分にとって何が真実なのかを見極めたのだ。

この映画は実にハイテンポでストーリーが展開していく。小気味いい。しかしその中で映画製作者は映画鑑賞者に訴えかけたように思う。きらびやかで他人が羨む世界であっても、違和感があればさっさと退場すべきだということ。これも見る人の人生観なり価値観で異なった結果になるだろうが、私は思った。アンドレアの選択

が正しかった。楽しいが何らかの教訓を与えてくれた映画だった。

映画「デーパーインパクト」について

まず粗筋を簡記したい。この映画は巨大隕石の落下によって地球が滅亡の危機に陥る物語である。結果から述べると多くの何百万という単位の人々が天津波の犠牲になったが、事前の情報で地球上の大多数の人々は高地に避難して命が助かった。これとて、命を捨てて巨大隕石の爆破（爆破によって巨大隕石は2個に分裂。そのうちの小さい方が地球に落下）に立ち向かう人々がいなかったならば人類のみならず殆どの種が地上から姿を消すことになった。

これと類似した事件が6600万年前、かつて恐竜が全盛を極めていた時代にも起きた。直径が10キロメートル超の隕石がメキシコ・ユカタン半島に落下して地上の種の98%が死滅した事件だ。これにより恐竜は絶滅し、変わって哺乳類が出現することになった。恐竜の時

代は2億年以上も続いたのだが、それに比べ人類はその祖先から始まって現在のクロマニヨン人の時代になってまだ100万年に過ぎない。人類はその急激な進歩によって自らの首を絞めて自滅を招きつつあるが、この映画は人類の自滅がテーマではなく、あくまで宇宙に浮遊する小惑星のひとつが隕石となつて地上に落下する、その危機から人類を救う戦いを描いた。

映画では隕石襲来の情報は一年以上前から一部の関係者には伝わっていた。しかしそれは尋常な方法では避けられない状況だった。そこで各国の指導者が考えたことは、二年間程度耐え忍ぶことが出来る食糧や水、さらにはあらゆる種の動植物を地下に巨大シェルターを建造し、そこに退避させることだった。大きな問題は知性も理性もそしてあらゆる感情も兼ね備えている人間を全人類のうちのたった100万人だけ選び、シェルターに運ぶことだった。旧約聖書にあるノアの方舟と同じだ。しかし、どうやって100万人を選ぶのか。映画だから簡単に100万人というが、選ばれた人と選ばれなかった人の差は絶望的である。かたや生存、かたや死を宣

告される。選定を秘密裏に行うのならばまだしも映画では公然と抽選で行っている。こんなことが可能はずがない。この辺がこの映画の荒唐無稽なところだ。選ばれなかった人たちは黙って指示に従うことはあり得ない。納得して指示に従い、従容として死に赴く人間がどれほどいるか。限りなくゼロに近いだろう。誰しも死にたくない。それは高齢者であっても同様だ。自分だけは何としても助かりたいのが人情だ。中には若いものに100万人の枠のひとつを譲る人がいるかもしれない。しかしいざとなると疑問は必ず起きる。どうして自分が譲らねばならないのか。そう考える。それが人間の弱さだ。人間としての完成度が高い人なら譲るだろう。自分は高齢者ですでに様々なことをこの世で経験させてもらった。だからもうこの世に未練はない、だからここはより若い人に枠を譲ろう。そう考える人もきつといる。しかし大部分の人々は他人を押しつけても自分だけは助かりたい、と考える。だから選ばれなかった人たちの間で必ず暴動が起こる。100万人を選ぼうとした指導者層に反乱を企てて不思議はない。この映画の大前提がふつうに

考えるだけで成立しないことがわかる。この辺がこの映画の限界だろう。

●その他

ある若年末期ガン患者のこと

日本人の二人に一人が侵されるというガン。ある朝NHKテレビのニュース番組で短い時間ではあったが、ある若年末期ガン患者を放送していた。横浜市で若年末期がん患者に介護保険を適用することや補助金を出している施策を紹介する中でのひとつの事例である。

私はこの映像を見て率直に感じたことは、神は時に惨いことをなさるというものだった。患者は小さな女の子の母親だ。映像から判断するとまだ二〇代だろう。あるいは三〇代に少し入ったか、どちらにしてもまだずつと若い。その年齢で末期のガンに侵されてしまったのだ。彼女がガンに侵される前、夫と妻、二人の女の子の四人家族は幸せいっぱいだった。四人が幸せそうに納ま

っている写真が映し出され、それがよくわかった。それなのにガンによつて一変し、不幸のどん底に突き落とされてしまった。何故なのだ。すべては神の思し召しなのだが、どういう理由でこの家族を不幸に追いやったのか、私にはまったく理解できない。

彼女はガンに侵された後も懸命に生きた。夫や子供たちの食事は体調が許す限り、作り続けた。それが自分の使命であるかのように体力を振り絞って料理した。それは家族への愛情だったのである。妻として、母親としての最低限の努力だったのである。

短い時間での報道であつたためか、詳細についてはわからない。ガンを発病し、末期であることが分かるまでの生活がどうであつたか、報道されなかった。しかしガンと闘う中で子供たちに向ける笑顔の素晴らしさから感じ取れたところは、この人は人生を前向きに生きた。息を引き取るときには感謝の言葉を呟いて旅立ったという。

一市井人であつても、このように立派に生きた人を見ると感動で心が震える。やはり善人は若死にをするのか

という、かねてより私が抱えてきた基本的な疑問にまでも立ち戻つてしまった。

人間はこの世に解決すべき課題をもつて生まれてくるといふ。神はこの四人、正確に言えば残された三人にどんな課題を与えようとしたのか？ 課題が妻の死によつて顕在化したと言えるし、その死には理由や目的があるはずなのだ。考えてみるにいつも遺された人たちが方が過酷だ。父親は仕事とどう向き合い、幼子二人をどのように守り育てていくのか。と言つて、若くして亡くなつた彼女に無念さが決してなかつたわけではない。彼女の立場に立つと言葉にできない。夫と特に二人の我が子を残して人生を終えねばならない辛さ。他人である自分が見ても無念さが手に取るようにわかる。神は個々の人間に対して、乗り越えられない試練は与えないと言ふが、しかしそれではどんな計画でどんな試練を四人に与えたのか。到底、凡愚な私にはわからない。そして、その後、父親としての自覚は彼女の死によつてどう変化したのか。とにかく遺された三人には無責任であつても、頑張れと心で祈るしかない。様々な理由で他人を助ける

ことが出来ないのが人生だ。このように人生は過酷だ。
しかし人は生きねばならない。

●小説風エッセイ

ある夫婦の失敗

以下は実話である。ある夫婦が主人の退職後に経験した悲惨な日々を記述することで他山の石とし、一般の参考に供したい。

ある夫婦を仮に宮本と呼ぶことにする。宮本は七年前に長年勤めた会社を定年退職した。七〇歳の時だった。給料は安かったが五〇年以上も同じ会社でコツコツと真面目に下働きを続け、退職によりやつと会社という圧制から解放され自由を得た。その時、手にした退職金は二千万円。これまでに目にしたこともない大金だった。夫婦は有頂天になった。無理もない。これで多くのものから自由になると錯覚したのだ。加えて身を削る思いで貯めた五百万円があったから、これを合わせると二千

五百万円になる。苦勞して育てた長男と長女はそれぞれ独立して家庭を持つている。節約しながらも彼らを大学まで出してやった。安給料で二人を大学まで出したことは如何に日々の生活を切り詰めてここまで頑張ったかということの証左だ。後は子どもたちが自己責任で生きて行けばいい。そう考えるとなんと自由に晴れ晴れとした気持ちになったことだろう。

夫婦は考えた。これまでギリギリの切り詰めた生活をしてきたのだからこれからは多少の贅沢は許される。人生を楽しもう。手元には現金にして二千五百万円もある。年金も二人合わせて月一八万円。家も土地も親から引き継いだものがある。何の心配もない。これからはこれまでの鬱屈した生活から自分たちを解放し人生をエンジョイするんだ、と考えた。

そこでまず旅行を計画した。これまで夫婦で旅行することは一切なかった。たまに子供たちを連れて動物園や遊園地に出かけたことはあったが、旅行は贅沢だったのだ。旅行のための専門雑誌を定期購読することにした。そしてその中からこれと思う場所に二カ月に一度、三

泊か四泊の旅行を計画した。旅館は勿論高級なものにした。今だからできることをしたい。そこでは豪華な食事を楽しみ、そして好きな温泉に浸る。それまでは考えられなかった夢の世界だった。生きてきてよかったと思った。

日々の生活も少しずつ贅沢になった。身につける物も品質の高いものを選んだ。中にはブランド品も含まれた。たまに高級レストランで外食もした。かつての職場の同僚とも付き合いを続けた。ゴルフの誘いには毎回応じた。ゴルフは大体一回に一万五千円を必要としたし、酒の付き合いでは毎回五千円近い出費があった。なにしろ頭の中には二千五百万円があったから安心だった。つまりそれが人生最高の時だった。

しかし問題は金の出具合だった。クレジットカードでの支払いが多かったので貯金通帳をあまり見なかったが、三年が経った時、財布の中味を改めて確認した。すると驚いたことに予想以上に額が減っていたのだ。年金の月一八万円だけではまったく足りずに毎月大幅な赤字を出していた。しかもそれは半端な数字ではなかった。

二千五百万円あった手持ち資金は一千七百万円に目減りしていた。八百万円も減っていたのだ。あれっ、こんなに減っている。しばし愕然としたが、まだ一千七百万円もある、という意識の方がまだ強かった。まだ大丈夫だ、と思った。

ところが困ったことが起きた。丁度そのころ長男夫婦が建売住宅を購入したというのである。それまで公団のアパートにいたのだが、子どもの成長で手狭になったため新築住宅に移りたいと言ってきた。郊外ではあったが、まずまずの広さで宮本が見ても納得のいく物件だった。勿論息子はローンを組んだが、問題は手付金だった。どうしても三百万円が足りない。それを宮本夫婦に無心してきたのである。断る訳にも行かない。大切な長男だ。これから面倒を見てもらうこともあるだろう。内心は穏やかではなかったが、表面的には積極的に支援するという態度を示した。しかしやはり三百万円は痛かった。

困ったことは続くものだ。次なる問題は長女夫婦の長男だった。入学金の高い私立大学に入学したのだ。一五〇万円を手伝ってくれという。これも仕方なく出した。

長男に出して長女に出さない訳には行かなかった。これで一気に貯金は四五〇万円も減って、なんだかんだとついに現金は一千二百万円と少しになってしまった。

宮本夫婦は金というものの不思議な動きを理解していなかった。金はあると思つた瞬間にどんどん出て行く。財布の紐は常にある程度は引き締めておかねばならない。夫婦は二千万円の退職金で気持ち大幅に緩んでいた。金は湯水のように出て行った。

次は自宅の問題だった。長年住んだ自宅のいたるところで修理箇所が出て来た。まず床だ。歩くと床が沈む。内装も痛んでいた。それに風呂場だ。木で出来た浴槽は腐ってきた。ガスの湯沸かし部分も点火がうまくいかない。ガス風呂に替えて随分と時間が経っていたのだ。ガスだから危ない。あちらこちらで気になる箇所が多くある。この際、家の内装も風呂も一気に修理しておかないと、第一風呂にも安心して入れない。思い切つて業者に見積依頼をした。結果はなんと六〇〇万円だった。しかし住み続けるため、とくに風呂場の環境は大切だ。修理を依頼せざるを得なかった。

焦った。これで退職金の二千万円のすべてが失われてしまった。悪いことは続くもの。そんな時にこそ貧乏神が押し寄せる。友人の中に坂井という男がいた。この男が最近株取引で大儲けした。買った株が急騰したのだ。もともと彼は裕福な男だった。株取引においては余裕資金を持っている者が勝つ。なんと三千万円を同じ株に投資しており、それが急騰したのだ。一千万円の利益が出たという。それが坂井にとつて自慢だった。折悪しくその友人から久しぶりに会おうと電話があった。坂井は誰かに吹聴したかったのだ。居酒屋で飲みながら宮本が金の愚痴を言う、待つてましたとばかりに坂井の自慢話が始まった。そんなに困っているなら株でもやったらどうだ、と言ったのだ。俺は軽く一千万円儲けたぞ、なに簡単さと言った。坂井も結構苦労してやつといい株に出会っただけなのに自分は株取引の天才であるかのように吹聴したのだ。何も知らない宮本は話に乗った。金が勢いよく流れ出て行く状況に精神の安定を欠いていた。よせばいいのに坂井が成功した同じ株に有り金のすべてとなる六百万円を投じてしまったのである。これは坂

井の責任だ。急騰した株は同程度の反落がいつか必ずある。宮本が買って少し経ったころ、急落したのである。宮本はパニックになった。株取引は素人にとっては博打だ。株価があつという間に落下する様子に耐えられなくなった。我慢すれば戻ることもあるのに焦って全株売りに出してしまったのである。これでまた四〇〇万円が失われた。とうとう二千五百万円あつた現金が、二百万円を切るまでになつてしまった。長期にわたってコツコツと貯めた金もなくなった。絶望状態になった。これからまだ一〇年はある余生を以前同様にカツカツの状態で生活をして行かなくてはならない。贅沢三昧のあの三年間はもう戻らない。あれは夢だったのか。

人間は金に追い詰められると正常な思考が困難になる。夫婦は頭を抱え込んでしばらくの間、何も手につかなかった。そして考へ着いたのが自宅の売却だった。こんな小さな家でも一千万円にはなる。その金で借家に移り節約生活をすれば残り一〇年をなんとか生活できるだろう。ただし病気になつた場合は別だ。ともかくもあの三年間には到底戻れない。戻ったら地獄だ。親から相

続した家と土地は他人の手に渡る。それがどんなにつらいことか。そして残念ながら息子や娘に頼ることもできない。彼らだつて日々苦勞している。金に余裕などない。その時宮本は改めて思った。自分たちの人生は一体何だったのか。金に攻め続けられるだけの人生だったのか。これが運命だったのか。人生とはこんなに惨いものなのか。自分たちには人生をエンジョイする権利もなかったということか。

宮本は絶望した。しかし、人生をエンジョイするなんてことは、さして重要なことではない。それよりふつうに生きることだ。二千五百万円を上手に使えば悠々自適とまでは言えないが、まずまずの生活が出来たはずだ。資金計画があやふやな場合は人生の贅沢は諦め、金のかからない趣味でも見つけ、まずしっかりと生活のための人生設計をするべきだったのだ。

金は不思議なもので粗末に扱うと逃げて行き、大切に扱うと集まってくる。宮本はこのことをしっかりと頭に入れておくべきだった。

大石邦子さんの人生

「人生とは理不尽で不条理である」

私のこの思いは終生変わらない。そして、これから述べる女性の人生はこの思いをより確かなものにした。神は試験に耐え得る人にのみ、その試験を与えるというが、こんな試験なら、私は神に選ばれない方がいい。

ある女性とは大石邦子さんという方だ。

大石さんは酷い交通事故に遭遇した。事故は彼女が二二歳だった、昭和三十九年九月に起きた。そのとき彼女は通勤のため、生まれ故郷の会津美里町から会津若松市まで満員のバスに乗車していた。当時は地方にも人があふれていたのだ。

その瞬間まではいつもと変わらぬ通勤風景だった。窓の外には見慣れた景色が流れ、彼女の頭の中には、その日為すべき仕事のいくつもの手順がよぎっていたことだろう。

そんな中、事態は一瞬にして激変した。それはまった

く突然のことだった。そのときバスの横を走っていた乗用車が突然、車線変更してバスの前に出たのだ。バスの運転手は追突を避けるため、急ブレーキをかけた。満員のバスの中は乗客が将棋倒しになり、一瞬にして悲鳴と絶叫の飛び交う地獄と化した。

事故のとき彼女は運転手の真後ろの金属枠の傍らに立っていた。それが不運だった。満員の乗客が倒れた凄まじい重みが彼女をもろに金属枠との間に挟みつけた。彼女を押し潰した形となり、そのまま意識を失って気づいたときは病院のベッドだった。

そして、それが彼女の闘いの始まりであった。

脇腹を突き上げてくるような痛み、しかしそれがどこかの痛みなのかわからない。寝返りも打てなくなった。痙攣のような痛みである。そして足がピクリとも動かない。それが何年も続いたのだ。そして、怖いことに脊髄液が濁ってしびれが脳まで達すると言われた。だが実際のところ、しびれは顔面の半分で止まってくれた。

突然断ち切られた現実を感じないわけにいかなかった。自分のことが何も出来ない。他人の手を借りなければ

ば何事もできない体になった。彼女自身がイメージしていた人間の体ではなくなつた。何度も死にたいと思つた。実際に服毒自殺を何度か試みたが、死に切れなかつた。その度に父親から生きろと叱られ励まされた。その父も叱りながら泣いていた。自分も理不尽な運命に悔し涙は止らなかつた。

ストレスや不満の解消法が見つからない。それでつい自分にとつての最大の味方である両親に当たつた。だがいつも両親は黙つて、優しく受け止めてくれた。

彼女は考えた。何の役にも立たない自分に生きる価値があるだろうか？ 両親を始め、周囲の人たちに迷惑をかけるだけの人生ではないのか？

彼女には高校時代、女性ばかりであつたが、仲の好かつた仲間が数多くいた。友人たちは彼女を病院によく見舞つてくれた。そして優しく接してくれた。だが優しくされればされるほど、彼女は寂しくなり、自分の人生は終わったと思わざるを得なかつた。どうして私なの？ どうして私だけがこんな目に遭うの？ 彼女はこの思いに何度も襲われた。

そして、事故からいつしか時は流れ、友人たちもすでに年頃であつたから、恋をしたり、見合いをしたりして嫁に行つた。思えば、彼女たちは青春の只中にいたのだ。それに引き替え自分に青春はあつたのだろうか？ 行き着くところは、自分の人生とは何なのかといういつもの疑問であつた。

そのとき、偶然石川啄木の歌を思い出した。

『友のみなわれよりえらく見ゆる日よ』

花買ひきて 妻としたしむ』

高校時代、彼女の記憶では授業で褒められたことはなかつた。が、唯一褒められ鮮明に残つていた記憶が、この歌の感想文が褒められたことだつた。思い出すと楽しかつた。自分にも歌が詠めるかもしれないとそのとき思つた。

そんなときだ。知人が水俣病の患者が歌を詠んでいると彼女に教えてくれた。その新聞記事を読まされた。自分にも歌が詠めるかもしれない、と直感した。

そのころ右手だけが動いた。この右手を使えば歌も自

分の力で書ける。

『自分には右手しかないと思うより、自分には右手があるんだ』と思った。そう思うことによって元気が出た。そして歌を詠み始めた。すでに会津若松の病院に入院して四年が経っていた。

二〇代で死んでいく自分が詠んだ歌として両親に残したい。これが動機であった。

次の歌は事故直後の心境を思い出して詠んだものである。

『幾夜さを 疼きつくして 現身の

頼みの脚の 知覚失せたり』

当初、動いていた右足も徐々に動かなくなった。

そして次の歌は事故から間もない頃の絶望感に陥った気持ちを思い出して詠った。

『生くる望み 断たるる思ひ

じわじわと わが右脚も 動かずなりぬ』

彼女は右手以外、まったく動かなくなった。目の前の

ほんの少し先の吸呑みにも指が届かない。そんな絶望的な心境を詠んだ歌もある。

『吸呑みの 水を欲りつつ 指先の

わずかが吾には 無限に遠し』

息を吸うことも困難に思えたときもあった。

『これ以外 何も望まず わが神よ

この息らくに らくに吸いたし』

歌を詠んだ当初の動機は、両親に残すためであった。しかし少しずつ思いは変化し、新聞社の歌壇に投稿してみようと思うようになった。そして驚いたことに歌が入选した。真実を無心で詠んだ歌は人の心を打つものらしい。

選者の感想文は彼女の思いもよらぬものだった。自分が考えた以上の深みを持って感じてくれたのである。それは自分でも気づかぬ自分の心の奥底であった。歌はこれほどまでに人に訴える力があるのか、と自分でも感動した。

彼女はその頃、七年いた会津若松の病院を離れ、伊豆の温泉リハビリセンターに移った。

出版社の勧めもあって、そのときエッセイを出した。

『この生命のある限り』というタイトルであった。これが思いの外、大きな反響をもたらした。次々と手紙がセンターに届くようになった。それはダンボールにいっぱいになった。妹に日に五十通から六十通を読んでもらった。自分の書いた文章にこれほど多くの人たちが共感してくれる。これは大きな感動であったし、同時に世間には自分と同じように不幸な境遇にあって、懸命に生きている人たちがいるということにも気づかされた。

そうして、次第に彼女の中に育つ思いがあった。

『人と比べてばかりいると、みじめになっていく。人と比べてもその人にはなれない。置かれた状況の中で自分のできることをやる。どうしても自分のないものばかりを見てしまうが、比べなくなると自分の中にあるものが見えてくる』

伊豆に来て、五年が経ったころだ。突然、自分を励まし続けた父が亡くなった。そのときの彼女の無念の思い

は想像に難くない。

訃報に接した瞬間、会津美里町に帰ろうと思った。すぐ車に乗った。故郷の会津磐梯山が見えたとき、涙が流れて止らなくなった。父親が手を広げて自分を優しく迎えてくれていると思った。故郷の山河は両親そのものだった。

車を乗り続け、午後二時にやっと美里町に着いた。一目生きている父に会いたかったが、それは叶わなかった。すでに冷たくなっていた。ああ、なんと自分は親不孝なのだろう、と思った。

かつて何度も死のうと思ったが、その度に生きなければダメだ、と励ましてくれた父が先に逝った。彼女は父の遺体に向かってこう誓った。

『お父さん、どうか心配しないで。私は生きます。決して間違った考えは起こしません』

彼女は劣等感の塊りになっていた。ストレスや不満の捌け口はいつも両親だった。その父はもういない。母にもよく当たった。しかし彼女が少しでもニコツとすると、母は喜んでくれた。皺だらけとなった小さな顔で満面の

笑みを浮かべてくれた。そのとき思った。自分は何もしてやれないが、この母だけは大切に見守ってやりたい。人は絶望の連続で強くなる。人の優しさに触れたり、過去言われた言葉を思い出しては、はっと気づく。その度に人は成長する。彼女はもともとと生きたいと思うようになった。

美里町に帰って何年かが経ち、あの優しかった母も亡くなった。しかし彼女はリハビリが功を奏し、車椅子での生活であったが、いつしか一人暮らしができるようになっていた。

亡くなった父親が家の中をバリアフリーに改造していた。その父親は改造が終わるとすぐに亡くなったのだから、不思議である。

だが、彼女の苦難はこれで終わらなかった。会津美里町に帰って何年かの後、彼女は風呂場で転んだ。そのとき、体の中で船が出帆時に鳴らすドラのような音がしたという。

病院で診てもらうと、偶然にして乳癌が見つかった。

幸いなことだったが、会津若松市には名医がいた。すぐさま緊急手術が行なわれ、ピンポン玉程度の癌が摘出された。長時間の手術は成功だった。

だが、今度もそれだけで終わらなかった。手術から数日後の深夜、定期チェックのため看護師が彼女の様子を見ると、すぐ蒼ざめた顔になり、宿直医師のところへ飛んでいった。医師もすぐやってきた。その医師も彼女を診るとすぐに彼女の病室を離れた。しばらくすると、別の医師が来て、緊急手術の必要があると彼女に伝えた。胸部の動脈瘤が破裂したのだという。放置すれば命がなくなる。再び手術台に寝かせられた。見ると七、八人の医師団がすでにいる。すぐにこれだけの医師が集まってくれたのだ。有り難いと彼女は思った。手術はすぐ始まったが、始まる前に恐ろしいことを言われた。

乳癌摘出の大手術から時間が経っていないので、今度の手術は麻酔がかけれないという。時間をおかず全身麻酔をかけることは命にとって危険らしいのだ。だがそのことがどんなに大変なことか、手術を受ける前の彼女にははっきりわからなかった。

彼女は回想する。手術のメスが入った瞬間、それまでの人生で経験したことのない辛く激しい痛みが襲った。この世で経験する痛みではなかった。ギャーと叫んだ。そして次には気を失った。気を失う瞬間、不思議なことが起きた。手術台の上にある天井の大きな照明に、黄金の十字架がはつきりと浮かんたのである。そして次の瞬間、それは亡くなった母親の顔になった。

ところが、意識がなくなっても不思議なことに手術中の医師たちの声が聞こえた。医師たちもその辺は十分に心得ている。彼女が心配するような会話はしなかった。肝心な会話はすべて手話で行ったそうだ。

さらにもうひとつ不思議なことがあった。何者かが彼女の両肩が動かないようしっかりと抑える感覚があったのだ。手術後、医師たちに訊いたが、何もしていないという。それは一体何であつたのか、いまだにわからない。ともかくも大変な苦痛を乗り越えて、彼女はまた蘇った。また生かされた。

彼女は思った。

『こんな体であっても私は生き抜いた。自殺未遂を繰り返

返し、自ら痛めつけた自分の体ではあつたが、自分を生かしてくれているのはこの体なのだ。これからは自分の体に感謝しもつと大切に生きよう。この体があるからこそ私は生きていられる。どんな苦勞も生きてさえいれば、乗り越えられる。乗り越えられないものはない。そしてその度に人は強くなっていく。この世の苦勞に無駄なものはない』

大石さんは現在八〇歳をいくつか超えられた。今はご自分の体験を通じ生きることの大切さを訴えるべく、全国各地を回り講演されている。これからも、お元気で頑張っていたきたい、と私は心から思っている。

(了)

トワイライト世代 その6

安達 真魚



データセンター（印西市大塚、北環状線）

柏ジュンク堂閉店

その日昼食後、いつものように柏のショッピングビル「モディ」の階段を利用して、5Fまで登り、ジュンク堂書店に入ろうとしたところ、シャッターが閉まっていた。

「ジュンク堂書店 柏モディ店 閉店のお知らせ 営業終了日／2024年9月8日（日）」

とのお知らせが貼ってあった。

その日の前日に閉店したことがわかった。予告などは認知していなかったので、残念な気持ちと驚きで、次の行動に移ることができず、お知らせの前にしばらく立ち止まってしまった。

お知らせに書かれていたことだが、柏ジュンク堂は、2016年10月から柏モディ店内店舗として8年間営業を続けてきたらしい。正式には、丸善柏ジュンク堂書店で、丸善の系列のようだ。系列店舗のジュンク堂店池袋本店・南船橋店、丸善丸の内本店・日本橋店・津田沼店は、いずれも大型店だ。柏店も蔵書は50万冊く

らしいの比較的大型店舗であつた。この近くには、これだけの規模の店舗はない。

その後、ネット上には、柏ジュンク堂の閉店を惜しむ多くの記事が掲載されていた。やはり、この書店の閉店を残念だと思っている人が多いと感じた。

書店閉店後のこのフロアには、アニメ、コミック、ゲームの専門店「アニメイト」の他に、アニメ、ゲーム、Vtuberグッズのショップ、カプセルトイ専門店が出店している。さらに、トレカショップ、デジタクリニックなどがオープン予定だ。柏モディの客層は比較的年層が多いため、運営する丸井グループは、カルチャ―発信拠点として、関連の店舗を充実させていくようだ。自分の年代にはあまりなじみのないショップが多く、時代の変化を、少なからず感じてしまう。

以前、柏駅の近くには、大きな書店として柏ステーションモールのWING BOOK CENTERやスカイプラザ柏の浅野書店があつたが、現在はなくなっている。今は、柏ス

テーションモールのくまざわ書店と二番街カルチェ5のTUTAYAくらいだが、いずれも蔵書数は少なく、大型書店ではない。

柏駅周辺では大型書店はなくなったが、都内などにはまだまだ大型書店は健在だ。前述の丸善系列の大型書店に加えて、八重洲ブックセンター、神保町の三省堂書店など、探せばまだまだありそうだ。

最近、TUTAYA(蔦屋書店)の新規出店が著しい。本が読めるカフェが併設され、本以外の物品の販売もある斬新なスタイルの書店になっている。近場では、イオンモール幕張新都心、柏の葉T SITE、印西牧の原ビックホップはこのスタイルである。TUTAYAではないが、イオンユーカーが丘の未来屋書店もブックカフェ併設の書店だ。さらに、スターバックスコヒー(スターバ)が併設されているTUTAYAがあつて、これを「ツタバ」と呼ぶらしい。

昔は、秋葉原電気街のついでなどに神保町の書店街にも、たまに出かけたものである。この閉店をきっかけに、

改めて書店利用のスタンスを考えてみようと思う。ブックカフェの積極利用もいいかもしれない。

データセンター

印西市小倉台という地区に住んで、約30年になる。学校、公園、図書館、病院、コンビニといった施設を除くと全部が住宅地で、その住宅のすべてが集合住宅（マンション）の地区だ。Google マップで測ると、周囲約2.4 km、面積が約32 haで、東京ドームの約6.8倍になる。自宅の周囲を散歩することが多いが、地区内だけでも相当な距離を歩くことができる。

この小倉台地区から、北東に向けて、大塚、泉野、泉、鹿黒南と地区が続く。泉地区は、旧木下街道の道筋が残る昔ながらの一次産業を主体とした集落だ。泉地区を除いた大塚、泉野、鹿黒南の3地区には、当初の千葉ニュータウンの開発以降に建設された大きな建物が多い。用途は、およそ事務所、物流センター、商業ビル、データセンターに分けられるようだ。この数年では、とくに鹿

黒南地区での、物流センターとデータセンターの建設が顕著だったと感じている。2023年4月、Googleの日本初のデータセンターが印西市に開設されて注目を浴びたが、建設場所は、鹿黒南地区である。そのデータセンターは、一目でGoogleとわかるように、ビルが彩色されている。できた当初の頃、いわゆる「Google参り」に来て、写真を撮影している人も、たまに見かけたものだ。とにかく、鹿黒南地区はデータセンターが多いという認識があった。

データセンターのビルは、それがデータセンターだとわからないようにするためなのか、表札や看板に告知することは少ない。積極的にわかりにくくしているようだ。鹿黒南地区のGoogleビルは例外だと思う。データセンターは、窓が小さく、物流センターのようにとぐろを巻いたアクセス路がないので、見た目でなんとなく、データセンターだとわかる。

大塚地区のビジネス街も、たまに散歩する。この街区は、もともと北総鉄道の客数をアップさせる発想で、都

心などから通勤客を呼ぼうとして建設されている。アルカサールの居酒屋は、通勤客の受け皿の一つになっている。従って、ビルは通常のビジネスビルであるが、当初からデータセンター的に使用することも意図されていたかもしれない。このビジネス街を散歩していて、最近気づいたことは、この街区にちよつとした建設ラッシュが起きていたことだった。街区には、まだ土地に余裕があったのだらう。建設されていたのは、データセンターであった。散歩の途中なので、正確に数えているわけではないが、10棟くらいはあったと思う。それを裏付けるように、ビジネス街に接する県道の北環状線では、相当長い間、道路での電気工事が行われていた。工事の表示板をよく見ると、工事の主体は、東電パワーグリッドと表示されていた。このことは、この街区の新棟のビルは、データセンターが多いことを裏付けているように思う。

日本の公式なデータセンターの数であるが、2025年2月現在、日本データセンター協会（J D C C）のデータセンター一覧によれば、247か所のデータセンタ

ーがあげられている。一覧の内容はよくわからないが、そのうち、千葉県は13か所で、県の中では、印西市が10か所、残りは、白井市1か所とその他である。

印西市にデータセンターの設置が多い理由は、意外とわかりやすい。

- ・ 自然災害のリスクが小さい。下総台地上なので、地盤が良く地震に強い。加えて、水害も発生しにくい。
- ・ 安定した電力供給ができる。
- ・ 敷地として利用する広い土地があった。
- ・ 国道464号線が近くで、交通の便が良い。首都圏からも、成田空港からもアクセスしやすい。
- ・ データセンターで働く人を得やすい

上記のうち、印西市の場合、自然災害のリスクが小さいことと安定した電力供給できることが、とくに注目されている。

データセンターは、莫大な電力を消費する。安定した電力供給がなければ、立地できない。市内では、長い期間、そのための電気工事が行われている。一番目立った

のは、国道464号線沿いの草深地区のパークゴルフ場の隣接箇所と印旛明誠高校グラウンドの隣接箇所だ。工事の表示板には、「電線を通すトンネルを作っています」と表示されていた。この国道沿いには、電線を通すための地下トンネルが、シールド工事によって設置されていて、この2か所は、その作業口だったことがわかる。地下トンネルということは、相当な電力供給に対応できると想像できる。

データセンターとは直接関係ないことではあるが、前述の大塚地区の電気工事と同様、電力供給を地下で対応してしまうことは、とても好ましいことだと思う。コストは大きくなっても、景観上、防災上などを考えれば、これからも積極的に採用されることを期待したい。このパークゴルフ場周辺は、送電線が目立つところであるので、余計にそう感じてしまう。

多くのデータセンターが近くに建設されたところで、日常生活が何か変わるということではない。先端技術の一端を目の当たりにしていることだけで十分である。こ

れからも、データセンターがどんどん増えていくトレンドは、しばらく変わらないだろう。

と、ここまで書いた時点で、さらに身近で重大な情報入手した。千葉ニュータウン中央駅の北側のイオンの東側の駐車場敷地に、6階建てのデータセンターが計画されているとのことだった。2025年4月下旬には、近隣の住人に対して、図入りのお知らせ文が配布された。ネット上には、「駅前の一等地にデータセンター計画、『人が入れない施設が建っているのか』と反対の声相次ぐ」の記事が発表された。さらに、その記事に対応する数多くの意見が寄せられた。これまで、市内の他のデータセンターは、このように駅に近いケースはない。今回のデータセンターの立地については、法律的には問題ないらしい。

しかし、印西市や地元住民などは、現在駐車場であるこの土地の周辺には、公益性の高い施設か、マンションのような住居が建設されることを思い描いていたように思う。データセンター建設は、広く考えれば公益性が高く、他の建物より市の税金が増える可能性もある。た

だ、データセンターがその場所に建設された場合、印西市や地元住民などからすれば、それは公益性の低い閉ざされた建物であり、街の発展志向という視点では歓迎されるものではない。データセンター建設側も、地元側もそれぞれの主張があり難しい問題だ。今後を注視したい。

デジタル技術と経済力

2025年1月にトランプ氏が大統領に返り咲いて以来、世界はトランプ大統領の言動に振り回されている。関税の引き上げ、パナマ運河の返還、グリーンランドの領土的野心、ウクライナ戦争、ガザ問題、パリ協定離脱など、繰り出す政策は多岐にわたる。アメリカの国益のためであれば、彼が標榜するアメリカ第一主義に基づいて強引に実現しようとしているが、背景には、世界一の軍事力と好調が続く経済力がある。

アメリカのGDPは、世界中の他国を圧倒しており、世界一の経済大国である。多くの要素が、大規模な経済を支えている。例えば、資源の豊富さ、地理的条件、技

術革新への投資、人口と労働市場の拡大、金融市場の整備、資本調達の容易さ、政策とインフラ整備、教育、研究開発、消費活動など、多くの点で高水準な状況だ。これらのなかで、とくに注目されるのは、技術革新の一つであるデジタル技術である。アメリカの経済が好調なのは、アメリカ発のデジタル技術ではないかと、最近になって改めて気がついてきた。さらに、機械、電気、化学、土木、建築、電子、情報など、他の分野のどれをとっても、科学技術の枠組みは、アメリカ発が多いのではないかと思う。

デジタル技術について、身近に扱える機器であるPCとスマホで考えてみたい。

1995年にマイクロソフトが発売したWindows95は、マルチタスクとグラフィカルユーザーインターフェース(GUI)を採用した画期的なOS(基本ソフトウェア、オペレーティングシステム)だった。マイクロソフトがPCのソフトウェアでの優位性を決定づけるきっかけとなった。デジタル関連の技術は、一旦普及すると、継続し

て使用されるようになる性質を持っている。いわゆるデファクトスタンダードである。Linux系のOSやMacのMac OSも同様である。Linux系のOSは、インターネットのサーバーOSとして使用されることが多く、Macは、iPadを含め、アートや音楽などクリエイター系の用途に定着している。

スマホの世界では、iPhoneの登場がデジタル技術の進歩に大きな影響を与えた。iPhoneは年ごとに進化し、「ポケットコンピュータ」に変化していった。重要なのは「App Store」の存在で、これによって、開発者がソフトウェアを制作してスマホユーザーに販売できるようになった。Androidスマホが、iPhoneに追いつくまで数年以上の期間を要している。

これらの機器の基本ソフトウェア上で、利用するソフトウェアのパターンは、PC、スマホいずれの場合も、大別するとアプリかWebの2つのパターンがある。アプリは開発されたプログラムをインストールして使用し、Webはサーバー上に配置されたプログラムを、イ

ンターネットを利用してブラウザ上で使用する。ブラウザは任意のブラウザを使用できる。Google Chrome、Microsoft Edge、Firefoxが三大ブラウザといわれているが、これらもアメリカ発である。Firefoxはオープンソースで、Mozilla Foundationという非営利団体で運営されるが、本拠地はアメリカである。いずれにしても、ブラウザの宣伝効果は計り知れないくらい大きい。

少し専門的になるが、Windowsのソフトウェア開発には、マイクロソフトの開発ツールが使われることが多い。最近では、Windows以外のソフトウェア開発でも、編集ソフトは、マイクロソフトのVisual Studio Codeが使用されることが多くなっている。また、ソース管理として利用されるGit、GitHubは、やはりマイクロソフトの運営になっている。近年、システム運用のための自社サーバーを持たず、クラウドサービスを使用することが多くなっている。AmazonのAWS、マイクロソフトのAzure、GoogleのGCPが三大クラウドサービスと呼ばれるが、この3社で7割のシェアを占めている。（総務省情報通信白書令和6年度版）

これまで述べてきたように、これらの機器や基本的なソフトウェアは、すべてアメリカ発の発想であり、技術である。昨今のAIブームも同様である。我々は、それらの技術を使用させてもらっている状態であり、アメリカに対価を払い続けていることになる。アメリカが、デジタル技術の主導権を握っていることは、自国の半導体、電気通信、金融などの他の産業にも好影響を与えている。アメリカ経済の好調が続く要因の一つであると思う。

日本の国際収支において、デジタル関連サービスの赤字である「デジタル赤字」は、近年急速に拡大しており、これらのサービスを提供しているアメリカをはじめとする関連する各国への支払いが膨らみ続けている。赤字の規模は、好調なインバウンド（訪日外国人旅行）の分野での黒字に匹敵するといわれている。デジタル赤字の拡大は、日本のデジタル化が着実に進んでいることであり、悪いことばかりではない。しかし、無視できるような赤字の規模ではなく、困難ではあるが、国産のデジタル関連サービスを充実させ、それらを積極的に活用し

ていく努力が必要でないだろうか。

日本は、アメリカがこれまでしてきたようなデジタル技術を利用したサービスの提供を短い期間で行うことはできない。むしろ、それらを細部にわたって高度利用を考えた方がよさそうだ。インターネット、スマホ、クラウドサービス、AIなどのデジタル技術を調査、分析、応用し、時機を得た基盤となるサービスの開発を官民学一体となって、地道に取り組んでいく施策が求められる。行政、通信、教育、研究、医療、経営、自動車、金融、ECサイトなど応用分野は広い。細部にわたる独自性の高い技術開発にも対応できるのではないかと思う。

鎌倉

1991年放映された大河ドラマ「太平記」で一番印象に残っているのは「鎌倉炎上」のシーンであった。それは、滅亡の際に、東勝寺に集まった数多くの北条一族や一門の人々が自決したことに、ショックを感じたためだと思う。

北条高時役が片岡鶴太郎、長崎円喜役がフランキー堺という役どころであった。高時の側室役が、その当時美少女で話題になった小田あかねで、栃木県真岡出身ということをなぜか覚えている。

鎌倉時代を扱った大河ドラマは、草創期のものが多いせいもあつてか、自分としては鎌倉時代の終わりの時代の時代は、よく理解していなかった。最近になって、鎌倉幕府が滅亡に至った経緯について、少し興味を持つようになった。ちょうどその頃、鎌倉歴史文化交流館（以下、交流館と呼ぶ）という施設で北条氏滅亡をクローズアップした企画展が行われていることを知ったので、足を運んでみることにした。（企画展 北条150年 栄華の果て ―鎌倉幕府滅亡― 会期 令和六年九月二十一日～十一月三十日）

鎌倉は、修学旅行を含め、観光で何度か訪れているだけで、この地の地理や歴史について詳しく理解していない。過去に訪れた箇所も、長谷の大仏、鶴ヶ岡八幡宮、小町通りくらいである。ただ、身近な友人が、鎌倉市役

所に勤めていたので、ある種の親近感を感じていた。この街が歴史的に繁栄した鎌倉時代から室町時代中期頃まで、市中で、政変、反乱、粛清など多くの事件が繰り返され、血塗られた武士の都だったというイメージが強かった。

交流館は、JR鎌倉駅から北西方向へ少し坂を上った谷あいにあつた。徒歩で10分もかからないが、背景が崖に囲まれたような閑静な場所であつた。もともと安達氏のゆかりの寺院である無量寿院（無量寺）があつた場所ということだった。途中、住宅地の地番表示には、扇ガ谷とあつたので、あの太田道灌が家宰（家長に代わって家政を取りしきる職責）を勤めていた扇谷上杉氏の邸宅があつたあたりなのだと想像できた。10時開館であつたが、開館前に何人か入館を待っていた。後で分かったことだが、アニメ「逃げ上手の若君」の北条時行がブレークして以来、この交流館には目に見えて来客数が多くなっているとのことであつた。

交流館は、説明によれば、世界的に著名な建築家ノーマン・フォスター氏の設計事務所（フォスター・パートナー

ナーズ）が手がけた個人住宅をリノベーションした博物館だ。鎌倉の歴史遺産・文化遺産を学び、体験し、交流できる場として、平成29年5月15日に開館した鎌倉市立の博物館施設である。博物館としての規模はさほど大きくないが、リノベーション前の個人住宅としては、相当大きな邸宅だったと推察できる。いずれにしても、建物の雰囲気は洗練され、シテイ感覚あふれた室内になっていた。常設としては、「鎌倉の歴史の通覧」、「中世都市鎌倉と武士の営み」、「観光地化が進んだ近世から現代まで」、「中世鎌倉の都市生活出土遺物」の展示が行われていた。今回の企画展のテーマである「鎌倉幕府滅亡」に関しては、別棟に展示されていた。

当日は、企画展の館内説明（ギャラリートーク）が行われる日だったので、それを目当てに来館している人が多かった。常設展示の説明の後、別棟で今回の企画展の説明が行われた。それほど広くない展示室なので、貴重な展示物を拝見しながら、学芸員の方から間近で説明を受けた。説明された学芸員は、多分、本企画展冊子の主

要著者である鈴木楓実氏（女性）だと思う。説明のなかで、次のようなことなどを強調されていた。

- ・鎌倉幕府は衰退期がなく、突然滅亡している。
- ・北条高時は田楽や闘犬にうつつを抜かし、「太平記」などで、暗君と酷評されているが、近年は再評価されている。

- ・覚海円成（円成尼）ら北条一族の女性は、助命され、伊豆の北条氏の邸宅に円成寺を建立し、一族の菩提を弔いながら余生を送った。

今回、鎌倉を訪れた主な目的は、この展示会を見ることだったので、他の観光地を見物することはなかった。ただ、鎌倉は観光地だからかもしれないが、道すがら、おしゃれな街だなと感じたことがいくつかあった。

横須賀線で、電車が北鎌倉駅に着いたとき、反対側の登りホームで電車を待つ老人男性がいた。その男性の服装が上から下まで、上品で洗練されていた。いわゆるファッション雑誌から飛び出したかのような着こなしで、どこか違和感があるのだが、なぜかホームの情景に溶け

込んでいた。鎌倉駅から交流館までにもちよつとした街並みがある。そのような通りには、住宅も混在しているが、カフェと呼ばれるような店も数多くある。平日の午前中というのに客が入店していることに驚かされた。また、女性グループが集まって歓談している店もあつたりして、熟成した街の姿を強く感じた。

このような街の熟成度や文化度の高さは、ニュアンスや規模は違うものの、京都と共通しているのかもしれない。自分がこれまで抱いてきた鎌倉の陰湿なイメージも、少しは薄らいできた。現在（2025年3月）、交流館では、企画展「平泉から鎌倉へ―兵どもが夢の先―」が開催されている。平泉藤原氏（近年の研究で、奥州藤原氏は平泉藤原氏と呼ばれるようになっていたとのことだ）が築き上げた浄土世界に感激した頼朝が、平泉の寺院を模して永福寺を建立していることや、平泉藤原氏の栄華、鎌倉へと伝わった平泉の文化について紹介している。昨年は平泉を訪問しているので、何かめぐり合わせのようなものを感じた。

推し活

推し活という言葉が最近使われることが多い。○○活という使い方は、学校の部活動を省略して部活と呼んだのが一番古そうだ。婚活、就活、終活なども古くから当たり前に使われているが、今では、妊活、転活、育活、婚活、菌活、墓活、朝活、友活など数十個もあるようだ。

○○活はすでに使い方が市民権を得ており、便利で簡単な言い回しなので、これから、種類が増えていきそうな勢いだ。○○活は、何かしら活動していくことなので、ポジティブな意味で使われることが多い。その点で、好ましい言葉の使い方であるようだ。

似たような言葉の使い方、パワハラ、セクハラ、モラハラ、マタハラ、カスハラなどの○○ハラという言葉も多くなっている。精神的加害の種類とハラスメントの合成語である。暴力などの身体的な行為や暴言、無視によって、精神的なダメージや不快感を与える「いじめや嫌がらせ」であり、忌み嫌われるべき言葉である。また、アメリカンファーストや都民ファーストなど、自己中心

主義的な意味での〇〇ファーストという言葉の使い方は、その中心となっている人たち以外からすれば、必ずしも好ましくは感じないだろう。

押し活も、〇〇活の一つで、最近よく使われることが多い。押し活とは、自分の好きな人物や、人物以外の対象物を、何かしらの形で応援することのようだ。もともと熱狂的なあるアイドルファンが、自分の好きなアイドルを「押し」と呼んだことが始まりという説がある。対象は多種多様である。好きなものであれば、何でも押し活の対象になる。例えば、アイドル、俳優、声優、歌手、アーティストなどの芸能関係の他、スポーツ、スポーツ選手、スポーツのチーム、アニメやアニメのキャラクター、ゲーム、歴史上の人物など、バラエティーに富んでいる。趣味そのものも押しの対象になる。

押し活は、押しの対象を応援するために、活の文字通り、何らかの活動を行うことになる。対象が、音楽アーティストであれば、CDを購入したり、コンサートを見に行ったり、イベントに参加したりする。鉄道ファンで

あれば、列車の写真を撮りに行く。野球選手であれば、球場に出かけたり、キャラクターを購入したりする。活動の形態は様々である。多くの場合、お金を出費するが、この消費活動が経済的な活動としても重要だ。遊びの出費3項目である、移動費（交通費）、施設利用費（コンサートチケットなどを含む）、物品購入費（カメラなどのツールやお出かけ用の衣服類の購入を含む）で考えるとわかりやすい。

押し活すること自体は、年齢はあまり関係ないのだが、年齢によって、対象は変わるだろう。自分の身近な者（すべて女性）で恐縮だが、例を示す。未就学児「シナモン」、小学生「ADO」、「ストブリ」、「呪術廻戦」、大学生「ポケモン」、アラフォー「GLAY」（伝説の幕張20万人コンサートを見に行っている）、60代後半「サザンオールスターズ」、「矢沢永吉」、「G-DREGON」、「BTS」（一時、テレビ画面でも車でもBTSの曲ばかりだった）、70代前半「林部智史」（林部智史については、「これを聞いてみて」と何度もLINE

のリンクで推薦があった。その都度曲を聴いたが、歌唱力が高く、ロングトーンを安定して発声できる実力のあ
る歌手だと感じた。さらに、付き合いたいと思い、1か月く
らいかけて林部智史の全曲を聴いて感想を送った。しか
し、その後もまた別なリンクを送ってきたときは、しば
し返信できなかった。自分の押しを他の人に推薦するの
はいいが、過度に押し付けてくるのは自重した方がいい
と思う。

それにしても、押し活には良いことが数多くある。

- ・ 人生が豊かになる
- ・ 心身の癒しになり、健康に良い影響がある
- ・ 仲間ができ、交流が広がる
- ・ 仕事や勉強をはじめ、幅広く自分磨きになる
- ・ 日々の暮らしに張り合いがでる

押し活は、得られることが多く、人を幸せにするもの
のようだ。人は、何かに夢中になっていないと生きてい
けないのかもしれない。自分はこれまで押し活と言える
ほど、極端なのめりこみはなかった。今からでも、何か
夢中になれるものを考えてみようかなと思う。

押し活2（石川さゆりコンサート）

2025年5月25日（土）印西市文化ホールで石川
さゆりのコンサートがあった。このとき、前タイトル「押
し活」の事例を目撃したので、コンサートの様子を含め、
本稿で追記したい。

コンサートの2、3か月前、当ホールで開催された幼
稚園の発表会に出かける機会があった。そのとき、この
コンサートのポスターを見かけ、チケットを購入するこ
とにした。演歌を聴くことはあまりないが、料金も手頃
だし、地元で一流歌手のライブを見ることができるので、
ぜひ見にいこうと思った。このホールの客席の定員は5
00人ほどであり、一流歌手がこのような小さな会場で
も公演することについては、少し意外な感じがした。

コンサートの始めに、石川さゆり本人も、やはり広く
ない会場については気になったらしく、客との距離が近
く、会場も思ったよりコンパクトだと話していた。印西
市については、東京の近郊の割に静かなところだと印象
を述べていた。その日はちょうどイオン千葉ニュータウ

ンで催涙スプレー事件が起きた次の日であったので、その事件にも関心を示していた。

コンサートに行くときは、そのコンサートがどのような構成されて展開していくとか、楽器編成について考えるのが一つの楽しみである。初めてのアーティストの場合は、とくにその期待が大きい。

コンサートの全体の流れは、彼女のトークで展開していくものであった。彼女の歌唱力からすれば、歌の連続でもエンターテインメント性が十分高いと思うが、そうではなかった。これも意外なことであるが、彼女は話し上手であり、饒舌であるといってもいいくらいだ。それと、曲の並びにできるだけ物語性を持たせていたことも、このコンサートの特徴だと思った。

アーティストも話し上手でなければ、自らのコンサートを開けないだろう。長年、一流のアーティストとして活躍するには話し上手は当たり前だと、そのときは納得した。しかし、後で考えてみると、例えば、すでに引退しているが、安室奈美恵はコンサートのとき、ほとんど

喋らないらしいし、ボブ・ディランの東京公演のときのように、黙々と演奏を続けるばかりのアーティストもいるから、よくわからない。

バックの楽器編成については、彼女本人からも説明があったが、コンパクトなアコースティック編成にこだわったということだった。会場の広さに合わせているようだ。客席から見ても、左から、ピアノ、ベース、管楽器、アコースティックギターの並びの4人編成であった。ベースは、サイレントベースと呼ばれるエレキのウッドベースで、音を響かせる胴体がないものだ。手引きに加えて、弓引きで演奏する場面も多くあった。管楽器担当者は、テナーサックス、クラリネット、フルートを持ち換えて演奏していた。なお、楽器の種類等については、間違いはあるかも知れないので、ご容赦ねがいたい。「津軽海峡・冬景色」のジャジャジャ・ジャーンの出だしは、この編成では無理ということであった。今年の12月成田国際文化会館で予定されるコンサートでは、フル編成なので、この出だしで演奏されるところだ。

楽器編成はコンパクトなアコースティック編成であったが、それぞれの演奏テクニクは抜群であり、迫力があつた。そこに、彼女のお喋りと一流の歌唱力が加わり、最高のコンサートであつた。

コンサートの途中から気がついたのだが、客席から、妙に上手く合いの手を入れていた人たちがいた。その方向をよく見ると、客席の後方の両端にそれぞれ数人から10人ほどの人たちが陣取って、合いの手を入れたり、はでな声援を送ったりしていることがわかつた。衿の縦文字に「石川さゆり」と書かれた黄色か青色のそろいの法被（はつぴ）を着て、ペンライトを持っているので、ファンクラブなどの人たちであると一目でわかつた。

存在感は抜群であつた。ファンでもコアな人たちであろう。親衛隊と呼んだ方がいいのだろうか。彼らのおかげで、コンサートの盛り上がりも一段と違ったものになつていた。それらが、彼らの真骨頂であり、押し活の究極の姿でもある。広くない会場だったので、より一層身近に感じることができた。アーティストからすれば、彼

らは心強い味方である一方で、彼らにとっては、アーティストはスターであり、生きがいそのものである。アーティストとともに深い絆で結ばれているのだろう。何か一つ「押し」の対象を持っていることは幸せなことだ。羨ましく思う。



ビジネス街のつつじ（印西市大塚）



先輩と出会ったのは、一般教養の授業だった。開始時刻を五分ほど過ぎたところで先輩が偶然隣の席に座り、肘が当たったことをきっかけに話した。初めのうちは同じ学部的一年と思っていた。その人は一つ上の学年で、さらに教室の四割くらいは二年生もいる授業だと教えてもらった。

なんてことのない、大学での出会いの一つだった。他の授業でも同じようなきっかけで知り合いは増えた。授業が被って隣の席になることが多いほど親しくなったし、そうでない人は、挨拶だけの間柄程度になるという距離感をお互いに見極める時期だった。

ある時同じ授業の仲間とつるんでいた所に、先輩がすれ違い軽く挨拶をした。周りには数人大学生ながらも頭の切れそうな人を連れて、颯爽と食堂を抜けていった。姿が見えなくなると、周りが沸き立ち、どこで知り合ったのか聞いてきた。学部を超えて有名人らしく、学生起業の準備を進めていて学生を集めたセミナーも開催しているという一面を知った。スーツ姿で歩いている見かけることも多かったし、連れている

友人たちも人生の夏休みを決め込んだ緩い大学生ではなく、キリっとした目つきの意識高い系な学友と一緒に歩いていることも見かけた。

先輩は時々授業の欠席もあったが、同じ授業になると隣の席で受けることが当たり前になっていた。昼食や空き時間が一緒だった時に、学生起業の話や自分の家が中華屋をやっていることなどざくばらんに話したり、起業のメンバーの飲み会に呼ばれたり、気が付くとなぜか気に入られた後輩のポジションに自分がいた。同級生たちが接点を不思議がるのも無理はなかったが、本当に、ただの流れの中だったのだ。

明確な目的や就職したい希望がなくなった学生身分を獲得している大勢の大学生の中で、将来を見据えながら日々何かをこなしている先輩には、強く惹きつけられた。

結局自分もその他大勢の学生の一人である自覚はあった。何とか社会に出るまでの時間が欲しくて、自営業の親に無理をさせた。社会を広く見たいというもつともらしい理由をつけて、勉強のできる優弥達と同じ学歴を手に入れようとした

のだから、身に余るものだったと今は思う。その中で偶然にも「スペックの高い知り合い」という当たりくじを引いてしまったのだ。

どうして俺なんかに構うのか聞いたことがある。実家が自営業で飲食関係だからというのが半分で、周りを見渡して状況把握がうまい所から経営者の資質みたいなものを感じたからだという。バスケ部にいた時から、人の行動も考えも読める方だとは思っていたが、それは試合の中だけだったし、はつきりと言葉にして評価が与えられたのは初めてだった。

先輩は、端的に言うのと、起業仲間に見えるかという狙いが腹の底にはあったらしい。会社もスマホで使えるアプリ開発からはじめるが、狙いは飲食店での活用、そのまま飲食業へと広げたい展望があり、人脈を広げるチャンス^{うかが}をいつも窺っているのだという。

先輩のビジョンを聞いたところで、この頃自分は実家を継ぐことも含め、卒業後の生活像について真剣に考えていなかった。卒業後どうするという質問に、ちよいどいい答えもな

いので、適当にまあまあ地元でやっていけているし、継ぎうかなとあしらうために答えていた。斜に構えて見ると、ハイソな集団にただ興味があるだけで、暇つぶしのために付いて周る腰巾着に見えただろう。

先輩という時間が長くなり先輩の卒業が迫ってくると、さすがに自分の将来像について向き合うようになった。同時に自分が田舎の中華屋を継ぐ選択肢をほとんど消しかけていることに気が付いた。好きでも嫌いでもないが、先輩のように、自分にも何かほかのことができるような気がした。周囲の同級生も腹を決めて、インターンや専門学校にも通い始める等それぞれが具体的に動き始めていた。言いようのない焦りがあつたような気がする。しかし、先輩のグループに深入りする度胸もなく、代替の選択肢すら浮かばないまま、すべてを決めかねて就活の時期を迎えてしまった。

決意と覚悟がある学生との違いはそこにあった。そのまま就活の波にも乗れず、ずるずると自由な学生生活を手放せないまま、適当なアパートを借りて、居酒屋のアルバイトで生

計を立てるようになった。フリーターにはならないだろうとどこか思っていたが、本当に何の決断もできないとフリーターになりうることを、身をもって知った。

「流れっというものがあるから、それが翼にはまだだってことだよ。動けるまで待つのも一つじゃないかな」

卒業間近、フリーターをするにも実家を出る決意をしたのは、先輩のこの一言だった。別にそんな状況になるのは必ずしも自分だけではなくて、何となく社会に出ていけない人間は一定数存在したのだ。家の方も離れてフリーターやるくらいなら家業を手伝えと言いたいところを、他のサラリーマン家庭に引け目があるのか、親父は強く言わなかった。親父も親父で、俺のやりたいようにさせたい思いがあつたようだ。田植えや稲刈りの田んぼが忙しい時期に帰れば、うるさく言われることもなかった。

フリーターとして働くにも、時給がよく多少の知識や経験が活かせる飲食関係がいい。小料理屋風の居酒屋で働かせてもらうことになり、近くのアパートを借りた。先輩との付き

合いは途切れることなく続き、立ち上げたアプリ開発のベンチャー企業や仕事ぶりについて、飲みに寄る度話してくれた。

先輩には自分の意志で社会に漕ぎ出す力があつた。たった一つ上の学年というだけで、確実な一歩を重ねて行動していた。それでもその自信故か、女性関係には少しルーズなところがあり、ビジネスの間柄なのか本当の交際相手なのか、短期間で隣を歩く女性が変わっていた。女性達は、とにかく先輩にお近づきになろうとあれこれ奮闘していた。野心的で狡猾で、自分の学生時代の彼女や友達にいないタイプだ。鋭い視線を向けられると足がすくみそうだった。連絡先を聞くためにだしにされたこともあつた。先輩もそれを断らないし、少しも臆さない。来るものを拒まず、去る者を追わず。時々強めに追いかけて、俺のアパートに避難することもある。たけれど、お互いを値踏みし合い、利用価値を計っていた。傍観者として見ていればそこそこ飽きなかったし、警察沙汰まで発展することはなかった。好き勝手に泳がせていた。自分には縁のない生き方をする人達は水槽の中で遊ぶ

熱帯魚のようだった。見ている分には優雅で華やかな世界だ。彼らの追いかける夢や実現していくものが、さらに社会を豊かにしていく。どんどん場所を変えて上へと昇り、明るい場所にいるべき人は、先輩のような人なのだろう。それを見て、あの人は学生時代の先輩で……なんていう自慢話ができれば、十分ではないだろうか。

「カフェをやるうと思うんだ」

先輩がそう言ったのは、自分の働く居酒屋にふらりと寄つた時だ。先輩は連絡して仕事仲間と来ることになれば、今日のように夜十時を過ぎて唐突に現れることもある。

「いいんじゃないですか。いよいよ飲食業に進出ですね。俺、応援します。これサービスです」

昼メニューの残りではあつたが、里芋の煮つころがしを盛り付けて出す。

「翼も」

先輩は、日本酒の熱燗と御猪口を二つ出すように言った。

平日の夜は落ち着いていて、カウンターには先輩しかいなかった。四つある座敷席は二つほど埋まっていたが、店長ともう一人のアルバイトが回せるくらいだ。おおらかな店長は、知り合いが来て長話するのも気にしない。

「どこかでお祝いやりましょう」

「翼、一緒にカフェやらないか。やっぱり飲食やるには、経験者いるのといないのでは違う。：始めるなら、お前しかないと思った。」

呆気にとられ、言葉を失ってしまった。さすがに、小聲になつて店長に聞こえないようにする。

「いや、そんな先輩の大事な目標に俺なんか。アプリ立ち上げた方々の方が、いいんじゃないですか。俺、卒業してからこんな感じだし」

目標がないのは情けないものだ。特に順調に社会人になった同級生や先輩といると、胸を張って話せる自分のことが何もない。この人の誘いに、俺はとてつもなく無力だった。

「違うよ、翼。今がチャンスだと思ってる。俺だって、なん

でもうまくいつてない。アプリ開発の方だって、何度も転んだり潰れかけたりしていたの見てただろう？」

「それよりも彼女さん達の方が……」

「うっせ。この前振られたの知ってんだろ」

先輩は酒を煽った後、言った。

「一緒にカフェやろう。もう大体場所やどんな形かもイメージがあるんだ。俺には、流れが見える。翼なら、一緒にやっていけると思ってる。こういうのは、タイミングがあるからさ」

力強く、こっち側に来いと言われているような気がした。自分から事業を始める人には、人を惹きつける力がある。それも並の人にはない、人に嫌と言わせないほどの力だ。先輩はアプリ会社に俺のことを本気で誘うことはなかったが、今回は違うということはある。

正直、『何か』を探し続けていた自分には、将来像に確信を持たせる渡りに船でもあった。これが東京に残り、何かを成し遂げるための理由にすることができるのだから。

暫く考えるふりをして、話を預かった。頭の中では、繁盛する店の中で動き回る先輩と自分との姿を何度も描いていた。すべてうまくいくとは思わない。けれども、それ以上に期待の方が大きかった。やっと自分の人生を歩く手段を得たような感覚だ。

仕事の後の足取りは軽く、年甲斐もなくスキップでもジャンプでもしそうだった。さすがに二十代半ばにもなる大柄な男がする訳にもいかない。小料理屋からアパートまでの道は、他にも居酒屋がありそれなりの人通りがあるのだ。アパートのある一本奥の路地を曲がった時、少しだけ宙に浮いた気がした。

店をはじめ。気持ちはできていても、開店に漕ぎつくまでもやることが山積していた。バイトで生計を立てていた自分に開店資金などほとんどなく、俺は両親に頼み込んで家計の貯蓄を回してもらい、残り半分の資金は先輩が出した。共同経営者という形で始めるビジネスのこともほとんどわからないまま、先輩は店を開くための手続きを着々と進めてい

った。土地を決めるときや内装等を決めるときは、一緒に向いたりもしたが、カフェのコンセプトやメニューを作る方を多く任された。アイディアはほとんど先輩で、それを具体化したり実現可能か試行錯誤するのが俺の役割だった。

ギリギリ東京二十三区内、駅から徒歩十分くらいはあるが、その分落ち着いた環境と若年層の需要を見込んでネット環境などを整えた。ここが、誰かの居場所になればいい。仕事の人も、ゆつくり話したい人にも、俺たちのように何かはじめるために準備する人たちのために。

目まぐるしく時間は過ぎていき、毎日が充実していた。生活のためアルバイトも続けていたので体力的にはかなりきつかったが、自分のやりたいことのために動ける気持ちよさがあった。小料理屋の店長も、自分の若いときを思い出して、なんでもやってみるもんだと背中を押してくれた。

開店した日を忘れることができない。森林の澄んだ空気を肺に満たしたような感覚。生きている実感。そうだ、これは人生の中で初めて登った山で、初めて浴びた朝日だった。視

界は開けて遠くまではつきりとして、辺りを覆う雲はない。今日までの苦勞が報われた気がした。

店の売り上げが軌道に乗るまでの覚悟はしていた。開店準備の途中から、店のこと以外に気を配る時間がなく、大学二年の途中くらいから付き合っていた彼女も、開店祝いを最後に会わなくなってしまった。長く続いている分お互いに居心地がよかったが、強く引き止めたい理由がその時はなくなってしまうていた。連絡することはいくらでもできたはずなのに、とにかく目の前の日々をこなすことに一生懸命だった。新規開店の人気はたった一カ月で弱まり、ただでさえ東京の片隅に構えた店の雲行きは、既に怪しくなってきた。

半年ほどたった頃、先輩が代表を務めていたアプリ開発のベンチャー企業仲間から、飲みに来ないかと連絡があった。学生時代先輩の隣にいつもいた人で、いわゆるナンバー2にあたる人だった。大体飲みの席でも先輩と一緒にだったので、直接連絡が来た事には驚いた。

店に行くとその人だけが座っていた。

「お久しぶりです。今日、先輩はそちらの仕事の方で外出たはずなんですが」

「うん」

どこことなく神妙な面持ちだ。

「他に人は来ないんですか？」

「ちよっとね。あーカフェとかどう？」

「いや、だいぶきついっす。でも、経営面ほとんど先輩に任せっきりだから、俺ほとんど店舗運営とバイト管理ばかりで」

「そうか。まあ、いろいろあるからな。いいときと悪いとき、

浮き沈みは当たり前だし」

「これがそうなんですかね……」

とりあえず生で、で頼んだビールを二人で飲んだ。

「あいつ、会社のことなんか言ってた？」

「会社のこと？」

「……言っていないのか？」

「ずっと、開店準備や開店してからもやっぱり忙しくて……

業務連絡ぐらいしかしてなかったです」

アプリ会社の副代表なのだから、先輩とより話しているのはこの人の方ではないだろうか。先輩はもちろんアプリ会社の方の用事でないこともあったし、他の起業支援等でカフェのバックヤードにいないこともあった。そのあたりを知っているのも、会社関係者の方だろう。

「あいつがカフェ事業やるって言い出したときに、ちよつと社内で揉めてさ。半ば無理やりだったんだよ。支援は会社少し入っているけど、ほとんど自己資金ではじめてさ……。全然いいんだよ。こうやって翼も頑張ってるし、マーケットも見えてきたって聞いてたからさ」

「なんか、あったんですか？」

自分の名前も出されると不安になる。けれども、カフェをやろうと声をかけられてから、先輩は会社で反対にあったことなんて言っていなかった。ただ開店に向けて全力で準備していたんじゃないのか？

「その一件からさ、ちよつと社内の立ち上げメンバー中心に割れるようになったって……。いや社内の問題なんだけど。」

とりあえず1号店出すってあいつが言い出した時、俺が結構止めていたから、代表と副代表どっちに付くかみたいになつてさ。会社やつてるんだから、もつと冷静にならなきゃいけなかったんだ。でも、その時一番冷静でいらなかったのがあいつでさ。自信過剰気味なところから意地になって、カフェ事業は今期からやるんだってさ……」

「そんなこと。……すいません。俺聞いてなかったです」

こんなこと言ってくれなかった。これは、共同経営者として、知っていなければいけないことだったんじゃないか。

「あいつ……。焦りも分かるけど、そんな急がなくてもいいのにな。アプリの会社だつてもう少し安定するまで待ったっていいのに」

「そんな素振り、少しも……」

「うまくいかないう時期こそ冷静沈着でいてくれるのが代表なんだけどな」

渋い顔をしてジョッキの残りを飲み切り、店員に追加の酒を頼んだ。

「それから会社は？」

「しばらくは会社始まって以来の不和。数字は上がってきていたけど、雰囲気は最悪だった。俺は代表^{かば}庇いつつも他メンバーからの板挟みでさ。で、転職することにした」

「転職？」

「一緒にやめるなんて言う後輩もいたけど、もちろん止めた。俺は俺で会社役員は向いてないと気づき始めてたのが理由だからな」

「じゃあ、今、先輩は会社でどんな状況なんですか？」

当初よりはマシだが、ギスギスした雰囲気が残ったままだという。後は時間が解決してくれる分と、残るわだかまりがどのくらい今後に影響してくるかだそうだ。

「カフェ事業だって、この先進めていきたいものの内の一つなんだ。まあ、飲食系に行くのが一番目標にはしていたけど。スマホアプリ中心にして、いろんなジャンルの起業を仕掛けていく起業家集団が、俺たちの会社。成功もあれば失敗もある。その繰り返しがいよいよいけば、俺みたいに向いてな

いってわかるやつだっている」

副代表は新たに届いたハイボールを掲げて、乾杯した。

「新規カフェ開店のお祝いと、君たちの成功を祈る」

騒然とした居酒屋の中、一際高い音が響いた。

先輩には、アプリ会社での一件を聞けぬまま、閑古鳥が鳴きそうなカフェの息をなんとか繋げようと努力を重ねる日々が続いた。店の忙しさよりも、店を持たせるための仕事がどんどん増えていく。バイトもギリギリに調整して、結局やめた人もいた。先輩は相変わらず、カフェの経営をみつっ、アプリ会社の代表として多忙な日々を過ごしていた。

「翼ごめん。この店は一旦閉めることにする」

開店から約二年。先輩は、出勤と同時にそう言った。

頭が真っ白になった後、反応しないわけにはいかず、わかったと答えた。自分たちで始めたことだ。終わらせるのも自分たちでやるしかない。

地獄がずっと続くとはこのことだ。更なる多忙状態に巻き込まれ、最後は借金二百万の借用书が残った。この間のことはほとんど覚えていない。思い出そうとすると、眩暈がする。身体が拒否反応を起こすのだ。片付けも先輩と一緒に黙々と行った。アプリ会社よりもこちらの処理が優先になり、今まで以上に一緒に時間を過ごした。毎日否応なく顔を合わせる事がこれほど辛い日々はなかった。慕っていた先輩は相棒になり、一緒に仕事ができることが自分の生きがいになっていた。アプリ会社の経営者たちと同じだ。けれども先輩は、あくまで起業家なのだ。カフェは挑戦の一つとして辞められなくても、会社は辞められない。

長々と話したという意識も薄らいでいる。天井の蛍光灯で、目が眩んでいるせいだろう。

俺はついに、伊藤に話した。誰にも言ったことのないことの顛末を。少しずつ記憶を辿って思い出しながら、届いた手紙の人のことを初めて誰かに話した。人生の中でも一番の黒

歴史だ。生き方を探して、焦って、信じ込んで、自分を過信し、なんて浅はかだったのだろう。誰だってそういう経験をしながら生きている。わかっていても、そんな自分のことを必死に隠して目立たないように生きていかないといけないのに、ついに話してしまった。得体の知れない伊藤という男に。

伊藤の方が、満たされていない生き方をしている人間だ。経済状況も悪いし、友人に恵まれている様子もなかった。自分から求めたり、求められる人間になろうとしたりしている様子もなかった。自分の方がましな人生だという確信があっても、どうして自分の脆弱な部分をこいつに言う必要なんかあったのか。信頼なんていう綺麗な言葉ではない。こいつには話す相手もないから、根性も価値もないやつだと友人関係が壊れることも知らないから。伊藤が地面に掘ったただの穴のようなものだから、おそらく言ってしまったのだろう。つまらない失態をした自分に毒づき、生活を助けているとはいえ、そこまで冷めている心に寒気がした。普通の優しい人

間のフリはできても、体温だけは自分さえも誤魔化せない。

「この人、カッコいいな」

「は？」

「魅力のある人だと思うよ。これは翼にはわからないかもしれないけど。そういう人には、逆らえないよ」

「お前に言われなくなつて。……だから成功しているんだろ」

手紙に同封された写真の先輩は、黒いドレスを着た美人な女性の肩を抱いて、高層ビルの夜景をバックに笑顔を向けていた。女性のドレスは滑らかな生地で、星空のように輝くスパンコールがあしらわれている。先輩の着ているタキシードの仕立ての良さも劣らず、手前のテーブルにある赤いバラの花束と見事なコントラストを描いていた。青写真に納まった成功者の姿。テレビやネット画像で見れば、ステレオタイプな資料画像やわざと嫌味たらしく作った写真に見えるが、そこにあるのは本物の人生の一場面を切り取ったものだ。

軽く振り上げた拳で、伊藤の肩にパンチを入れた。寝転がったままではちっとも力が入らず、伊藤はわざとらしく身体

を傾けた。

「お前、本当にゲイなの」

自分の弱みを話した手前、このくらい聞いてもいいだろう。

「……いつか聞かれると思った。そうだって言ったら出て行って言うんだろ？」

「……すぐには言わないけど、やっぱり怖くはある。男が好きだってやつに会ったことないから」

「ゲイにだって好みはあるよ。みんなは知らないだろうけど、自分を変えてみたいとか、それこそ翼みたいに東京とか行くことと思ったこともある。でも俺にはできなかった」

「何で？」

「いじめられていた人間に、そんな陽キャみたいなことできると思う？」

陽キャみたいなこと……そんなことないだろ。誰だって街に出てみたい、洗練された都会の生活に憧れる時だってある。街に限らず、地元から遠くに仕事が決まったのなら、その場所に行くだろう。だからって出戻って結局今ここにいる自分

は、ただ荷物を増やしてボロボロになって帰ってきただけで、ずっと残ったまま自分に変化を起こすこともできず歳を重ねただけの人と何か違うところがあるのだろうか。

「そうか。それなら俺もだな。結局ここにいるんだから。もう次にやることは、開き直って、借金返して、この店やってくことだってわかってる。先輩だってこんな写真送ってきて……全然悪気がないのもわかってる。連絡先を断つたのは自分でしたことだし、あの人は純粋に、俺が元気でいるか心配なんだよ。でも、あの人の名前や写真見るだけで、……もう頭も指一本さえも、うまく動かなくなるんだ」

伊藤は、横たわる俺の隣で体育座りをした。

「俺にはね、翼みたいな友達はいないけれど、いじめてくる人がわかる。本当は少しだけしかいないんだけど。あとはそういう人たちに合わせてくる人が厄介なんだ。残りは俺に興味ない人。俺は、こういう人たちには近づかないんだ。いいことが何もないから、いないのも同じなんだよ」

呆気にと取られていると伊藤は続けた。

「写真の人は、自分と自分の前しか見ていない人。だからしようがないよね。こういう写真を見せることが、相手の励みになると思っているんだ。でも俺は、自分しか見ていない人間の方が健全だと思うよ。夕飯食べてもいい？」

「……ああ」

伊藤は冷めた料理を食べ始めた。ふとスマホの時間を見ると、店を出てから三時間は経っていた。

「伊藤さ、前に店で酒飲んでた時に……」

優弥の話聞いて、友人関係を羨ましい素振りしていたじゃないか。すべてを言い切る前に言えなくなってしまった。

「何だよ。あの時のこと、少しは覚えてるよ。今はごはん食べたんだけど」

「いいや。食べていいよ」

伊藤はすぐ視線をタッパーに戻した。

伊藤は、俺が考えるよりも自分自身のことをわかっているのかも知れない。たくさんの人とつるむよりも一人があつていい。自分が集団から排除される存在だとわかっているなら、

無理やり集団に属する必要もない。わざわざ否定されに行くような趣味もないんだから。けれども、それは寂しさや親密さを少しでも求めることと逆にあつて、誰かということを完全に否定しているわけでもない。

いじめられてバケツの水を被せられ、何も抵抗できなかった少年は、そのままにいるわけではなかったんだ。担任の時だけでなく、支え続けていた佐伯先生もいたし、年を重ねて強くあれる考えも持っている。大体の人は、変わった人と言われながらも社会の中にいるものだけれど、伊藤はどうにもならない自分を持て余して一人を選んだ結果、今は目の前で冷えた料理を食っている。あの時、『いいなあ』と言ったのは本音なのだろうけど、伊藤にはおそらく、これからずっと友人はできない。寂しさを抱え友人に憧れを持ったまま、社会の輪に入れない自分の運命を抱えて生きていくのだろう。

「ごちそう様」

「そのままでもいいよ。明日片付ける」

伊藤は丁寧にタッパーを閉めて、机の隅に積んだ。

「俺、そろそろ家に戻るよ」

「え？」

「翼の話聞いたら、少し何か力が出た気がした」

「俺の弱みを土産にするなよ」

あっさりした決断だな。思い切り話をした後で、自分もすつきりしていた。無理やりにも追い出したいでも、まだいいでもないでもなく、自然とこの厄介者を離れる時が来た感じだ。

家の時計を見るとすでに夜中の二時を回っていた。口数は少ないのにイライラとさせる口調。何も言っていないが、こんな時間まで話を聞いてくれるだけで、俺にはもう十分いい奴じゃないか。

そう思ったけれど、言ってやらなかった。

〈以下、次号〉

熱血の蘭医 ポンペー 第2回

(前号の「若きオランダ医」より改題)

香取 淳



長崎海軍伝習所 - Wikipedia より -

一、ポンペーが日本に

それは1856年も残り少ない、クリスマスが目前に迫った寒い日のことである。ロッテルダムに近い軍港ヘレフトスライスは朝から厚い雲に覆われ、気温は昼時でも氷点下のままであった。哨戒艦の船医であるポンペーは、一日の任務を終えて軍港の栈橋に降り立った。午後の三時であったが、あたりは夕闇のように暗い。そこに、若い下士官が駆け寄って来た。

「軍医殿、兵営でお客様がお待ちです！」

息を切らせて叫ぶ下士官の様子から、兵営には滅多に來ない客人と思われる。ポンペーは、いったい誰が來たのか……と歩を早め、応接室のドアを開けた。

「やあ、ポンペー・メーデルフォールト君。久しぶりだな！」
ソファアールから立ち上がった客がポンペーに近づいて来て、両手を差し出す。

「あーッ、カッテンディーケ少佐！」

防寒コートを脱ぐいとまもなく、ポンペは少佐の手を強く握った。

「メーデルフォールト君、頑張っているな。君の活躍ぶりはよく耳にしている」

「有難うございます。でも、お褒めいただくほどの働きはしていません」

「いやいや、君の仕事ぶりは誠実で、申し分ないという評判だよ」

少佐は、ポンペのことをユトレヒト大学の学生であつた頃からよく知っていた。というのもポンペの父は陸軍の将校で、オランダ国内の部隊を転々としてきた。カッテンディーケもまた軍の幹部候補生で、ポンペの父の部下であつたり、同じ兵營の士官であつたりしたこともある。その父の三男に生まれたポンペは、自ら軍医を志してユトレヒト軍医学校に入学。勤勉実直な彼は、大学の講義を余すことなく聴講し、綿密にノートを取り続ける。そして四年後、20歳で卒業した彼は、海軍に入って戦艦の船医を勤めることになった。

海軍に入ったポンペは、軍人の父にとって誇らしく、カッテンディーケはよく息子自慢を父親から聞かされている。そのような経緯もあつて、カッテンディーケは入隊時からポンペに目を注ぎ、陰になり日向になつて彼を支えてきたのである。

「入隊以来、少佐殿には色々とお世話になり、有難うございます」

「いやいや、ワシは何もしてはおらんよ」

「ところで、少佐殿は何用でお越しになられたのですか？」
「ウム、突然の話で驚くだろうが、ワシと一緒に日本に行くてくれないか」

「エエッ、日本ですか！」

「そう、ジャワ島のバタビアからさらに東の日本だよ」

「ジャワ島やその近くまでは私も行きましたが、何故、日本なのですか？」

「ウム、海軍大臣からの命令で、日本に海軍を創設するための手助けをする。その際に、完成したヤパン号を日本に回送

する役目も担う」

「ヤパン号」とは、幕府がオランダ政府に建造を委託した軍艦であり、のちに咸臨丸かんりんまると改名されている。

「ヤパン号の回送は分かりますが、遠く離れた日本に海軍をつくるというのは、どういうことでしょうか？」

ポンペの質問にカッテンディーケは小さく頷き、ことの次第を次のように話した。

——今から3年前にアメリカのペリー提督が日本に開国を迫って日米和親条約を結んだ。同年にイギリス、翌年にはロシアがこれに続き、オランダも1年前に和親条約を締結したところである。我が国は米英に和親条約では後れを取ったが、アメリカが軍艦を連ねて日本に進攻することは事前にキヤッチし、長年通商がある日本にその情報をいち早く伝えた。しかし、日本の幕府はこれを無視して警戒もしなければ、何の防備もしなかった。そこにペリー提督率いる東インド艦隊が突如現われ、日本は「黒船騒動」という大混乱に陥った。アメリカの武力に恐れをなした幕府は、渋々開国に応じて和

親条約に調印し、その後もアメリカとの通商条約の締結に向けた交渉に入っている……。

永年、鎖国政策を布いてきた日本の現状を簡略に述べた後、カッテンディーケはさらに詳しい経緯をポンペに伝える。

——ペリー提督が艦隊を率いて浦賀沖にやってきたとき、日本の幕府は煙を吐く巨大な軍艦や船腹に並ぶ大砲に度肝を抜かれて対応に苦慮。アメリカの威圧にどう対処したらよいものかと我が国に相談をしてきた。また、我が国も長年日本と通商を重ねてきた実績と外交上の優位を守るべく、有能な外交官であるクルチウス殿を出島の商館長に送り込んでいた。幕府から相談を受けたクルチウス殿は、解決策として日本に近代的な海軍を創設することを提案。幕府はこの提案を即刻受け入れ、長崎に海軍伝習所を創設し、我が国に軍艦の貸与や建造の委託、さらに海軍士官の育成訓練を頼んできた。その要請を受け入れたクルチウス殿は、訓練用の戦艦スームビング号（後に観光丸と改名）の提供をオランダ政府に掛け合って、国王ウイレム三世から將軍家定へのプレゼントとい

う形で同艦を日本に寄贈。さらに海軍士官の養成については、スームビング号の艦長であったライケン中佐をトップに二十数名の教育団を日本に2年間派遣。その教育団が所期の任務を終えて帰国することになったのであるが、日本は次の教育団の派遣を求めてきた……。

日本に開国を迫り、あわよくば植民地化を画策する列強国とこれに抗う日本。その追い詰められた日本を、国を挙げて支援しようとするオランダの立場を、カッテンディーケは簡略に示したのである。

「分かりました。そこでライケン中佐の後を、少佐が引き継がれるのですね」

「その通り。ワシはその人選を一任されておるが、海軍内に広く人材を募集して各分野のエキスパートを集めているところだ」

「それで、応募者は？」

「ほぼ揃ったが、医者がまだ決まっていない」

「それは船医とか派遣隊の診療に当たる医師ですね？」

「いや、それだけではない。今回は海軍士官の教育訓練に加えて、最新の西洋医学を教授してくれる医師を求めてきた」

「それで、私に？」

「そうだ、海軍大臣から命令を受けたとき、医者は君と心に決めていたよ」

「それは光栄ではありますが、私のような若輩者に務まりますか？」

「謙遜することはない。君以外に適任者はおらんよ」

「そうですか……。少佐から直々のご命令となれば、お断りは出来ません」

「そうか、引き受けてくれるか」

「はい、喜んで」

かくして、ポンペ・メーデルフオールトが激動に晒された日本に派遣されることが決まった。カッテンディーケは、日本に回送するヤパン号が来春には完成する予定であること、そして戦艦が完成次第、この軍港から出港することを告げて、ポンペに日本行きの準備を促したのである。

日本から建造を委託されたヤパン号は、1857年(和暦では安政四年)の3月下旬にロッテルダム港の埠頭を離れて近くのヘレフトスライスの軍港に入った。そこで食料や水、石炭など必要物資の積み込みと点検、乗組員たちの健康診断などを実施。翌朝、まだ夜が明けきらない刻に、一行は港内の教会に向かった。外套に身を包んだ艦長のカッテンディーケにポンペ、トロローイエン、ハルデスなどの士官5名、さらに下士官・兵卒らを合わせ乗組員の総勢は37名。彼らは礼拝所で僧侶の祈祷を受け、神前にひざまずいて航海の平安を祈った。

ヤパン号に戻った一行は所定の持ち場に就いて機敏に動いた。艦長が缶焚^{かまた}きを命じ、火夫は手慣れた手つきでボイラーに石炭を放り込む。中央マストの前にある煙突から黒い煙がもうもうと噴き出してきて出航の準備は完了。指揮官カッテンディーケの「航進開始!」の号令でヤパン号は棧橋を離れた。

そのヤパン号は長さおよそ50メートル、幅8メートル、

排水量は六三〇トン。三本マストに、外輪ではなくスクリューを装備した蒸気船、現代風に言えばハイブリッドの戦艦である。最新式の二枚羽スクリューを駆動して軍港を出た戦艦は、外洋に出るとマストの帆をいっぱいに広げて帆走に切り替える。船尾のスクリューは帆走の妨げになるので、海面上に引き上げられた。

イギリス海峡を抜け出して南下した艦は、途中でリスボン、喜望峰、ジャワそしてマニラに寄港して、9月21日(和暦8月4日)に長崎港口の高鉾島付近に錨を降ろした。港の入口まで軍艦が来たというのに、哨戒艇が現れることもなければ見張りの船も見当たらない。その無警戒ぶりに呆れた艦長は、太平の眠りからこの国を目覚めさせなければ……と、甲板員に空砲二発を命じた。

「ズドーン! ズドーン!」

夜の静寂^{しじま}を破って、轟音がいんいんと響き渡っていく。異国船の到着を知らない人々は突然の轟音に肝を冷やし、大騒ぎになった。たちどころに丘陵のあちらこちらに松明^{たいまつ}が灯さ

れ、その灯かりは丘陵一面に広がっていく。ポンペをはじめ乗組員たちは全員が甲板に出て、無数の松明とその灯かりが海面に揺らめく光景に見入っていた。

暫くすると、和船に乗った二人の武士が、大勢の供を引き連れてやってきた。艦に縄梯子を掛けて乗り込んだ武士たちは、通詞^{つうし}を介して艦長に根掘り葉掘りの質問を投げ掛ける。その中には妻子の有無などの外れの問もあったが、この船は幕府がオランダに建造を委託した軍艦であることを知ると、すぐにヤパン号の入港を許した。しかし、カッテンディーケは、危険を伴う夜間の入港を避けて、錨を揚げようとはしなかった。

やがて東の空が白み始め、徐々に薄い青に変わってゆく。ポンペたち乗組員はみな甲板に出て、食い入るような目で辺りの景色に見入っている。長い航海の後では見るものすべてが美しく見えるというが、艦を取り巻く丘陵は「緑の国」という印象を彼らに与えた。それというのも長崎港は左右を山に挟まれ、水際から頂上までが緑一色に塗り潰されている。

その麓に人家や寺院、砲台などが点在し、斜面には垣根に取り囲まれた畑が見える。甲板に立ったポンペたちは、誰もがその美しい光景に感嘆の声を上げた。

艦長は部下たちに缶焚きを命じ、引き上げていたスクリューを海中に下げて回転軸に装着。ヤパン号は黒い煙を吐きながら、船尾に幾筋もの白波を曳いて湾口を入って行く。その形状から「鶴の港」と呼ばれる港には、オランダ旗をひるがえした船が四艘にロシアの船、大小の和船などが幾つも浮かんでいる。それらの間を注意深く縫って、ヤパン号は出島の船着き場に到着した。

出島では、前任のライケン中佐と士官たちが威儀を正して一行を出迎えた。少佐のカッテンディーケは、ライケン中佐と旧知の間柄とみえ、二人は固い握手の後に抱き合い互いに肩を叩き合った。次いでライケン中佐はポンペや新任の士官たちと握手を交わして、長旅の労苦を慰めた。

先遣の教師団との挨拶が済むと、ライケン中佐はカッテンディーケやポンペたちを弁務官（和親条約締結後は、商館長

から弁務官に）のドンケル・クルチウスの石造りの邸宅に連れていった。広い客間に通された一行は、着任挨拶の後に、持参した手紙やバタビアからの主なニュースを伝える。客間には前任教師団の幹部たちも出席していて、カッテンディーケやポンペたちは先遣隊の面々と大いに語り合った。

新任のポンペたち一行は、弁務官の邸宅を出ると、出島の中をつぶさに見学して歩いた。先遣隊が教育訓練を実施してきた施設―第一次海軍伝習所―の建物や教場を検分し、日本の役人たちにも会って、着任の挨拶を済ませる。さらに、出島における隊員の住まいも決められ、カッテンディーケはクルチウス宅の一室に住むことになった。医官であるポンペには広い植物園の中にある住宅が与えられ、そこからは真青な長崎湾を一望することが出来た。その家は十メートル四方の二階建てで、階上の二つの壁には大きなガラス窓が設えてある。見るからに快適そうな建物であるが到着から何日が経っても、ポンペは入居することが出来ない。その理由は、先遣隊の一員である医師のブルックが明け渡しに応じないため

であつた。

ポンペは仕方がなく、港に停泊しているヤパン号の狭い船室に留まったまま、ブルックに業務の引き継ぎを求めた。しかし、ブルックはまったく耳を貸そうとしないばかりか、住居の引き渡しにも応じない。加えて、公的な文書や手紙類もすべて一人で抱え込み、ポンペに閲覧することさえ認めなかった。ポンペは、その窮状を司令官のカッテンディーケや弁務官に訴えてみたが、善処の兆しはまったく見られない。どうやら前任の医師ブルックは、上司であるライケン中佐やクルチウス弁務官との折り合いが悪く、意思の疎通を欠いている印象を強く受けた。

二、相棒との出遭い

ポンペたちが日本に到着してから一ヶ月余りが経ったとき、先遣隊―第一次海軍伝習所の教師団―はオランダに引き上げるようになった。一行は、艦船アルマ・ディグナ号に乗

り込み、最初の寄港地バタビアに向けて長崎を出港。それを追って、後継の教師団とその生徒たちはヤパン号に乗って、また第一次の伝習所で知遇を得た人々は小さな和船を繰り出して、長崎湾口の遙か先までデイグナ号を見送った。

若いポンペを困らせたブルック医師も帰国の途に就いたため、ポンペはやつと植物園内の快適な家に移り住んだ。船から持ち込んだ家財は僅かであったが、伝習所の生徒のために用意してきた医学全般の教科書とユトレヒト大学時代のノートが大きな木箱に詰められている。それらを一つ一つ取り出して本棚に整理してゆくが、時おり手を休めてガラス窓の外に目をやる。すぐ近くにヤパン号が停泊していて、甲板では生徒たちが帆の上げ下げ等の基本訓練を始めていた。

司令官のカッテンディーケは、もうすぐ始まる伝習所のカリキュラムについて、日本の役人たちと打ち合わせをしていた。それが決まるまでは何も手につかないので、ポンペは長崎の市中に足を延ばした。ポンペ来日の前年に日蘭和親条約が結ばれたため、もはやオランダ人が出島に幽閉されること

はなくなっている。秋を迎えた長崎の市街は快適で、ポンペは茶屋や遊郭が立並ぶ丸山界隈や数多い寺社仏閣などを見物して歩いた。

のどか
長閑な日々を過ごしていたポンペの新居に、ある朝、奇妙な男が訪ねてきた。歳はポンペと同じか少し若い、仏僧のように丸坊主である。しかし、法衣ではなく身分の高い武士に似た格好で、顔つきも精悍であった。来客の異様な姿に、ポンペは思わず後退りをしかけた。そのポンペに、脇に立っている通詞が声を掛けた。

「この方は怪しい者ではございません、江戸から先生に教えるを乞いに来た医師です」

「僕に、医学を学びたい？」

「はい。昨日、長崎に着いたばかりだということです」

そう答える通詞に促され、男はオランダ語で自己紹介を始める。

「拙者は、名を松本良順りょうじゆんと申す。江戸城で奥医師見習いをしておるが、海軍伝習所に先生が来られる旨を知り、長崎に

馳せ参じた。是非、オランダ医学を伝授願いたい」

良順のオランダ語は拙く、ところどころ通詞の助けを借りて入門を頼み込んだが、ポンペの強張っていた頬が緩んだ。「分かりました、喜んで伝授しましょう。但し、条件があります」

「それは、如何なることにござるか？」

「立ち話では済まないのです、お上がり下さい」

ポンペに促され、良順と通詞の二人は応接間に入った。

「条件というのは授業の進め方です。これからの授業は、すべて私のやり方で進めていきますが、それを認めて頂けませんか？」

「もちろん、先生のやり方に従いますぞ」

良順の同意を取り付けたポンペは、自身の医学教育について、情熱に満ちた言葉で力強く語り始めた。

——医学は物理・化学、生理学等の自然科学の上に成り立つものである。したがって医師になろうとする者は、先ず自然科学を幅広く習得したうえで臨床(患者の診察・治療)に入

らなければならぬ。この考えは揺るぎない私の信念であり真実でもあります。僕の生徒になるのであれば、最初に自然科学を広く学ぶことが前提条件になります……。

「フーム、左様でござるか」

「西洋の医学も、以前は神に祈祷したり預言者に頼ったりすることもありました。しかし、近代に入ってから科学的な根拠や事実に基づいたものになりました」

「如何にも。我が国では僧侶の祈祷に頼っておるが、あれはまったく意味がござらん」

「ほーッ、あなたはよく分かっておられるようですね」

見掛けによらず坊主頭には理解力があること、さらに片言ではあるがオランダ語も話せることを知り、ポンペは良順を「信頼できる医師」と見込んだ。

「僕の考えが解るのであれば、早速、あなたにお願いしたいことがあります」

「ほう、何事でござるか」

「いま、話した僕の教育方針を日本の役人に伝えて欲しい」

「わかり申した。拙者にお任せください」

良順はポンペに別れを告げて、出島の入口に架けられた橋を渡った。正面の小高い丘に建つ奉行所西役所の門を叩き、海軍伝習所の総督であるの木村図書ずしよに面会を求める。長崎奉行所の目付でもある図書は、良順の来訪を江戸から報らされていたので、快く彼を迎え入れた。

「あなたは奥医師見習いの松本良順殿でござるな。遠路を、大儀でござった」

「何の、最新の蘭医学を学ぶためとあらば、苦にもなり申さぬ」

「それにしても江戸城詰め的那もとが、ご禁制の蘭医学とは仰天の至りじゃ」

「先の海軍伝習所総監であられた永井玄蕃守げんぱのかみにお頼み申し、老中の堀田正睦殿まさよしの後押しを頂戴仕った」

「左様でござったか」

「僭越ながら、先刻、オランダのポンペ・メーデルフオールト先生に会い申した」

「ほう、それは素早いことですね」

「先生は蘭医学について、強い信念をお持ちでござった。拙者はその話に得心致したが、先生は奉行所にも伝えておかれよと申す故、参上いたしました」

「さて、それは何事でござるか？」

良順は、先ほどポンペから言い渡された医学教育の進め方を平易な言葉で説明し、同意を求めた。図書は「医術のことはよく解らない故、そこまにお任せいたす」と了承、さかさず良順は、長崎奉行にも本件を伝えて、承諾を得るように依頼した。

「ところで木村図書殿、ポンペの生徒は、拙者のほかに何方どなたがおられるのか？」

「うむ、観光丸と咸臨丸の船医予定者ともう一人の幕臣じゃ」
繰り返になるが、「観光丸」というのはオランダから進呈されたスームビン号であり、「咸臨丸」とは長崎港に到着したばかりのヤパン号のことである。

「拙者を含めて四人、それでは少な過ぎではござりませぬか」

「ほかに誰か居られるのか？」

「拙者の供として、江戸から連れてまいった『伊之助』という若い医者がおる。また、ポンペ先生はもつと多くの生徒をご所望しておられる」

「そこもとの言い分は分からぬでもないが、『嘉永の蘭方禁止令』以来、蘭方はご法度になっておる。諸藩の医者たちは学びたくても蘭医学を学べない」

「なるほど……、そういえば、拙者も江戸を發つ折には随分大儀を致した」

「それに、海軍伝習所は幕府の施設故、幕臣以外は受け入れ難いのじゃ」

「そこを何とかありませんか。例えば『拙者の弟子』という事にしては如何か？」

「ウム、さすれば筋は通る……。ひとつ、奉行の岡部長常殿に掛け合ってみるか」

「是非にも、お願い致します」

真剣な眼差しで請願する良順に動かされ、図書は長崎奉行

の長常に話を持ち掛けた。長常は元來開明的な考えの持ち主であつたが、オランダの蒸氣機関や科学技術に直接触れて、その思いを一段と強めていた。そこで長常は、進歩した海軍の伝習に限らず、ポンペの蘭医学についても、学ぶ生徒は多に越したことはないかと決断。かくして長崎奉行と伝習所の総督から許可を得た良順は、早速、供として佐渡から連れてきた伊之助に朗報を伝えた。さらに町中で開業している医師や長崎に遊学に來た諸藩の医師たちに弟子入りを持ち掛け、ポンペの生徒になるよう勧誘して歩いた。

松本良順が生徒集めに奔走する間に、ポンペは使命感に燃える身を持て余した。苦心して到着した日本で無為のままに日々を過ごすのはもつたいたない、何かこの地で役立つことが出来ないものか……と考え、妙案にたどり着く。それはオランダからの航海中にもずっと考え、情報収集を重ねてきたことでもあつた。

——日本を清国の二の舞にはさせたくない。東洋の大国であつた清朝がイギリス等の列強国に領土を奪われ、不平等条約

を結ばされた元凶は阿片にある。阿片の蔓延は民衆の心身をむしばみ、それを阻止しようとした清国は、英国から輸入された阿片の没収と廃棄に踏み切った。しかし、その強硬措置を口実に、清国は英国から戦争を仕掛けられた。その阿片を日本に持ち込んで欲しくないし、日本の民衆は阿片に手を染めてはならない。国をも亡ぼす阿片、その恐ろしさを日本人に広く報せなければならない……。

そう思い立つと、ポンペは居ても立ってもいられなくなつた。早速、弁務官の邸宅に同居するカッテンディーケを訪ねて相談を持ち掛ける。話を聞いたカッテンディーケは、対日関係が絡むことゆえ弁務官クルチウスの許可が要るのであるとアドバイス。ポンペは即座に弁務官の部屋に足を運び、思いの丈をクルチウスに伝えた。クルチウスは、もともと日本の自主独立を促し、列強国による日本の植民地化を防ぐために派遣された外交官である。英米等による支配が及ぶ前に日蘭関係を強化して、永年の交易で得た優位性を保ちたいと望んでいた。ポンペの提案に「よくぞ思いつかれた。それは

日本の為になるから大いにやりなさい」と賛同する。

ポンペは、クルチウスの許可を得ると、信頼する松本良順を自宅に呼び寄せた。阿片の恐ろしさや阿片戦争で清国が凌辱されたことは良順もよく知っている。したがって、良順には多くの説明は要らなかった。

「良順殿、米英仏露が今まさに日本に入ってきた。彼らは手段を選ばないから、阿片を持ち込むことも大いに有り得る」「それを防ぐ、よき手立てはあり申すか？」

「これといった決め手はないが、阿片の恐ろしさを民衆に知らせ、吸わせないようにするのが一番であろう」

「なるほど。ポンペ殿、さような場合、ヨーロッパでは如何ように致すのか？」

「大抵は『パンフレット』という読み物を作って、街頭や人の集まる場所に配布する」

「なるほど、我が国にも『引札』とか上方では『ちらし』という読み物がござる」

「ほーッ、それは良い。それを作って町中に配ろう！」

二人の話はすぐに纏まった。ヨーロッパのように活版印刷は出来ないものの木版に彫って多くの引札を印刷することは容易いことである。ポンペは時を置かずに引札の文面をオランダ語で書き上げ、それを良順が日本語に訳した。木版屋に彫りを依頼する前に、オランダ語に長けた伊之助の手助けも頼み、文面を次のように整える。

——阿片は恐ろしい麻薬で、医術に用いることはあつても、庶民が用いるものに非ず。仮に庶民が誤って常用いたすと何時までも止めること適わず。加えて阿片が切れたときには禁断症状を引き起こし、七転八倒の苦しみの末に廃人となる。その恐ろしい阿片が日米和親条約により日本に持ち込まれるかもや知れぬが断じて使つてはならぬものなり……。

「松本さん、いいものが出来ましたね。これを何処で配りますか？」

「さて、拙者も長崎に来たばかりでよく分らぬ。ここは木村図書殿に伺うと致そう」

良順が西役所に持参した引札を見て、図書は驚いた。

「阿片は恐ろしく、国をも亡ぼすものと聞き及んでおる。されど、町人や百姓どもは知る術もないこと故、これは良き策やも知れぬ」

「左様でござりましょう。ポンペ殿は、これを多くの人が集まる場所に配れと申されるが、どこがよろしいものか？」

「町人が集まる所じやな。されば、銅座町から花街の丸山界隈がよからう」

「かたじけない、やはり商人町や花街でござるな」

「銅座や丸山は町民に限らず、諸国から渡来する商人や医者なども多い。たちまちかような引札は諸国に広まるであらう」

図書は、ポンペが発案した引札の配布に前向きで、良順の問い掛けに丁重に答えた。そして、奉行所の役人たちに回覧したいので、何枚かを置いてゆくようにと依頼する。良順は手持ちの数枚を図書に手渡し、意気揚々と西役所を後にした。海軍伝習所総督である図書の後押しを得た良順は、その足で出島に向かい、ポンペに一部始終を伝えた。ポンペは来日して初めての事業が順調に進むことに歓喜し、本件を承諾して

くれた弁務官のクルチウスにも謝意を込めて報告。引札が出来上がると長崎の市中に繰り出し、大きな店や茶屋^{たな}などを訪問、良順とその弟子たちと共に引札を配置して歩く作業に加わった。

三、松本良順とその弟子

ポンペに弟子入りし、やがて良き相棒となつてゆく松本良順が奥医師見習いであることは前章で述べた。奥医師というのは將軍に仕える幕府の医師であるが、蘭方の外科以外は多紀派という漢方医たちが主要ポストを独占していた。良順が婿入りをした松本良甫^{りようほ}の家も漢方の本道(内科)に属していて、跡取りの良順もまた漢方医の一人ということになる。その良順が何故、漢方ではなく幕府が禁じる蘭医学^{らんがく}を、わざわざ長崎のオランダ医ポンペに学びに来たのであろうか？その波乱に満ちた経緯については、場面を長崎から江戸に移して探索してみよう。

良順が生まれたのは江戸の麻布で、父は佐藤泰然^{たいぜん}という蘭医学者であった。その父泰然は、20代の半ばを過ぎてから奥医師の松本良甫と共に蘭方医である足立長雋^{ちやうしゆん}に入門、やがて二人は刎頸^{ふんけい}の友となつてゆく。泰然は、長雋のほかにもシーボルトの弟子であつた高野長英にオランダ語を学んだが、更なる蘭学修得を目指して長崎への遊学を決意。姓を母方の和田に改め、妻子を父と義兄に預けて江戸を発った。次男の良順が3歳になる天保6年(1835)の正月のことである。

しかし、長崎の出島にはオランダの医師は一人も居なかつた。シーボルト事件のあおりで、オランダ政府は日本への医師派遣を取り止めていたのである。仕方がなく泰然は通詞の一族が開く檜崎塾や吉雄塾で蘭医学を、商館長のニーマンにオランダ語や蘭学を学んだ。3年後、江戸に戻った泰然は、日本橋薬研堀に「和田塾」を開設する。江戸には高名な蘭学塾もあつたが、長崎から泰然^{たいぜん}についてきた林洞海^{とうかい}らが泰然を盛り立て、和田塾はたちまち江戸有数の蘭医学塾として名を

上げていった。

しかし、時代は海外に目を向ける学者への逆風が吹いていて、蘭医学塾に対する締め付けも強まってきた。加えて、和田塾を開いた翌年に幕府の蘭学者の弾圧事件、いわゆる「蚕社の獄」が勃発する。泰然は、お尋ね者となった高野長英と親交があり、長英をかくまった疑いで目付に監視されるなど、身に迫ってくる危険を察知。葉研堀の和田塾を娘婿となった林洞海に譲って、天保14年(1843)に下総の佐倉藩へと逃れた。

逃亡の手引きをしたのは、佐倉藩の家老渡辺弥一兵衛。藩主は蘭癖大名と言われた堀田正睦であり、江戸のような危険はなかったのである。家老の弥一兵衛は佐倉藩に仕えることを勧めたが、泰然は「藩医はワシの性に合わぬ」とこれを拒否。町外れの畑地に外科塾の「順天堂」を開設し、和田の姓を本来の佐藤に戻した。このとき門人の山口舜海しゅんかいらが佐倉に同行し、当時は他に例を見ない帝王切開や卵巣水腫の手術を行い、外科に優れた順天堂の礎を築いてゆく。この逃亡

劇のあいだ、息子の良順は母方の家に留まったが、5年後の嘉永元年(1848)に佐倉へ移住し、順天堂で父泰然の助手を務めるようになった。

一方、泰然の親友である松本良甫には一粒種の娘がいた。良甫は妙齢を迎えた娘によい婿を取りたいと、佐倉で多くの弟子を集める泰然に娘婿の紹介を頼んだ。無二の親友良帆の頼みであれば優秀な若者を……と、泰然は一番弟子の山口瞬海を江戸に差し向ける。ところが、瞬海は松本家に着いても良甫の娘にはまったく関心を示さず、朝から晩まで医学書に首つ引き、彼は医術一筋に生きる男であった。それを見た娘も、「この男と祝言を挙げるのは嫌でございます」と瞬海を拒否。それを知った泰然は、「然らば良順では如何か」と我が子を惜しげもなく松本家に差し出す。良甫の娘も一目で良順が気に入り、嘉永2年(1849)に良順は松本家の婿養子となった。

かくして松本家の婿養子となった良順であるが、家督を継ぐ「奥医師見習」に認められることは容易でなかった。前述

のように奥医師は外科の桂川家を除き、すべてが漢方医で占められ、松本家もまたしかりである。その松本家に、高名な蘭方医の息子である良順が婿入りしたのであるから、奥医師のトップ多紀楽真院をはじめ、多くの漢方医たちは猛反発。「由緒ある奥医師に漢方を知らぬ医師を迎えるわけにはいかぬ」と、江戸城への出仕に難色を示した。

当時のしきたりとして奥医師の家が婿養子を取る場合には、まず多紀楽真院にお伺いを立てる。そして、楽真院が薦める漢方医の子息を迎えることが慣例になっていた。ところが松本良甫は、長老の楽真院を無視して縁組を進め、しかも蘭方医の子息を婿養子に迎えたのであるから楽真院の怒りは収まらない。

「良甫殿、分かつておろうが漢方を解せぬ医者が城に詰めることは相ならぬぞ」

「楽真院様、うちの婿良順は奥医師として認めぬと申されるか？」

「漢方が解ければ良いのじゃが、婿殿には無理でござろう」

「漢方は、それがしが追い追い教えて参る所存」

「何と悠長なことを！ いま、解せねば話にならぬ」

「しからば、如何様にすればよいのでござるか？」

「恒例により漢方の試験を致す。その試験に合格すれば、婿殿を認めてもよからう」

「分かり申した。婿によく伝えまする」

楽真院が命じた漢方の試験は松本家に対する嫌がらせともとれるが、奥医師になるための慣例でもあった。奥医師の多くは幕府直轄の「医学館」で漢方を修行した多紀派の医師たちである。その医学館の館長は多紀氏の世襲であったため、医学館の出身者はそのように呼ばれ、格別に優遇されていた。多紀派であれば簡単に認められる奥医師資格であったが、それ以外の医師には難しい試験が課されたのである。

居丈高に言う楽真院に気押されることもなく、松本良甫は胸を張って婿の試験を受け入れた。そして江戸城を後にしたものの試験を受けるのは娘婿の良順である。その良順は幼時から父泰然に蘭方を学んできたため、漢方の知識はほとんど

身についていない。そこに「漢方の権威者による試験」であるから、合格は極めて難しいことになる。

やがて楽真院から試験の日時を知らせる文書が松本家に届いた。試験日までの準備期間は三ヶ月にも満たない。通常、漢方の基礎から臨床までをすべて学ぶとすれば、急いでも一年や二年の歳月を要す。そこで良甫は、漢方全般の知識を飛び越え、出題が予想される難問だけに焦点を絞った。良順に、「難解本の丸暗記」を命じたのである。

漢方の試験は、江戸城内の一室で執り行われた。真楽院を筆頭に、数名の試験官が居並ぶ席で難問の筆記試験や口頭試問が進んでゆく。それらの設問は良甫から指示された教本に載っている問題ばかりで、良順は暗記した内容をすらすらと答えてゆく。もちろん、結果はその場で合格。良順は晴れて奥医師見習いの地位を得て、松本家の跡継ぎとして認められることになった。

かくして、良順は義父良甫に付き添って登城し、控えの間に詰める奥医師の勤めと、在宅時にやって来る患者の診療に

明け暮れる日々が始まった。しかし、幼時より蘭方を学び、蘭方が漢方より優れると確信する良順は、形ばかりの城勤めと、たまに来る患者の診療に物足りなさを感じていた。

折しも、時節は激動の時代に突入していた。良順の入婿から四年後の嘉永6年(1853)の夏に黒船騒動が勃発。翌年3月に再び浦賀にやってきたペリー提督は、武力をちらつかせて江戸幕府に日米和親条約を結ばせた。そして、その年(1857)の春には日米通商条約の前段階となる下田条約を締結したところである。さらに英仏やロシアもアメリカに追随して通商条約の締結を求め、下田、函館に加えて横浜や神戸の開港を迫っている。もはや「太平の眠り」をむさぼっている時ではなかった。

——このような時世に、医术は旧態依然の漢方だけで良いのか？ 目覚ましい進歩を遂げる海外の国々に後れを取ってしまう……。

その思いに駆られる良順のもとに、「長崎にオランダの医師がやってくる」という噂が飛び込んできた。噂の出所は、昨

年まで長崎海軍伝習所の総督を務めていた永井玄蕃守尚志なおゆきである。良順はそれを知ると居ても立ってもいられず、築地の講武所に新設された軍艦教授所(後の軍艦操練所)に永井尚志を訪ねた。

尚志は、カッテンディーケの前任者ライケンに軍艦の航行や砲術を直に学んで、西洋の進んだ科学技術を体感し、身にも着けてきた。恐らく医学の領域においても、オランダは日本より遥かに優れたものがあるに違いない。その進んだ蘭医学を学びたいという良順の願いはもつともなことであり、尚志は是非、学ぶべきであるとも思った。

しかし、当世の医術は漢方に限られ、「蘭方禁止令」が布かれている。幕府の奥医師見習いである良順が、自ら禁止令を破って長崎に遊学することが許される道理はない。それでもなお、蘭医学を学びたいと懇願する良順にほだされて、尚志は妙案を思いついた。

「良順殿、ワシはいま、長崎海軍伝習所に入る第二次の生徒を集めておる。海軍創設には航海術や砲術に限らず、船医の

養成も必要になるう。そのため、此度の教育掛りには医師も入れてくれるように、オランダ政府に要請したのじゃ」

「なるほど、船医の養成ですな」

「左様、蘭方などと言わず、海軍伝習所に入りたいと言え角も立つまい」

「分かり申した。是非、それがしを長崎伝習所の生徒に加えて下され」

船医の候補者を募集する尚志と、蘭医学を学びたい良順の願いがぴたりと一致した。後は幕府上層部の許可であるが、幸いなことに老中首座は阿部正弘に代わって、佐倉藩の藩主堀田正睦が就任していた。正睦は蘭癖大名と揶揄やゆされるほどの親蘭家であり、この話に異を唱えることはあり得ない。江戸城内に絶大な権力を振るう漢方医集団の多紀派の反発は想定されるが、老中が背中を押してくれば心強いことこの上もない。

軍艦教授所のトップ永井尚志の計らいで、良順は念願の長崎海軍伝習所に入れることとなった。その知らせを受けた良

順は、佐渡に住む一人の若者に手紙を送り、「一緒に長崎に行かないか」と誘った。その若者とは島倉伊之助、長じて司馬凌海りょうかいと名乗る男である。

伊之助は十一歳のとき、佐渡で質屋を営む祖父に付き添われて江戸にやってきた。そして、唐津藩の儒者山田寛に弟子入りして漢学を学び、非凡な能力を発揮する。伊之助が十三歳になったとき、奥医師の松本良甫は、娘婿良順の下僕に……と伊之助を屋敷に雇い入れる。彼は天才的に物覚えがよく、一度聞いたり読んだりしたことは正確に記憶することができた。下僕として松本家に仕えている間に、オランダ語や蘭医学のイロハを難なく身に着けていく。その卓抜した能力に目を付けた良順は、伊之助に佐倉藩の順天堂に行くことを薦めた。知識欲旺盛な伊之助は、嬉々として佐倉藩に向かい、良順の実父佐藤泰然のもとで蘭医学やオランダ語に一段と磨きをかけた。

最新の蘭医学を修めた伊之助は郷里の佐渡に戻って、開業医の看板を生家に掲げた。しかし、彼は患者を相手にする診

療が苦手というより、世間一般で言う「人付き合い」がうまくできない質たちの男である。医院の評判はすこぶる悪くて、狭い佐渡では訪れる患者もいなかった。そのような折に、江戸の良順から長崎に行く話が持ち掛けられたのである。

患者も来ない生家でくすぶっていた伊之助は、良順からの手紙に眼の色を変えた。そして、長崎行きを決意すると家督を弟に譲って、自らは司馬凌海と改名。小躍りするように佐渡を飛びたち、江戸の平河町へと向かう。その伊之助を待つ良順は長崎行の許可が出たとき、直ぐに「供は島倉伊之助」と考えて手紙を認めた。オランダの医師から医学を学ぶには、先ず言葉の障壁が問題になるに違いない。そのとき、オランダ語に堪能な伊之助が居れば心強いし、大いに役立つであろうと考えたのであった。

伊之助が江戸平河町の松本邸に到着した翌朝、良順はまだ暗いうちに家を出た。安政4年(1857)の閏5月、長崎伝習之御用”を命じられた松本良順とその供である伊之助改め司馬凌海は、まだ見ぬオランダの医師と最新の蘭医学に胸

をときめかせて、東海道を西へと急いだのである。

四、医学伝習所の開講

ポンペが「阿片に手を染めてはならぬ」という引札を作成して、市中にばらまいているあいだに医学伝習所の開設場所やカリキュラム等が煮詰まってきた。一方、奉行所から「幕臣でなくても自分の弟子であれば聴講可」という許可を取り付けた松本良順は、多くの医師に声掛けをして、ポンペの医学所への入所を誘った。司馬凌海をはじめ、長崎で開業あるいは諸藩から遊学に來ている医師たちである。諸般の準備が整い、1857年十一月十二日に、長崎奉行所の西役所で最初の講義が開始される。

このときの生徒は12名、ポンペは冒頭に長い演説をして、持ち前の信念を披露。医学は物理・化学、生理学等々の自然科学全般を理解した上で初めて成り立つものであり、内科や外科もすべてしかり。時間はかかるが、まずは医学に不可欠

な科目を辛抱強く習得するようにと説いた。しかし、生徒たちは凌海と良順を除いて、ポンペの演説を聞き取ることが出来なかった。オランダ語の医学書を読むことは出来ても、話し言葉を聞く力はまったくなかったのである。

長い演説を終えた後で、ポンペは生徒らに「私の話は分かりましたか？」と理解度を確かめる質問を投げかけた。しかし、返事がないばかりか、自分が質問をされていることすら伝わっていない。翌日、ポンペは生徒らの医学やその基礎となる科学知識について試験を試みた。言葉が通じないことは前日に理解したので、通詞を通しての口頭試問である。人前でテストされる経験がなかった生徒たちは恥じらいのためか口が重く、オランダ語に精通している通詞らも、初めて聞く医学用語を和訳することが出来ない。遅々として進まないテストを通して、ポンペは生徒らの医学知識は断片的なもので、基礎となる科学的知識に至っては皆無に等しいこと。そして、決定的な障壁になるのは「ことば」であることを知った。「医師であれば少しはオランダ語が話せるであろう」とい

うポンペの期待は完全に裏切られ、有能な通詞を介しても、円滑な講義は難しいことを思い知らされた。

ポンペは、この言葉の障壁について相棒の良順に相談を持ち掛けた。そして、何よりもオランダ語の会話修得が先決問題ということになり、生徒にオランダ語の話し言葉を学ばせる。具体的には、海軍伝習所の講師陣に加わっていた商船学校の教師に頼んで、オランダ語会話に打ち込ませた。さらに、ポンペ自身も日本語の勉強に取り組み、通詞が話す長崎弁を少しずつ話せるようになってゆく。

双方の努力で言葉の障壁は次第に解消されつつあったが、ポンペは次の壁に突き当たった。それは、手始めに行った基礎医学の講義が、生徒には難し過ぎて理解できないという問題である。彼は、自身がユトレヒト大学で学んだ教科書やその時のノートを試験的に用いてみたが、生徒には自然科学の知識がまったくない。物理には欠かせない数学に至っては、「商人が物の売り買いに用いるもので、武士や藩医が学ぶものに非ず……」と言い出す者も現れる始末。日本人の算術に

対する蔑視もあったが、それ以上に生徒らは数字や計算が苦手で、講義を先に進められない。そのような生徒らを相手に、最新のオランダ医学を教育することは余りにもギャップが大き過ぎた。

ポンペは教材について悩んだ末に、持参した教科書より遙かに易しい『手引書』を自ら作成することにした。医学伝習所の講義では、その手引書をゆつくり読み上げ、生徒らにオランダ語で書き取らせる。次に、同席する通詞に和訳を促し、翻訳した文章を筆記させれば理解できる……。そう思ってた講義であったが、やはりポンペの言葉を正確に書き取る生徒は良順と凌海だけに限られた。通詞たちの翻訳も、医学や科学の専門用語になると歯が立たず、オランダ語をそのままカナ書きで表記することしかできない。

結局、司馬凌海の正確なメモと、それを和訳した文章が生徒らの実質的な教科書になってゆく。凌海は、ポンペの講義が終わると自身が書き取ったメモを翻訳し、それを希望する生徒たちに貸し出す。受け取った生徒らは順繰りに翻訳文を

書き写し、それをテキストにして夜遅くまで勉強に勤^{いそ}しんだ。仲間^{いそ}に乞^{いそ}われて翻訳を続ける凌海は、オランダ語に限らず漢文にも長けていて、さらに既存の蘭方医学も修得済みである。それらの有り余る知識をフルに活かして、ポンペが話した講義をまたたく間に和文に書き換えていく。彼は、初めて聞くオランダ語であっても、即興的に対応する漢字を当て嵌める、或いは新たな「造語」を創り出して、的確な日本語に仕上げていたのである。

そうこうするうちに生徒らの会話力も上がってきて、ゆっくりであれば質疑応答が可能になってきた。ポンペも、長崎弁の日本語ではあったが、少しだけ日本語が分かるようになっていた。師弟間の意思疎通は教育上好ましいと言えるが、その一方でポンペの講義に対する不満も表に現れてきた。町中で開業している医師や長崎遊学に來た藩医たちが、「自分たちは内科や外科の話が聞きたくてここに來た。難しい物理や化学等の講義はもう沢山だから早く臨床を教えて欲しい……」と言い出す。その不満交じりの要望を耳にしたポンペ

は、真つ向から彼らの要望を拒み、厳しい言葉で叱責する。「基礎の学問なくして臨床は成り立たぬ、それが理解できぬ者はここを去るがよい！」

若いポンペの頑なな態度に腹を立てて教場を後にする生徒も現れ始めた。ポンペは、最初に12人の生徒を前にしたとき「歳が行き過ぎている」と感じていた。「最新の西洋医学を一から学ぶには『若さ』が求められ、既に他の医師を身に着けた年配の医師には無理であろう……」というポンペの予測は見事に的中、辞めていく生徒らはいずれも年配の医師に限られていた。それと入れ替わりに若い生徒、ポンペの噂を聞きつけて、諸国から若手の医師が集まってきた。生徒の減少を案じた松本良順が、諸藩に呼び掛けをして、医師集めに奔走したことは言うまでもない。それらの医師は日毎に増えてきて、開講から一ヶ月を過ぎた頃には40名近くに膨らんできた。

そうになると、教場は西役所の一室では手狭になる。また、海軍伝習所の教育訓練の妨げにもなり兼ねない。そこでポン

へと良順は、総督の木村図書に新たな教場がないかと相談を持ち掛ける。図書は、ポンペの医学所の隆盛を好ましく思っていたので、奉行の岡部長常と打ち合わせ、高島秋帆邸に目を付けた。その邸宅は出島から南西方向に10町余り坂を上った小島郷(現東小島町)にある。四周を石垣で取り囲んだ広い敷地に、今は空き家となった大きな母屋と長屋があった。

ここで高島秋帆について簡単に述べておこう。秋帆は、長崎の町年寄りの家に生まれ、父より砲術を学んだ砲術家である。彼の本宅は大村町(現万才町)にあったが、天保9年(1838)の大火で焼失したため、小島郷の別邸に移り住んだ。長崎奉行の長常たちが目を付けた建物は、この別邸である。

秋帆は、日本式の砲術を修得後に西洋の砲術を目にして、その格差に驚愕。出島のオランダ商館長に頼んで洋式砲術を学び、私費で大砲やゲベル銃等を買ひ揃えた。高島式砲術を掲げた彼の許には各地から門人が集まり、多いときには三百人を超えることもあったという。時を同じくして、中国では阿片戦争が勃発、危機感を抱いた秋帆は幕府に火砲の近代

化を訴える意見書を提出し、武蔵国徳丸原(現板橋区高島平)で洋式砲術の公開演習を敢行する。天保12年(1841)の5月、長崎から百人もの門人を引連れての演習であった。この大掛かりな演習により、秋帆は砲術の専門家として重用され、幕府から「火技中興洋兵開基」とまで讃えられた。

しかし、秋帆を妬む幕臣から「長崎会所の長年にわたる杜撰な運営」を咎められ、会所の頭取であった秋帆は演習の翌年に逮捕・投獄の憂き目に遭う。オランダより大量の武器を買ひ付けた秋帆には謀叛の疑いがある」とあらぬ濡れ衣まで着せられ、高島家は断絶となった。その後、武蔵国岡部藩(現埼玉県深谷市)に幽閉されたが、嘉永6年(1853)のペリー来航により世情は一変。秋帆は12年後に罪を許され、今は築地の講武所支配および師範として砲術訓練の指導に当たっている。

その秋帆の別邸には、医学所の講義に向けた大広間があるばかりか、高島式砲術の門人のために建てられた長屋がある。長崎奉行の長常と伝習所総監の図書は手際よく手続きを進

め、松本良順とポンペに医学伝習所の移転を告げた。良順は、それまで西坂の本蓮寺に寄宿していたが、荷物を取り纏めて小島郷に引越しをする。そして、部屋が30ほど連なる長屋の真ん中に住み込み、寮長の役割を引き受けた。もちろん、語学に強い司馬凌海や他の生徒らも行動を共にして、全員が長屋の各部屋に寄宿する。

一方、教師であるポンペは、この長屋には居住せず、出島の家から小島郷の別邸までの坂道を毎日通った。そして、午前と午後に2時間ずつの講義をして、その後は翌日の手引書の作成に当たる。生徒たちは復習に時間を掛け、よく解らない語句等があれば、凌海に助けを求めて理解を深めた。

ポンペの教科課程は物理、化学、ほうたい繙帯学、人体解剖学、組織学、生理学の総論と各論、病理学等々、想像を絶するほど多岐に及んだ。それらの教科は、初めて学ぶことばかりなので、生徒らの質問は必然的に同じことの繰り返しになってゆく。ほぼ同じ質問に二度、三度と繰り返して答え、さらに解説を加えることは教師にとって苦痛以外の何物でもない。そ

れでもポンペは忍耐強く各科目の講義と質疑をこなし、生徒に對しては「完全に理解できるまで質問をするように」と促していた。

五、公開の種痘と日本人の診療

ポンペは、医学伝習所の講義に追われていたが、医師としての務めも怠ることは無かった。先ず、手始めに行った医療行為は「公開の種痘」である。そのきっかけは、日本ほど天然痘に罹患した人が多い国は見ることがない、顔に痘痕あばたのある人が住民の3分の1近くを占めるほど多かったのである。その理由について、ポンペは次のように推測した。

今から三十年も前に、牛由来の種痘は日本に伝えられている。かの有名なシーボルトがバタビアから牛種痘を長崎の出島に持ち込み、何度も幼児への接種を試みた。しかし、長い船旅の途中で痘苗が腐敗して、なかなかうまくいかない。繰り返して痘苗を取り寄せ、試行錯誤を重ねるうちにスパイ容疑

事件が勃発。シーボルトは伊能図など国禁の品を持ち出そうとした罪で日本御構おかまえ(国外追放)となり、その結果牛種痘も日本に定着することはなかった。

事件から二十年ほどが経った1849年に、長崎にやってきた軍医モーニッケが、再び種痘の導入に取り組む。彼は、バタビアから持ち込んだ牛種痘を規則正しく管理する仕組みを長崎に作り上げ、絶えず良質な痘苗の維持に注力。他の地域から要請があれば、快く頒布もした。その種痘に並々ならぬ熱意を示したのは長崎に近い佐賀藩であった。この藩は、藩医であった伊東玄朴の進言により痘苗をオランダ商館に依頼、提供された牛種痘を無料で藩領の子供たちに接種する。さらに、佐賀から江戸の佐賀藩邸にも痘苗が送られたことをきっかけに、江戸はもとより関東、東北にまで広まってゆく。もちろん、この牛種痘は京都、大阪等にも普及したことは言うまでもない。

モーニッケの日本滞在は三年と短かったが、彼の帰国後も種痘はしばらくのあいだ続いた。しかし、後任の軍医ブルツ

クが種痘に無関心であったため、数年も経たずして衰退してしまう。バタビアからの新鮮な痘苗は途絶え、日本国内の間から人間へと引き継がれるだけで、何の監督も行われない。その結果、種痘は古くなって予防力が低下し、種痘に対する民衆の信頼も失墜した。そうになると、天然痘の流行は再び激しさを増し、ポンペ来日の数年前には夥おびただしい死者が出た。その大流行の一因として、ポンペは牛種痘の欠如に加えて患者の看護の仕方が悪いことに気付いていた。日本では、天然痘の患者がまだ治りきっていないうちに病床から起こし、さらに外出まで許すという愚挙を行っていたのである。この完治していない患者たちが、周辺の免疫のない幼児らに天然痘をうつして、感染を拡大させていたことは明らかであった。

ポンペの来日から間もない1858年1月に、再び日本に天然痘が流行り始めた。長崎に牛由来の痘苗はなかったが、幸い上海から入港した中国船に一人の宣教師が乗っていた。その宣教師からポンペは牛痘苗を少し入手できたので、これをもって種痘を開始する。さらに、牛痘苗の製造と人への接

種が進んでいるバタビアから新鮮な痘苗を取り寄せ、長崎の幼児たちに接種。その人数は、この年だけでも218名を数えた。

さらにポンペは、長崎で牛痘苗を製造することにも力を注ぐ。長崎奉行の岡部長常は前述のように開明的で、西洋の優れた医学や科学技術に前向きであった。牛痘苗を作りたいというポンペの要請を江戸表に伝え、すみやかに数頭の牛を手配。ポンペは、奉行から提供された牛を用いて新鮮な痘苗を作り、培養増殖に努める。そして、出来上がった痘苗を希望する他の地域にも広く頒布していった。

天然痘の脅威に晒されていた幕府や各地の藩はこぞってポンペに痘苗の提供を申し入れた。中には、大名が直々に痘を領民に義務付けたところもある。例えば、薩摩藩の場合は、幼児が二歳になるとすべて痘を受けなければならないと義務付け、もし従わない領民がいた場合には強制的に接種を施行している。

江戸では、伊東玄朴を筆頭に、83名の蘭方医が資金を出

し合って、「お玉が池種痘所」を開設し、貧しい家の児童には無料で接種が進められた。この種痘所は、安政五年(1858)の五月に設立されたものの、半年後に貫い火で焼失、その後、銚子の豪商濱口悟陵（こりやう）の多大な資金援助により再建している。

日本人は天然痘の恐ろしさや後遺症に苦しんできたためか、種痘には極めて協力的で、幕府からも多くの支援が得られた。ポンペが痘苗を提供する際に条件とした「接種後の結果報告」についても、ほぼ期待通りの報告が集まってきた。それらの回答を見ると、失敗に帰した例も3分の1ほどあることが判明。その原因は接種した医者（いしや）の技術不足と種痘直後の入浴、それも高温長時間にわたる入浴や種痘個所の着物の袖による摩擦などが考えられた。

なお、牛種痘のほかにも日本では古くから人由来の痘苗を接種する「人痘法」（じんとうぽう）も行われていた。それは天然痘患者の痘から採取した膿（うみ）や痂痂（かさかさ）を未感染児の鼻孔に塗り付ける方法で、松本良順も幼時に父泰然の手で接種されている。その人痘法でも天然痘の予防は可能であったが、接種後に重症化する

る脅威を伴った。従つて、誰もが安心して受けられる予防法とは言えず、広く普及することもなかったのである。

牛種痘の受け容れと実施、広い地域への普及については、ポンペが期待した以上の成果を収めた。しかし、ポンペが来日してすぐに行った「医療以外の目的で阿片を用いてはならない」という取り組みは、いつの間にか消滅してしまった。多忙を極めるポンペに詳細を調べる余裕はなかったが、ある時、親しい通詞がそつと耳打ちをしてくれた。その通詞によると、奉行所が市中に配布した引札(チラシ)を一枚残らず回収して焼却したのだと言う。その理由は、「いま江戸で進められているペリーとの日米通商条約締結に差し障りが出るから」という幕命によるものだった。

ポンペは、医学伝習所で生徒らに教えるかたわら、患者の診療にも力を注いだ。ヤパン号で来日した海軍伝習所の教師団はもちろん、長崎に寄港する外国船の乗組員の怪我や病気の診療も精力的にこなした。その診療において悔やまれるこ

とは、ヤパン号の水兵二人が日本に到着して間もなく死亡したことである。ポンペは、二人の治療に全力を尽くしたものの、彼らの命を救うことが出来なかった。今まで経験したことがない水夫の死に直面し、ポンペは日本特有の気候が影響しているに違いない。日中の暖かさと朝晩の冷え込みとの温度差が大きいために、呼吸器疾患などで健康を害することが多くなるのでは……と考えた。

外国人にとどまらず、ポンペは日本人の往診を頼まれることも少なくはなかった。しかし、長いあいだ鎖国政策を布いてきた日本では、直接日本人の患者を診ることは禁じられている。一般の日本人がポンペ医師の診察を受けるためには、先ず町乙名、次いで町年寄さらに長崎奉行の許可を得なければならない。加えて診察の際には、目付と通詞が常時同席していなければならないという規則になっていた。

その背景には、長いあいだの鎖国政策があつて、幕府は外国人をスパイ視して端から信用する気がなかった。そのため、出島のオランダ医たちは直接日本人の患者を診ることを許

されず、力になりたくても中途半端な支援しかできない。もし、出来ることがあるとすれば、書面、或いは通訳の口を介しての助言ぐらいにとどまった。ポンペの二代前の軍医モーニッケも指摘していたが、そのようなやり方は時代遅れで、日蘭和親条約が結ばれた今は、何とか改善をしなければならな
ないと思われた。

旧態依然、形式一点張りの日本の規則は実に煩わしく、医師のポンペにとつては侮辱的でもあった。そこで彼は意を決し、長崎奉行の常長に直接掛け合つた。もし、彼が日本人に医療上の援助を与えるとすれば、それはすべての日本人にとつて利益になることであり、また誰の力も借りずに、ポンペ自身が多くの仕事と責任を引き受けること。そしてどんな病人であつても、上下の差別なく無料で診察することを強く申し出たのである。彼が、診療は「どんな患者でも無料」としたことについて、ポンペは次のように考えた。

——もし、診察料を徴収すると言つたら「金儲けの下心があるに違いない」と勘繰られるであらうし、さらに「自分を

全面的に信じて患者を直接診療させてくれ」と強く要求できなくなつてしまう……。

若いポンペは、奉行の長常を正面から見据えて強い口調で言つた。

「お奉行様、私が政治的に信用できないとか、日本人と交流することが危険だとお考えならば、はつきりそう申して下さい。もし、そのような嫌疑が掛けられているのであれば、私は医学教育を続けることなど出来ません！ 日本を引き払つて、オランダに帰るだけです」

「ポンペ殿、そう悪意にとつてはならぬぞ。其方に対する嫌疑など何も有り申さぬ」

「では、悪しき習慣は即刻、取り止めてくれますか？」

「いや、日本には鎖国を守らんとする祖法があり、それがまだ改められておらぬ。それ故、しばしのあいだは規則に従つて頂かねばならぬ」

しかし、ポンペは首を縦には振らず、さらに主張を続ける。「お奉行がそう言うのであれば、私は今後、日本人の患者は

一切診ません！」

「かように立腹されては困る……。さすればポンペ殿の考えを江戸に伝えて、幕府の裁定を伺い申そう」

ポンペは、また役人特有の断り文句を並べていると思いがら、あくまでも自分の考えを押し通す覚悟を固めた。

ポンペは、その後も奉行に己の主張を繰り返す一方で、松本良順にも協力を求めた。彼は、いま教えている基礎科目が終了した後に、内科学や外科学、手術の臨床講義を予定していた。その臨床講義では、生徒と共に患者を診察できる体制が不可欠であり、その体制が整っていなければ臨床医の育成はできない。その近未来の臨床講義の在り方や進め方を良順に十分納得させて、共に幕府や長崎奉行の考えを変えさせようと働きかけたのである。

ポンペの相棒である良順は、西洋医学を本格的に導入するためにポンペの主張を全面的に受け容れることが不可避であることを理解した。すなわち、教師のポンペが直接日本人患者を診察して、生徒に実地指導をするのであれば臨床

の実技は伝えて貰えない。そのことに気付くと、良順はポンペが日本人患者を直接診察することの重要性を奉行の常長らに強く訴えた。

やがて、奉行所から通達があり、「目付が一人同席していればポンペは患者を診察してもよい」という回答が届いた。しかし、この回答にポンペは納得することはなかった。出島の自宅から息を切らせて西役所に駆け込むと、声高に直談判。「お奉行様、患者の診察に役人が立ち会って何を記録するのでしょうか。医師と患者のやり取りを書き写して、江戸の幕府に報告させると言うのですか！」と更なる改善を迫って引き下がらない。

血気盛んなポンペの抗議に良順の後押しも加わって、ついに要求は認められる。長崎奉行長常が下した結論は、「すべての患者は先ず松本良順に診察を依頼し、その後に良順とポンペは共に当該患者の診療を行い、他のいかなる人も診療に干渉してはならない」というものであった。

鎖国下の旧習を打破するこの結果に、ポンペは大変満足し

だが、それは次の困難の入り口でしかなかった。「ポンペ医師が日本人を直接診察してくれる」ということが広く知れ渡ると、患者が各地から押し寄せてきた。しかし、それらはすべて身分が高い役人ばかりで、貧しい町民や農民は一人もいない。それに気付いたポンペは、その理由を探索してみた。その結果、ポンペが直に診療してくれる日本人は上層階級、とくに身分の高い役人たちの特権であると解釈されていたのである。憤慨したポンペは、奉行所の役人や通詞たちに問い質した。

「私が診療することに、一体どのような権利があつて口を挟んでくるのか！」

「それはとても簡単なこと。仮にドクトルが小さな家や掘立小屋に往診に行ったならば、ポンペ殿の体面は丸潰れになり申そう」

その返事に納得がいけないポンペは、複数の生徒にも意見を求めた。しかし、生徒らは口を揃えて、「それは、ドクトルのことを思つての言葉でござろう」と言うばかりである。

日本社会に深く根付いた偏見にポンペは挫けるどころか、逆に「今こそまさに改革を為すべき時」と奮い立った。彼は、とくに偏見が甚だしい江戸からやって来た医師たちを相手に言い聞かせる。

「医師にとつては階級の差別など何もない！ 貧富・上下の差別もなく、ただ患者があるだけである」

ポンペは当たり前のことを教えている心算であつたが、生徒らはまったく理解できないし、同意できることではないと反論する。

「ヨーロッパは左様かも知れぬが、日本では考えられぬ。仮にドクトルの言うことが正しいとすれば、何故、医師の間には色々な階級や地位があるのでござるか？」

「私は、日本の誤つた社会習慣を認め、支持するためにやって来たのではない。諸君がまだ知らないヨーロッパの良い事例を導入するために遥々^{はるばる}やって来たのだ」

「ドクトルの西洋医学とは、そういうものでござるか？」

「その通り。患者の診立てや手術にとどまらず、支援を求め

るすべての患者を分け隔てなく診療することは医学の大前提になる」

「なれど、將軍や大名に仕える御典医が、病んだ百姓や町人の診立てをすることなど到底考えらぬことござる」

「であれば、私の生徒としての資格はないと言わねばならぬ。すみやかに国許にお引き取り願いたい」

執拗なまでに楯突く生徒らには、これまでの誤った考えを正すように要求し、ポンペは一步も後に引かない。激しいやり取りを繰り返すうちに、生徒らはポンペの確たる信念を「そういうものか……」と徐々に受け容れるようになっていく。何より、ポンペが実際に大怪我や腹痛で転がり込んできた町人を何の躊躇ためらいもなく治療する姿を見ると、不満顔の生徒らの抵抗は日を追う毎に薄らいでいった。

その過程は簡単ではなかったが、ポンペの熱い主張と実践医療は生徒にとどまらず、役人や奉行にも認められていった。やがて、幕府から布令が出され、庶民はいつでもポンペの診療を受けられる、身分や位の上下に関係なく無料でポンペの

診察を受けられることになった。

彼が情熱を傾けて突破した日本の古くて固い壁であったが、その裏にはオランダ政府の強い後押しがあったことを無視するわけにはいかない。長崎奉行を相手に喧嘩腰で診療の自由を迫ることが出来たのも、「それはオランダ政府の考えである」という信念がポンペにあったからである。実際にオランダ政府の弁務官クルチウスは、出島にある貯蔵品の中から必要な薬品を病人に、薬代が支払えない人々には無料で提供してよい……とポンペに許可を出している。その時、日本ではヨーロッパの薬品は底をついていて、殆ど手に入らない状況にあった。それにも拘らず、クルチウスはポンペに全権を与え、病人の診療に支障を起こさないように取り計らったのである。

オランダ政府の後方支援もあって、ポンペは日本人の診療を自由に出来るようになった。その際に、彼は必ず二、三人の生徒を同席させたり往診に連れて行ったりした。そして、同行の生徒らにポンペの診察や処置のやり方を詳細に記録

させる。そのような経験を通して、生徒らに進歩が見られたときには生徒に単独で病人の治療をさせて、ポンペは脇で監督をするように努めた。この「臨床実習」ともいえる診療のめ方は効果的で、顕著な教育成果に結び付いた。間もなく、生徒たちはオランダ医学に今まで以上に信頼を寄せるようになり、漢方や日本古来の医学より勝っていることを確信するようになってゆくのである。

（以下、次号）

【あとがき】

本作は、前号の『若きオランダ医 ポンペ』の続編に当たるが、今回はタイトルを標記に改め、さらに第1章を全面的に書き直している。その理由は、多くの参考資料を読み漁っているうちに小説執筆のイロハを忘れ、伝記や歴史書に似た文章に陥ったためである。

小説については、色々な考えがあると思うが、筆者は「人とその人の生きざま」を描くものと考えている。本作も、そのつもりで書き始めたものの、ポンペ来日時の世界情勢やポンペを取り巻く人物描写に紙幅を多く費やしてしまい、主人公が霞んでしまった。そこで、「ポンペはいかなる青年で、何を考え、何を為したのか」を直截的に描き、タイトルもそれに相応しく改題した次第である。

なお、前回の粗筋は、故下村 脩^{おさむ}博士が母校長崎大薬学部
の同窓会で特別講演を行う場面から起筆。博士は、ノーベル
化学賞の受賞は偏に「運が良かった」と繰り返すが、その運
の良さは何に依るものであろうか？ 強いて言うなら、日本
の西端という地の利、西洋の医学・薬学や科学知識が初めて
日本に伝えられ、しつかり根付いた地の大学を卒業したこと
と関係性があるかも知れない……。その歴史絡みの逸話をプ
ロローグに、近代医学・科学の伝道師ともいえるポンペ・メ
ーデルフォールトのストーリーに入っている。

【編集後記】

■地球温暖化の影響であろうか、六月の中旬にもかかわらず三百度超えの酷暑が日本各地を襲っている。その異常気象のさなか、世界では戦争や武力衝突が頻発。ウクライナやガザ地区に加えて、イランとイスラエルの紛争が勃発。何れも解決の糸口さえ掴めない状況にある。

■そのような時節に、『文芸草の丘』の第二八号を発行する運びとなった。今回は詩数編に短編小説、エッセイおよび連載小説が夫々二編の構成。いずれも“力作”と自負したいところであるが、お読み頂いてご批評を賜れば幸いである。

■特筆すべきは、ペンネーム「ねこまくら」氏の新規加入である。発行日直前の投稿のため、新作の時間的余裕はなく、手持ちの詩を3編掲載することとなった。衰退気味であった本誌に新しい風を吹き込んでくれることを期待したい。また、安達真魚が初めての小説に挑戦。鎌倉が没落するまでの経緯を、諏訪頼頭の視点から丁寧に描いている。

■本誌の発行母体である『印旛文学の会』は、今月から“市民公益活動団体”として、印西市の市民活動団体に新規加入した。加入により、本文芸誌が一人でも多くの市民や地域の

人々の目に触れ、多くの人に読まれること。さらに詩や小説、エッセイなどを書いて、投稿してくれる会員が増えることを心より願って止まない。
〈香取 記〉

【会員と連絡先】

安達 真魚 kiyonori.s@gmail.com

いんば 華子 bach.goldberg-variation@hotmail.com

香取 淳 katori.jun27@gmail.com

中川 とら nakagawatoral@gmail.com

ねこまくら nekomakura@gmail.com

畑中 康郎 ktakasug@am.em-net.ne.jp

草の丘 第二八号

発行 二〇二五年 六月二九日

編集兼発行人 印旛文学の会 香取 淳

連絡先(携帯)とメール 080-5533-1002

katori.jun27@gmail.com

URL <https://bungeikusano-oka.raindrop.jp>